

清流70年

兵庫県立加古川東高等学校

清流70年



1951

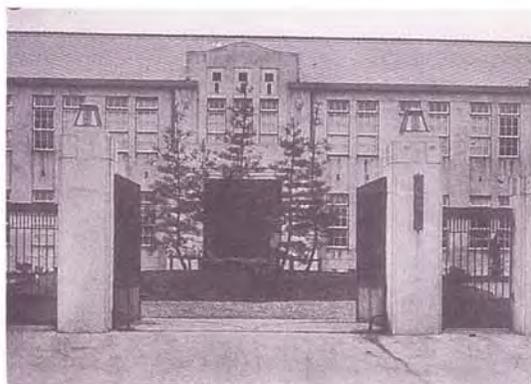
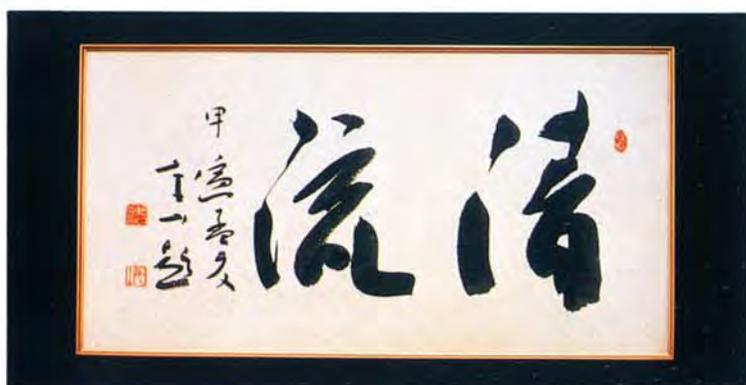
兵庫県立加古川東高等学校



兵庫県立加古川東高等学校

清流70年

(兵庫県立加古川東高等学校創立70周年記念誌)



中学時代校門



過去の記念誌「清流」

兵庫県立加古川東高等学校とその周辺



2 玄関



校門



校舎遠景



粟津神社



鶴林寺



加古川河川敷



相生橋



松風小道



小柳公園



明姫幹線



加古川駅前

校庭



70年のあゆみ

○加古川中学校時代



中学1回(S4年)の校旗



瓜生校長先生筆の額



開校式にて



職員室(S4年)



中学3回(S6年)当時の講堂



中3回ラッパ手



中8回(S11年)教練風景



奉安殿 (S16年)



演奏会 (S16年)



馬術班 (S19年)

加古川東高校時代



校旗 (S23年)



珠算部 (S28年)



洪水の中を下校 (S27年)



正門と本館 (S31年)



東京オリンピック聖火リレー (S39年)



購買部 (S40年)



相撲部国体で優勝 (S43年)



第5期校舎建設工事 (S44年)



創立五十周年「清流館」(S49年)



共通一次試験を目指して (S58年)



数学演習 (S61年)



文化祭、茶道部 (S61年)



避難訓練 (S61年)



卒業記念写真 (H4年)

同和講演会 (H2年)



体育祭にて (H4年)



書初展 (H5年)

歴代学校長

() は在任期間



初代
瓜生兵吉
(大13~15)



六代
青山勇
(昭21~22)



七代(高一)
亀岡寛治
(昭22~26)



八代(高二)
清水敬治
(昭26~31)



九代(高三)
川本猪三郎
(昭31~33)



十四代(高八)
嶋田幸雄
(昭46~49)



十五代(高九)
岩寄宗次郎
(昭49~51)



十六代(高十)
藤本晴保
(昭51~58)



十七代(高十一)
竹一千城
(昭58~61)



二代
藤井慶乗
(大15~昭4)



三代
岩村寅之助
(昭4~9)



四代
中井修一
(昭9~15)



五代
松本従之
(昭15~21)



十代(高四)
井内喜久次
(昭33~38)



十一代(高五)
柴垣武夫
(昭38~41)



十二代(高六)
西村勇
(昭41~43)



十三代(高七)
山本教憲
(昭43~46)



十八代(高十二)
福島浩之
(昭61~平1)



十九代(高十三)
田野勝彦
(平1~3)



二十代(高十四)
磯重美
(平3~平6)



二十一代(高十五)
竹内暉雄
(平6~)

創立70周年記念式典

(平成6年6月7日)



受付風景

制作者中川猛氏のあいさつ



70周年記念モニュメント除幕式



学校長あいさつ



実行委員長あいさつ

旧制兵庫県立加古川中学校
兵庫県立加古川東高等学校 **創立70周年記念式典**



生徒会長よろこびの言葉



加古中学校歌を斉唱

兵庫県立加古川東高等学校 **創立70周年記念**



東京大学農学部教授 農学博士 魚住武司氏(高9回生)による記念講演

祝賀会
(加古川プラザホテル)

旧制兵庫県立加古川中学校
兵庫県立加古川東高等学校 **創立70周年記念祝賀会**



加古川中学校校歌

夫作 桑 蔵 作詞
加 藤 忠 男 作曲

一、流れてつきぬ加古の川

常磐に澄める播磨灘
日本武尊の皇子生れし
遺跡をとくむる印南野の
地は吾が校の立つところ
つどう鶴雛八百人

二、自然の靈気身に始めて

久遠の生命創造らんと
自治の大旗ふりかざし
質実剛健ゆるぎなく
精進む吾が伴 大丈夫の
崇高く遠達けきその希望

三、建国ここに三千年

宇内にきはふ列強に
皇道宣布の大理想
正義の翼堂々と
大和雄叫び高らかに
共に果さんわが使命



加古川東高等学校校歌

富田 碎花 作詞
須藤 五郎 作曲

一、いざ見よ

行く手輝く日の柱
久遠の光に瞳をひらき
自治創造の力一つに
希望の鐘高らかに
うち鳴らせ

光はつねに東より

あ、我等加古川東高校

二、いざ聞け

加古の水行く瀬々の音
絶えざる流れに思いを潜め
親しみとする心一つに
希望の鐘高らかに
うち鳴らせ

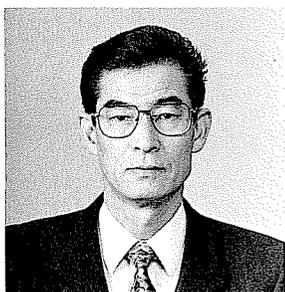
光はつねに東より

あ、我等加古川東高校

目 次

加古川東高校とその周辺	2
70年のあゆみ	5
歴代学校長	8
創立70周年記念式典	10
校旗・校歌	12
70周年記念式典挨拶・祝辞	
学校長 竹内暉雄先生	14
生徒会長 新富圭史君	15
兵庫県教育長 芦田弘逸氏	16
育友会長 大庫俊介氏	17
創立70周年記念事業実行委員長 長谷川末吉氏	18
70周年記念モニュメント紹介	19
70周年記念講演	
東京大学農学部教授 魚住武司氏	20
時は流れて…	31
あの日、あの頃、そして今…	59
加古川東高校のあゆみ	
加古川中学校・加古川東高等学校沿革	92
育友会小史	121
清流会略史	125
部・同好会この10年	127
現在の加古川東高校	147

創立70周年を迎えて



兵庫県立
加古川東高等学校長
竹内 暉雄

若葉の薫る好季節の本日、県教育委員会をはじめ、多数のご来賓のご臨席をいただき、県立加古川東高等学校の創立70周年記念式典、並びにモニュメント「曙光」の除幕式、記念講演、祝賀会と多彩な行事が盛大に挙行できましたことは無上の慶びでございます。これも偏に同窓会、並びに育友会、関係各位のご支援の賜と深く感謝申し上げます。

本校は大正13年に、地元の方々の強い願いとご努力が稔り、旧制の県立加古川中学校として創設され、以来、幾多の英傑を輩出してきたのであります。戦後、昭和23年の学制改革により県立加古川東高等学校と改称し、地域の期待と信頼に支えられて発展を続け、今日、70周年を迎えたのであります。

この間、本校から飛翔された卒業生は優に2万1千名を超え、あらゆる分野で、また、国内はもとより世界の各地で有為な人材として活躍されております。

昭和3年に、旧制中学校の5学年が全部揃ったところで、6月7日に盛大な開校式が挙行されており、これに因んで6月7日を創立記念日と定めております。

同窓会や育友会が中心となり創立70周年

記念事業実行委員会を組織され、盛大にするべく、2年前から諸事業を計画し着実に準備を進めてこられました。学校としては、本当に頭の下がる思いで感謝に堪えないところでございます。

学校では、開校以来の校訓「自治創造、明朗親和」のもとに生徒達は、何事にも意欲が旺盛で、自主性、主体性を発揮し、職員は、それを尊重し支援して、生徒、職員が心を通わせ、一体となって取り組んでいく良き気風が溢れております。これも、良き先輩諸賢が残された伝統と、地域の皆様のご理解、歴代の校長をはじめとする職員のご尽力の賜であらうと、敬意を新たにしておるところでございます。

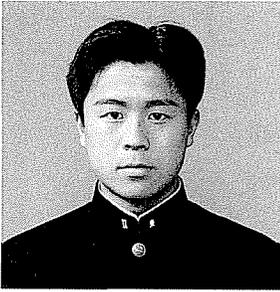
あと数年で21世紀に入ります。今年、入学した1年生が大学を卒業する時は21世紀に入っております。社会は高度情報化、国際化、高齢化等、激しく進展しております。社会の変化に主体的に対応していくことのできる、こころ豊かな人間の育成が今日の教育の課題でございます。

本校では、既に、生徒自らが自主的、主体的、創造的に取り組み、個性を錬磨し有為な人材として、お互いに切磋琢磨しておるところでございますが、さらに、視野を広く自己を高め、豊かな心の啓培に努めていきたいと考えております。

本日の、この記念すべき節目の年に、本校で巡り合えた幸運を喜び、祝うとともに、この年輪を大切に1日1日を精進していく覚悟でございますので、皆様の変わらぬご指導、ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後に、本校の発展に大変ご尽力いただいた、歴代の校長をはじめ、教職員、同窓会、育友会、並びに、関係各位に心から感謝と敬意を表して挨拶といたします。

いざ行かん新しい風とともに



生徒会長
新 富 圭 史

私たちは記念すべき創立70周年を在校生として迎えられ、大変うれしく思います。

私たちは、校訓「自治創造・明朗親和」のもとに、実に自由で活力に満ちた高校生活を送っています。私自身も入学して1年余りになりますが、東高で過ごせる時間が大変充実しており楽しい時間なのです。私の心をこれほどまでに躍らせるのは、東高には次のようなすばらしさがあるからだと思います。自由な校風の中にも生徒一人一人が責任を持って行動している点。学年の枠を越えた友好的な雰囲気。あらゆる場面において上級生がリーダーシップを発揮し下級生を指導している点。先生方が私たちの自主性を尊重して下さり、熱心なご指導をして下さる点などこれらすべてが私にとって誇りであり東高の生徒全員の誇りなのです。

また、東高はいつも何かに夢中になっている学校であり、その何かに取り組む姿勢が中途半端じゃないところが東高の魅力なのです。

毎年6月体育祭では、生徒全員の全精力が結集され大変な盛り上がりを見せ、私た

ちの心に大きな感動を与えます。そして、球技大会や3月の文化祭においては、クラスの団結が強まり、深い友情の絆が結ばれるのです。また、こういった東高気質の中にもけじめがあり、行事が終ると生徒全員の心が勉強や部活へと切り換わっていくのです。日々の授業においても、生徒全員がそれぞれの希望に向かって向学心に燃え、真剣に勉強しています。

部活動も多くの生徒が参加しており、各部とも自主的に活発な活動を行ない。立派な成績を収めています。

私たち生徒会も活動的で、さまざまな行事の企画、運営はもちろん、ホームルームの時間を利用して、部落問題や身体障害者問題についての討論を行ない、自分の心を見つめ考え深めあっています。これらの活動の原動力となっているのは、やはり生徒一人一人の自主性であり、これからも生徒の声が反映される学校生活を創っていくため努力していこうと思っております。

まだまだ、東高のすばらしさは語り切れませんが、多くの先輩方や先生方が努力されてきたおかげで、私たちが今こうして東高で楽しく充実した時間を過ごせるのは確かなことであり、改めて70年という長い歴史の中に刻み込まれた伝統の重さを感じます。そして私たちはこのすばらしい伝統に新しい風を吹き込みながら、後輩に伝えていこうと思います。そして、これからさまざまに変化していく時代の中でも、東高がますます活力に満ちあふれたすばらしい学校となるよう努力することを誓い、喜びのことばといたします。

創立七十周年に寄せて



兵庫県教育長
芦田 弘 逸

このたび、兵庫県立加古川東高等学校が創立七十周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

本校は、地元各位の強い要望と熱心な支援により、大正13年4月に兵庫県立加古川中学校として設立されました。爾来、「質実剛健」の校風を以て、東播磨地区を代表する学校としての地歩を築いてこられました。その後、昭和の激動の時代を経て、昭和23年に新制高等学校に移行、兵庫県立加古川東高等学校となり今日に至っています。この間、「自治創造」「明朗親和」の校訓のもと、調和のとれた文武両道を目指し、時代の要請や地域の期待に応え、本校への信頼を不動のものとして、今日の創立七十周年を迎えられました。

これは、情熱をもって教育に携わってこられました教職員の努力の結集であることは言うまでもありませんが、同窓会、育友会をはじめとする地域の方々の格別の御支援・御尽力の賜物と深く敬意を表し、感謝いたします。

創立以来、本校を巣立ち、社会へ雄飛された卒業生は二万一千余名にのぼり、県内

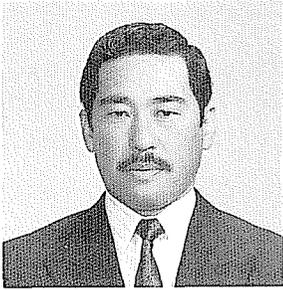
外を問わず各界で大きな力となって活躍されています。この伝統は、播州平野を悠々と流れて止まぬ加古川の清流のように、いつまでも続いてゆくことと、頼もしく感じる次第です。

さて、二十一世紀を目前にひかえ、社会のボーダーレス化や情報化がますます進み、国の内外を問わず世界は激動しております。この中であって、明日の社会を支える若人の育成は最も重要な課題であります。県教育委員会におきましては、「明日を担うこころ豊かな人づくり」を基本に据え、豊かで活力ある生涯学習社会の建設を目指しているところです。そのために学校教育においては、新しい学力観に基づき、豊かな心と自ら学ぶ力を育む教育の創造にむけて施策を展開し、特に、高等学校教育におきましては、本年4月の高等学校教育に関する懇話会の報告を受け、高等学校教育の改革に向けた施策の検討を進めているところです。

本校の生徒の皆さんが、県下有数の伝統ある学校の生徒として、教科の学習だけでなく、文化活動、体育活動においても、目ざましい活躍をされていることは、誠に喜ばしい限りであります。皆さんが将来にわたって的確な判断力を養い、絶えず自己鍛錬に努められ、一層飛躍されますことを切に期待いたします。

兵庫県立加古川東高等学校が、創立七十周年を節目として、さらに大きく発展されますことを祈念しつつお祝いの言葉といたします。

より輝かしい未来へ



育友会会長
大 庫 俊 介

兵庫県立加古川東高等学校が創立70周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。

大正13年に旧制兵庫県立加古川中学校として産声を上げ、昭和23年に新制兵庫県立加古川東高等学校へ移行改称となり現在へと続いています。この間「自治創造」「明朗親和」を教育理念に掲げ、教職員・学校関係者の方々を始め、20,000名を超える先輩同窓生が営々として築き上げてこられた輝かしい歴史と伝統が、加印地区の代表校としての地位を確立していったものと思います。

3年前に清流会、育友会と共に創立70周年実行委員会を設立し、準備万端の指揮を執って頂いた磯校長先生が本年3月末で定年退官され、替わって4月から、第21代目の校長として、竹内先生をお迎えし磯先生には主催者から一転して来賓として祝って頂く立場となりましたが、今後も変わらず加古川東高等学校の発展を見守って頂きたいと思います。

私事ですが、昭和39年には一年生として

550名の仲間と共に創立40周年式典に参列。巡り巡って今度は親の立場で子供と共に70周年を祝うという幸運に恵まれました。木造校舎も既に無く、わずかに門の一部に当時の面影が残っているのみで、30年という時の移りを感じますが、育友会に関係させて頂き学校にうかがう度に高校時代を懐かしく思い起こします。

例年6月には恒例の体育祭が開かれます。六組に分かれての競技や応援合戦が大変楽しく、自分達の時代にはこんな盛んなものだったかどうかもう忘れてしまいましたが、練習不足でしょうか、時々バラけたり、動作が違ったり…と、ほほえましい笑いに包まれます。また文化祭でも同様に、皆、いつ、どこで練習したり、装飾品・衣装を作るのか先生方も不思議に思っているかもしれませんが、当日になると見事な作業であり、装飾を作り上げます。加古川東高校の面目「躍如」というところでしょうか、彼等のチームワーク、行動力とエネルギーの大きさ、素晴らしさにいつも感激します。

長い人生から見れば、高校生活はたった3年過ごすだけですが、その短い3年間は人間として的人格・個性の形成に、そしてその後の進路・人生に大きな影響を与えます。私共親はただ見守るだけですが、本校関係者の方々のご協力・ご支援の下、子供達をより輝かしい未来へ導いて頂けますようお願い致しますと共に、加古川東高がこれからも益々発展されんことを祈りまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

光はつねに東より



創立70周年記念事業
実行委員長清流会会長
長谷川 末 吉

「ローマは一日にして成らず」という有名な古い言葉があります。長い間の努力の積み重ねがなくては大事業は完成しないという意味であります。

平成6年6月7日、母校は創立70周年という「古希の日」を迎えました。一口に70周年と申すのは簡単であります、多くの汗と涙の思い出がぎっしりと詰まって、70周年という輝かしい年輪の日を迎え得たのであり、回顧しますと感慨ひとしおのものがあります。

本校の前身「兵庫県立加古川中学校」が、栗津のこの地で産声をあげましたのは大正13(1924)年の春、^{きのえね}甲子の歳のことであります。折りしも、世界は第一次大戦後で、大きな転換の時機を迎え、我が国におきましても、大正デモクラシーの風潮に乗って、青少年の教育熱が盛んとなり、世界に雄飛する人材を育て、列強の先進諸国と肩を並べようとしておりました。そこで、相前後して男女中等学校が各地に創設されるようになり、当加古川でも、近隣の町村の念願

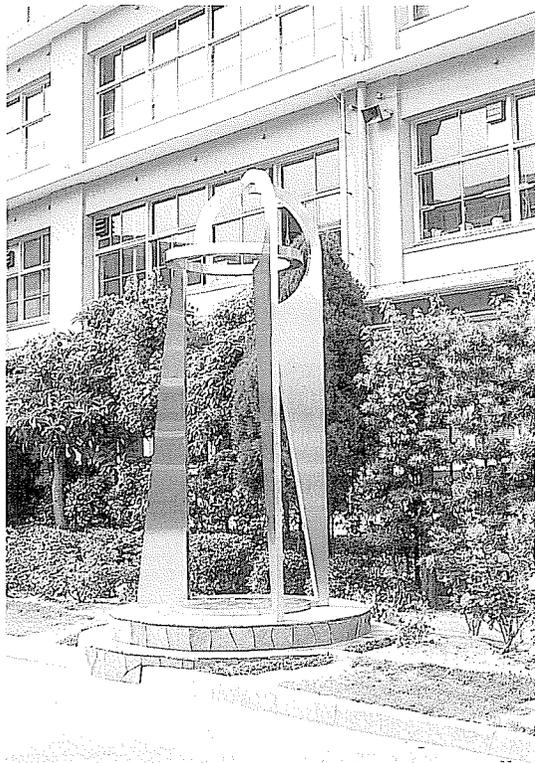
が実り、この年度の、唯一つの県立中学校として発足したのです。

去る平成2年度末には、清流会の会員が2万人台となり、旧制中学校の校歌にあります、「集う鵬雛八百人」の倍数近い千四百余が在学し、全国でもトップクラスの名声を博し、「文武両道」の伝統精神を継承し、「自治創造・明朗親和」の、生徒綱領を掲げて一路邁進しておりますことは、清流会会員にとりましても、真にご同慶の至りでございます。これひとえに、諸先生の日夜のご薫陶と後輩の若き精鋭たちのたゆまぬ努力の賜ものと、深く敬意を捧げます。

さて、清流会会員の皆さんやPTAの皆さんの絶大なるご協力ご支援で、70周年記念事業が順調に推進でき、盛大裏に終了いたしました。実行委員長とは名ばかりで、担当していただきました方々のご尽力の成果に他なりません。また、記念講演をお願いいたしました高校9回生の魚住武司教授、モニュメント制作をお願いいたしました高校21回生の中川猛教授の快いご協力などに対し、紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

最後に、校歌に「光はつねに東より」とありますように、大海原の東から昇る太陽のごとく、常に母校が栄光の名声を維持され、素晴らしい若者が集まり、寸暇を惜んで道に励まれることを期待し、併せて清流会の益々の発展と、会員諸賢のご多幸とご健勝とをお祈りし、粗辞ながらご挨拶といたします。

創立70周年記念モニュメント

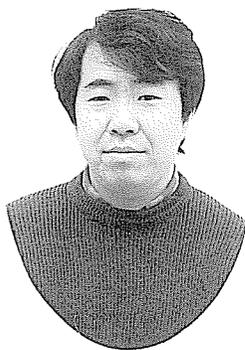


曙光（円環の門）

中川 猛

このモニュメントは、自分の造形活動の出発点でもあった高校生の頃のことを、昨日のこのように思い出して、同時に近年続けている円環をモチーフに造形的なバランスと新しい形態を模索しながら形にしました。いろいろな見方で自由に形態や質感を感じていただけたらと思っています。

東京芸術専門学校 教務主任 中川 猛氏（高21回生）



昭和44年兵庫県立加古川東高等学校卒業、昭和49年東京芸術大学美術学部油画科卒業、昭和51年東京芸術大学大学院修士課程、昭和53年東京芸術大学大学院研究生をそれぞれ修了された。現在、東京芸術専門学校で教務主任として基礎造形、造形論、デッサン造形演習を担当。

「好奇心の充溢」ということを大切にして後進を指導されている。東京、京都、神奈川など日本各地、さらにパリでも個展、グループ展をされ、平成3年には加古川総合文化センターで個展を開催、平成6年には加古川松風ギャラリーモニュメントを制作された。これらの作品は見る人々を幾何学的な原風景によって視覚的に知の領域へといざなっている。



東京大学農学部教授
魚 住 武 司
(高9回生)

在校生の皆さん、本日は本当におめでとう。思い出してみますと、私が本校に1年生として在学していたちょうど40年前の昭和29年に創立30周年がありました。その当時の運動場は今と反対でこの体育館のあたりにあったのですが、そこに全校生徒が並んで本校の校章を作って、飛行機から記念撮影をしてもらったのを覚えています。40年前の30周年の時にも何か記念講演があったはずですが、何の話だったか思い出せません。今日は私が高校卒業以来37年間に折りに触れ感じたこと、考えてきたことを気楽に話してみたいと思います。学問から人生までいろいろの事を話しますが、それぞれ結論があるとは限りません。ここに千数百人という生徒諸君が集まっておられますが、それぞれ個性があり、その考え方もみんな違います。これからの私の話しもどうぞ皆さん一人一人の個性でもって批判をしながら聞いてください。もっともだと思

70周年記念講演 「学問と人生」

う部分もあるだろうし、いや違うと思う部分もあるでしょう。それで良いのです。

小・中学校時代は稲美町の母里というところで過ごしました。典型的な農村で、夏休みなどは池で泳いだり、魚を釣ったりして遊びまくり、真っ黒に日焼けしていました。それでも中学の3年生になって加古川東高に入りたくて少しは勉強を真面目にやりました。高校に入りましてから3年間は、実によく勉強したと思います。大学に入るためです。科目では物理、化学、数学は理論的にできていて、原理を覚えれば理解しやすく好きでした。国語は現代文が大の苦手で、教科書に出てくる作品の著者はわざと分かりにくい文章を書いているのではないかと思ったものです。でも、国語は大切です。(笑) 現在、研究発表などで作文をしなければならぬ時は、なるべく分かりやすい文章を書くように心掛けています。日本史や世界史や生物は暗記が多くて苦手

でしたが、社会科は今でも社会情勢を考える上で役立っていますし、生物は今大学で遺伝子の研究をしています。英語はいっしょけんめい勉強しました。聞くところでは、言語習得能力は12歳で固定してしまうようで固定した後に学習を始めるのは難しいのだそうですが、高校時代はよく努力しました。稲美町の自宅から加古川まで自転車で片道50分ぐらいかけて通学していましたが、自転車で乗りながら片手で単語カードをめくって勉強しました。ある時、1学期の中間試験の日だと思いますが、雨で傘をさしながら単語カードを見ていて田植えの終わったばかりの水田におこちてびしょびしょになり、ひどい目に遭ったことがありました。(笑) 英語について思いだすことは、当時の英語の北出先生がある時「将来、諸君は英語を使って世界に雄飛して下さい」と言われたことです。その当時、敗戦の後10年くらい経ったばかりで、今のように日本企業が世界に進出するとか外国旅行をすとかがなかった時代ですから、いったいそんなことが将来あるのかなと思っていましたけれども、今や国際化時代になって、よく英語を勉強しておいて良かったと思います。現在、私は生物学とかバイオテクノロジーの研究をやっておりませんが、成果を発表する論文は全て英語で書いて英語の雑誌に発表しますし、国際学会ももちろん英語です。英語は今の時代に必要ですので皆さんも頑張ってください。ところで、今でも私は英会話の勉強をしています。NHKの「やさしいビジネス英語」というのを始まってから7年間聴いています。東京

の地下鉄の中で通勤の途中にテキストと辞書を広げて勉強しています。昔、自転車の上で単語カードをめくっていた時とくらべるとだいぶ出世したものだと思いますけれど、しかし昔と同じことをやっているわけです。

次に大学時代の話をしてします。私の父は田舎で醤油屋をやっていました。醤油というのは酒とか味噌と同じく発酵食品で、コウジカビなど微生物の力で豆とか麦とか塩から作るわけです。大人になったら家業の跡継ぎになるんだと思っていましたから、農学部の農芸化学科で発酵学を勉強しようと東大の理科II類を受けました。運よく合格したわけですが、教養学部では2年間、ドイツ語やフランス語、法学、哲学といった一般教養を勉強しました。哲学は、西洋の哲学の歴史や思想の変遷ばかりの勉強で当時はあまり解からなくておもしろくなかったのですが、近頃では哲学は人生の生き方を考えることだと思うと身近なものに思えます。また、一般教養の数学では解析学という難しいのを勉強しましたがけれど、将来醤油を作るのに必要なという疑問が出てきてちょっと迷ったことがあります。しかし、後になって分子生物学とかバイオテクノロジーの研究をやっていまして数学の基本は必要で役に立っているので勉強して良かったと思っています。

ところで、私は2年生の夏に結核にかかって1年間療養所に入りました。今はすっかり治りまして元気ですが、この病気の1年間はいろいろと人生について考える機会になって私にとってはある程度、意義があ

ったと思っています。

その後、昭和35年に農学部の農芸化学科へ進学し、微生物学とか栄養学、有機化学、分析化学、肥料学、発酵学といった講義を聴いたり、いろいろな実験をしました。昭和37年に卒業して大学院へ入りまして修士課程、博士課程と5年間多くの研究をしました。その時の研究テーマは恩師の有馬先生から頂いた「コウジカビの自己消化の研究」というものです。皆さんは酒の造り方を知っていますか。酒は米を蒸してコウジカビをはやして麴をつくります。それを水に入れておくとコウジカビの酵素（アミラーゼというでんぷん分解酵素）で米のでんぷんが分解されて甘いぶとう糖になります。このままでは甘酒と同じなのですが、そこに酵母を入れるとぶどう糖を食べて発酵してお酒になります。その間に最初に使ったコウジカビは、自分の持つ多くの酵素で自己消化し溶け出しますので、これが酒のおいしい味になるに違いないと考えたのです。しかし、実際にコウジカビを培養してなめてみるとお酒のような味はなく、キャベツを潰したような味でした。(笑) このように自己消化を調べていくうちに、まずRNAやDNAの核酸が最初に分解することがわかり、核酸分解酵素を見つけました。それと同時に酵素の強さを調節しているタンパク質がコウジカビの中に入っているのを見つけて、それをいろいろ研究して博士論文を書きました。

当時の農芸化学科の発酵学とか微生物学という学問は、大昔のお酒の研究とかがだんだん進んで酵素とか抗生物質とか微生物

遺伝学や分子生物学に発展してきたものでした。それが今のバイオテクノロジーにつながっているのですが、私の場合もその古い酒の研究と関連して全く新しい酵素学的あるいは分子生物学的な発見ができたのです。研究というのは全く新しい、世界で誰も知らないことを研究するものですから、大変難しくて根気のいる仕事です。それだけに何か見つければ非常に嬉しいですし、何も成果の出ないときはとても苦しいものです。だから研究の好きな人は将来おおいにそういう道に進むのもいいと思います。

ところで私が農芸化学科へ進むきっかけとなりました家業の醤油醸造業を私は継がないと決心し、父もこれを認めてくれたので大学院終了の後に企業で2年間研究しました。昭和42年から44年まで高砂にある鐘淵化学工業株式会社の当時の発酵研究室で仕事をしたわけです。テーマは「世界の食糧危機を救うために石油から食べ物をつくる研究」でした。皆さん、パンや酒やビールを造る際に使う酵母という微生物を知っていますか。この酵母の中には変わり者がいろいろいて、その中に石油を食べてどんどん増えるのがいるのです。この酵母に1kgの石油を食べさせて増殖させると1kgの酵母ができて、その中には50%のタンパク質が含まれるのです。まるで栄養の塊なわけで、動物実験の結果は全く安全です。ところがこの研究は、その直後の石油ショックで採算が取れなくなったこともあり、一般の人の敬遠もあつたりして日本では結局実用化しませんでした。ですから現在の状況では心配ありませんが、将来現実に食糧

危機が来たときには一時的には石油を食べる技術はあるわけです。しかし、この石油さえも有限な資源ですからなくなってしまえば困るわけで、それゆえサステイナブルアグリカルチャー（維持できる農業）ということが言われているとおり、農業生産を向上させて太陽の光で生産される物だけを食べていれば人類は絶えないと思います。

昭和44年に東大農学部発酵学研究室の助手として大学に戻りました。大学の助手というのは大学の先生の中で一番若手で、大学院の学生さんをいろいろ教え、自分でも実験研究をするわけです。この時の研究は、恩師の有馬先生から新しいテーマを考える様に命ぜられて「遺伝子工学の技術で動物のホルモンとか酵素を微生物に造らせる」という大テーマにしました。遺伝子工学というのは試験管の中で遺伝子を自由にたなぎかえて、それをまた微生物に戻してそれを増やして使うという技術です。その当時は遺伝子工学という技術もまだ無かったし、そういう言葉もありませんでしたので最初は困りましたが専門雑誌に発表されていた「遺伝子を試験管の中でつなぐ酵素」をヒントにして実際に研究を始めたのは1971年です。最初は納豆菌と似た枯れ草につく枯草菌という微生物をもちいました。枯草菌はでんぷんを分解するアミラーゼとかタンパク質を分解するプロテアーゼといった酵素を造るので昔から納豆を作るのに使っていましたし、工学的に消化酵素をとるのに使っていました。この枯草菌について、別の枯草菌の遺伝子を入れ換える技術は昔からあったのですが、別の動植物の遺伝子

を入れ換えることはできなかったのです。それでこの技術を研究していましたら、2年後の1973年にアメリカで試験管の中で遺伝子をつないでそれを大腸菌の中に入れて増やすという遺伝子工学の技術が初めて完成して発表されました。

大腸菌というとその頃までは悪者のように言われていましたが、これは良くも悪くもなく非常に扱い易い菌ですからアメリカでは昔から遺伝子に関する基礎的研究が進んでいたのです。そんなことも集積してその上に遺伝子工学ができあがったのです。我々は枯草菌が利用できると考えていましたのでかなり研究を進めていましたけれども、このアメリカの大腸菌の研究を参考にすることでまもなく枯草菌でも遺伝子工学の技術を完成できました。その後、遺伝子工学の技術は世界中の人々によって用いられていろいろ改良され、遺伝子の構造とか働きなどを理解するのに使われています。技術が完成された結果、さらにまた基礎的な研究が非常に進んできています。

この技術を用いて、我々は子牛の胃の中にあるチーズを造る酵素の遺伝子を取り出して、それを大腸菌の中に入れて酵素を造らせるという研究を世界で初めてやりました。皆さんは乳製品のチーズをどうやって造るか知っていますか。牛乳の中にレンネットというタンパク質を固める作用のある酵素を入れて固めてからさらに塩を加えて熟成させておくとチーズになるのです。このレンネットという酵素は生後間もない子牛の胃をすり潰して取るのですが、子牛の胃というのは1頭から1つしか取れません

のでどうしても酵素は不足します。そこで約30年ほど前、我々の先生の有馬教授のところで研究した結果、1960年代にカビからチーズを造る酵素が見つかりました。その結果、現代ではこの酵素が子牛の酵素に代わって世界中のチーズの生産量の60%くらいに使われています。次に、我々は今度、子牛の胃の中にあるチーズを造る本物の酵素の遺伝子を取りだし、去年あたりからアメリカでこの酵素で造ったチーズの販売が許可されています。そのうち日本でも許可されるでしょう。子牛の胃の酵素から代用品のカビ、そしてまた子牛の遺伝子から造った酵素となったわけです。

ところで皆さんは微生物がどのくらい速く増えるか知っていますか。大腸菌というのは長さが約2ミクロンの棒のような形をしています。1ミクロンが千分の1ミリですから体積は1立方ミクロンくらいですね。これを肉汁などに入れて37℃くらいに保つと約20分後には分裂して2匹になります。さらに20分後に分裂して4匹になり、1時間たてば1匹が8倍になるわけです。そういう計算でいくと3時間20分で10回分裂するので約千倍、10時間で約10億倍になります。これくらいまでは実際試験管の中でおこります。1ccの肉汁の培養液の中に1匹入れておいて1晩置くと10時間以上たちますから10億匹になって真っ白に濁るわけです。これを大きなタンクに入れるとまた同じように倍々ゲームが増えていくわけです。実際栄養がなくなるまで増えるわけで、役にたつ微生物を見つけるとこのように大きなタンクですぐ増やせるわけです。こうい

うわけで今、遺伝子工学が注目を受けてい



講師紹介をする十倉茂明氏

るわけです。

次に我々が現在研究室で取り組んでいる研究を紹介します。微生物が造る酵素の研究をしています。酵素と言うと皆さんは唾液や胃液の中にある消化酵素を思い浮かべるとと思いますが、生物が生きていくためには何百・何千種類の酵素があつてうまく働いているわけです。これは人でも微生物でもほとんど同じで、将来皆さんが、生物化学とか分子生物学とかを学ぶとよく分かります。

微生物を探すと色々な酵素がありますが、その中のサイクロデキストリンというものを作る酵素を改良しました。サイクロデキストリンというのはブドウ糖が6~8個ぐらい丸くつながった物で、ドーナツみたいに中に穴があります。その中に分解し易い薬品や香料が入って非常に安定しますので、薬品産業でも使われています。例えば、粉末わさびというのはサイクロデキストリンの中に香辛料が入っています。だから水で溶かすとすぐにわさびになり、非常に便利です。そういう物を造る酵素を、

やはり枯草菌の仲間から見つけて、その遺伝子を改良してもっと性質のいいサイクロデキストリンを造る研究をしました。

糖の関係ではオリゴ糖という健康食品がありますね。キャラメルなんかに「オリゴ糖入り」と書いてあったりします。これは虫歯になりにくいか、これを食べるとおなかの中でビフィズス菌が増えて体にいいと言われていました。そのオリゴ糖をデンプンから造り出す酵素を黒いコウジカビから遺伝子を取って、たくさん造らせる研究も行いました。

それから、病気の診断に使える酵素があります。これは血液の中に尿素という物質がありますが、病気になるとこの尿素が増えますので、それを量れるような酵素を取り出して、その遺伝子を調べてみると非常に面白い複雑な構造が解りました。さらにこれらの構造が全部あるとうまく働くということがわかったので、今継続して研究しています。これをうまく利用するとたくさん酵素ができて診断用の酵素になるわけですね。

それから、この頃残留農薬が危ないということがよく言われていますけれども、微生物が造る殺虫剤というのがあります。これはやはり枯草菌の仲間ですけれども、その中のある物は殺虫効果のあるタンパク質を造ります。これは蛾とかの昆虫にはよく効くのですが、もとはカイコにもよく効いたのです。カイコも実は蛾なのですが、百年近く前に世界で初めてこれを日本人が見つけて「バチルスソットウ」と名付けたのです。「バチルス」というのは枯草菌の仲間

のことで、「ソットウ」というのはその微生物が感染するとカイコが卒倒してしまうからなのです。(笑) 当時は世界で初めてできたのですが、今ではそういう微生物がたくさん見つかっています。これらの微生物が造る殺虫剤タンパク質はいろんな蛾に少しずつ効き方が違うのでそれぞれの微生物から遺伝子を取り出して、遺伝子をつなぎ変えるとまたその合の子のような遺伝子ができます。このようにして微生物の殺虫効果を改良するような研究もしました。実は今やっとできたところなのですが。

世界の人口は増え続けています。世界的な食糧の確保が問題になり、いずれは食糧の増産が必要になるでしょう。その時には肥料が要りますけれども、特に窒素肥料というのは数多く使っているわけで、日本を含めた先進国では必要量を十分に工業的に生産して使っていますが、必要量を生産できず満足に使えない国もあります。それに肥料中の窒素は空気中の窒素をハーバーボッシュ法という方法で、工業的に固定しアンモニアにしているわけで、この時に水素とか熱とか圧力をかけるために電力が要ります。そのために燃料として多量の石油を使っているわけです。ですから将来そういう物がなくなると困ります。皆さん、根粒菌というのを聞いたことがあるでしょう。大豆なんかの豆の根に根粒が付いてそこに微生物が入ってます。この微生物は空気中の窒素を固定するんですね。だから豆というのは窒素肥料をあまりやらなくても育ちます。この根粒菌に似た空気中の窒素を固定する微生物がイネとか小麦とかサトウキ

ビ等の豆以外の作物の根の周りにいるということが近頃注目されています。我々もその中のイネの根の周りに棲んでいる窒素固定微生物を取り出してその遺伝子を10年ぐらい研究し、その働きを強くしたのです。それをイネの周りに蒔いてやると、微生物が空中から窒素を固定して肥料が節約できるだろうと考えています。こういう研究は東南アジアの国々では化学肥料の供給が十分ではないので、注目されています。それでインドとかフィリピンとかの学者たちと共同研究をしたりもしてまして、インドのデリー近くの大学とかフィリピン大学にもこのあいだ行ってきました。

その他、ジャガイモが感染するウイルスの研究もやっています。これに感染するとジャガイモはほとんどできなくなりますので、そのウイルスの遺伝子を調べて、遺伝子工学によってウイルスに感染しないジャガイモを作ったり、感染した場合にはそれを治すような抗生物質を造る、そういうような研究もやっています。

それからもうひとつは、寒さに耐える植物を造ろうとしています。この度の米騒動でも分かるように温度がちょっと低いだけで米の実りが激減するようなことがあるからです。我々はイネ自体の研究はやっておりませんが、熱帯のきれいな花にハイビスカスというのがあります。あれは日本の冬には全く枯れてしまってダメです。そこで冬でも生き延びることができないかと思って研究しているわけです。寒さに強いムクゲというハイビスカスの小さいのがあります。それと細胞融合して雑種を作らせてや

るとか、ムクゲから寒さに強くなる遺伝子を取り出してハイビスカスに入れてやるとか、そういう基礎研究をもう5年ぐらいやっています。これはまだこれからということところです。

以上紹介しましたようにいろいろな研究をやっていますけれども、大学教授というのは相撲部屋の親方のようなものです。研究室には教授や助教授の他に大学院の学生さんが15~20人ぐらいいてみんな元気に実験をやっています。若い人たちの力で研究が進むのです。若い人たちが研究をやりながら、めきめきと実力をつけて成長するのを見るのは非常に楽しいものです。良い研究成果は国内で発表しますし、特に面白い成果が出ると国際学会でも発表します。私も今まで欧州の各国であった学会で5回ぐらい、アメリカとメキシコで3回ぐらい、その他韓国・中国・インドなどで発表してきました。こういう時に英語はとても役に立ちます。

私が外国語に興味を持つようになったのは、大学に入って東京に出たときからです。東京と関西ではアクセントとか言い回しもだいぶ違います。それから当時下宿先で秋田県出身の兄弟が住んでおりました。彼らが秋田弁で話している言葉は私には全然理解できませんでした。日本語の中でもこれぐらい差があります。その後いろいろ外国語を勉強してみてももしろい事に気づきました。例えばスペイン語とポルトガル語というのは非常によく似ていて東京と大阪の言葉の差ぐらいしかありません。北欧ではデンマーク・ノルウェー・スウェーデンの言

葉も非常によく似ています。英語とも似ていますがその3つは特に似ていて東京・名古屋・大阪ぐらいの差しかありません。そういう点で外国語はいっぱいありますが、いくつかを習えば後はよく似てます。昔高校で国語の高松先生が「韓国語と日本語は非常によく似ているよ」と言われました。先生は戦前韓国で教えておられたそうです。実際、大学院の時代に韓国からの留学生と友だちになりましたので、韓国語の発音の手ほどきを受けて、後はほとんど独学で本を読んで韓国語を勉強しました。韓国語の文法というのは日本語の文法とそっくりなのです。もちろんお互いに全く通じませんが、非常によく似てるので両言語の祖先は同じだと私は思います。NHKのラジオではいろんな外国語の講座をやっていますが、私は今まで全部の講座を聞きました。何十年と続けていますから、ひとつの講座を2～3年聞いてますとだんだんよく分かるようになります。外国へ行って英語が通じないときは、その国の言葉が分かると非常に便利です。その辺に書いてあることを辞書を引きながら読んでみるとそうかと思った

立加古川中学校
古川東高等学校

創立70周年記



講演中の魚住武司氏

り、あるいは英語が全く通じないときは、片言でもその国の言葉をしゃべると相手が喜んでニコニコします。皆さんもぜひ将来試してみてください。

ここで少し哲学的な話をしましょう。皆さんは世の中に本当の事、つまり真理というものが本当にあると思いますか。ある事柄が真理であるかどうかはどうやって判断すればよいのでしょうか。絶対的な真理というものは、あるかもしれませんが人間はそれを五感で感じて判断するしかないわけです。自然科学の現象を考えてみた場合、例えば宇宙の構造などを研究する場合では非常に精度のよい望遠鏡で何百億光年向こうの星が見えたとしてもその向こうに一体何があるかはわかりません。また、ミクロの世界でも同様に物質を研究していくと原子や電子や素粒子からできていて、さらに何からできているのかを考えていくと分からなくなります。生物の研究でも近頃ではX線による結晶構造の解析や遺伝子工学で遺伝子の構造が解明されるなど多くのことが分かってきましたが、まだまだ分からないことはたくさんあります。ある考えや理論が本当かどうかを判断する方法として、それを仮定してみて、その仮定に基づいていろいろ実行してみた場合に結果が良かったり、予想通りだったり、得になったりしたらもとの考えを真理だとする方法があります。これをプラグマティズム(実用主義)といいます。分からなくなって何が真理かと考えたとき、やっぱり役に立つというもののが真理と言うしかないのではないかと私は考えています。例えばニュートン

の万有引力の法則や力学の法則などは、それに基づいて計算するとロケットや人工衛星が軌道に乗って飛びますから真理だと言えます。もっと複雑なことを考える場合にも、結果の良し悪しによって真理・理論が間違いかどうかを判断するのは実用的でいい方法だと思います。

もう1つ私が若い頃に考えたことに、我々は自由意志を持っているかどうかということがあります。我々の身体は全部物質で出来ています。宇宙は出来たときに全ての原子とか電子とか素粒子まで含めて動きが決まっていたとすれば、その後どう組み合わせさせてどういう生物が進化しても、全ては本当は決まっていたのではないかとも思えます。しかし実感としてはそうではなく、いかにも自由です。私がここでこんな話しをしていることも自由に話しているみたいだけど本当は昔から決まっていたのかも知れないと思ったりもします。これは運命論です。しかし実感としては自由です。

次は人生について考えてみたいと思います。私は自分の人生が何のためにあるのかと考えて悩んだことがあります。自分は生まれたくて生まれてきたわけでもないけど、気がついたら生きていたわけです。そこで、人生の目的は何かといろいろ考えてみましたがどれも、明確な答えは得られませんでした。しかしあんまり悲観的になった事はありません。今強いて結論を言うとしたら、人生の目的というのは人それぞれだということです。各個人が一番やりたい事をやればいいのです。それがその人にとっての人生の目的だと思います。ただし世の中には

多くの人々が住んでいますから、他人に迷惑をかけたり他人を悲しませたりする事はなるべく避けたいものです。出来れば他人と共に楽しむ人生をおくりたいものだと思います。

私はこういう事を考えているとつい宗教的な考え方になります。そこで次は宗教について話してみたいとおもいます。大学の4年生の頃に、同じ下宿のとなりの部屋にいた法学部の学生さんが「ブッタの言葉」という本がおもしろいよと教えてくれました。これは古い仏教の教典のひとつで、かなり哲学的な本です。約2500年ぐらい前に仏教を始めたお釈迦さまの言行録なのですが、それが長い間インドの洞窟に隠れ埋もれていたのが100年位前に発見されてそれで日本語にも訳されているわけです。それで日本語の訳本は「ブッタの言葉」で岩波文庫の一冊として入っています。これを読んで印象に残っている事をいくつか紹介します。ひとつは「人間は全て平等だ」という事です。これは非常に徹底していて、自分と他人とを比較して自分はあいつより優れているとか自分はいつより劣っているとかそういう事を考えてはいけなし、自分はいつと同等だ自分はいつと同じだとそういうことも考えてはいけなしと書いてあります。そもそも優劣の比較など最初からするなということです。これは宗教とか哲学とか、皆が幸せになるためのものですからそういう考え方もひとつあるということです。もうひとつは自立の精神が説いてあります。「犀の角のようにただ独り歩め」と書いてあるのです。インドの

厘というのは角が一本しかありません。とにかく一人で自立して歩きなさいと説いているわけです。もうひとつは、「苦しみは欲望から始まる」と書いてあります。この世は苦しみの中にあり、いろいろな苦しみが満ちています。苦しみの元は何かと言うと、それは欲望なのだ。もし苦しみが強すぎてどうしても耐えられないときは、元になる欲望をなくせばよい。そういうふうに書いてあります。これも真理です。そうすれば幸せになれるということです。しかしこういうことを若い人に向かって言うと、欲望があって努力するから皆進歩するのだ、欲望がなくなれば進歩もないと反論が返ってくると思います。それも当然で、まさにその通りです。例えば受験生は皆自分の進みたい大学に入ろうと思って一生懸命努力しています。人間誰でも元気な間は次から次に新しい欲望が出てきます。だからそれに向かって努力すればいいのです。しかし時には苦しみがどうしても強くなることがあります。どうしてもうまくいかない時や苦しい時、この「苦しみは欲望から始まる」を思い出して苦しみを柔らげてください。そしてまた元気になったら欲望がどんどんわいてきますから、また努力してください。

次はキリスト教の話をしします。私が大学院の学生だった頃に、大学の近くに小さな教会がありました。そこで英会話を60分教えてくれて、その後アメリカ人の牧師の先生が1時間聖書の一部を引用して説教をしてくれました。私はそれを真面目に聞いていたんですが、これが結構面白いので2、3年通いました。これをきっかけにして、

旧約聖書とか新約聖書とかいろんな本を読みました。旧約聖書というのはユダヤの民族の歴史とかその神様について書いています。キリスト教というのはイエス・キリストが今から2000年位前にそれを改革して作ったわけで、同じ神様を信じています。聖書を読んでみて私の感じたところと言えばキリスト教の教えは「ただひとつの全知全能の神様を信じて、それから人を愛しなさい。いろんな苦しいことがあってもそのうち神様が助けてくれます。」ということになります。私はこういう素晴らしい全知全能の神様が本当にいて下さったらどんなに良いだろうなと思いました。こういう神様というのはそれを本当に信じている人にはいるみたいです。ただ私自身はクリスチャンになりきることは出来ませんでしたけれども、その考え方はある程度分かるような気がします。この他にもいろんな宗教がありますけども、それぞれ人の幸福を考えて作り出されたものだと思います。皆さんが自分が好きなことを信じて幸せになればそれが一番いいことです。しかし、人にはそれぞれ個性がありますから、自分の考えを



他人におしつけることは避けるべきだと思います。

最後にもうひとつ話をします。先にも言いましたが、生物などいなかった地球で約40億年前から炭素や水素や窒素といった「物質」が組合わさってやがて生物が誕生し、それが進化して今日の我々人間になっているわけです。分子生物学を築いたことで有名なフランスのパスツール研究所にいたジャック・モノーという偉い先生が「偶然と必然」という本の中で、物質からどのようにして生命は進化するかを書いています。まだ進化の詳しいことは分からない点もありますが、大体大筋では納得できる非常におもしろい本です。この本のなかに書いてあることは、我々の脳や身体といった全ての物は、「物質」の反応で出来ているんだということです。私も自然科学を研究していてそう思っています。そういうふうと考えてくると、例えば何々主義とか思想とか、宗教や神様という概念さえも全て「物質」が進化した我々の脳の中で勝手に出来た物ということになります。こういうふうと考えてくると「自分は物だ、うまく出来上がった物だ」と考えている人は信じる物がなくなってしまうことになります。「偶然と必然」という本の後ろの方で、「これだけ知識が発展したんだから、知識の倫理というそういうものが必要だ」という事が出て来ます。信じるものが無くなったと。すると知識の倫理が必要だと。私も確かに倫理というのは必要だと思います。例えば、原子爆弾を使ってはいけなけれど、同じ事を平和利用して原子力発電にすればいいと

いったことです。知識ができればその知識を正しく使う倫理があるべきです。しかし、そこが私の頭の中で論理的につながらないのです。「物質」から我々は進化してきて、当然倫理ということをお我々は考えたわけで、それでいいわけですが、そこが非常に不思議だと思いました。だから必要なことでありながら何かそういう論理から飛躍しているような気がしているわけです。でも当然ですがこの知識の倫理は必要だと思います。

以上、取り留めもない人生の感想を述べましたけども、要はそれぞれの個人がなるべく幸せになることが大事です。それがそれぞれの人生の目的であり意義であると思います。ただ自分の考えや行為を押しつけて、回りの人に迷惑をかけてしまうことは避けなければならないと思います。若いみなさんは前途洋洋ですから、将来自分のそれぞれ好きな進路を見つけて大いに好きなことをやって人生を楽しんで頂きたいと思います。

本日は創立70周年誠にありがとうございました。加古川東高等学校が更に発展し80年、90年、100周年へと続いていくことを祈ってこの講演を終わらせて頂きます。ご静聴どうもありがとうございました。

時は流れて…

加古川東高校発足当初の思い出の一端	中嶋信太郎
応援歌問題◇G 7（ピアノ）よ、今いずこ！	土井 政子
旅の思い出	八城 昭義
わが青春の東高	澄谷 博紀
30年前の東高—楽しかった日々—	阿部 俊彦
歩く・歩む	小原 博
クラブ（剣道）活動の思い出	松本 敏和
着任当初の思い出	廣岡 正義
14年をふりかえって	太田 淳夫
加古川東高との9年間	紺野 靖幸
木々をめぐる風景	河村 芳道
東高の文化をおもう	藤井 一晃
在職中の出来事	吉村 芳郎
思い出 雑感	公森 博子



昭和23年7月～昭和39年3月

中嶋 信太郎

戦後わが国のあらゆる面での大変革と共に、教育の面でもまた超画期的な変革がもたらされたのであるが、その中で従来の中等学校制度で言えば、もとの中学校(男子のみ在学)や高等女学校が新制高等学校となり、男女別学制であったのが、すべての公立校では男女共学制となった事であった。当時の加古郡・印南郡地域では、県立加古川中学校が県立加古川東高等学校となり、県立加古川高等女学校が県立加古川西高等学校となって、両校が男女生徒の折半交流によって共学制をとることになった。そこでまず、生徒をどのようにして東西両校に振り分けるかということが問題になった。それにはいろいろのことが考えられたが、両校をできるだけ同一条件で同一水準のもとに発足させることが望ましいことである。男女に必要な施設設備を整えること

加古川東高校発足当初の 思い出の一端

はもちろん、生徒の質をどのように見分けて、どう分けるか。学力・運動能力・性格・学習意欲・人物その他といろいろ考えられる中で、性格や人物などとなると全く手がつけられない。運動能力はある程度まで差異は分かるが、すべての生徒について見分け振り分けることはできるはずがない。結局、当時の学力の到達点を一応の基準とすることになった。

そこで両校それぞれ芸能科体育科などを除いて学力試験を行い、点数順に序列を定め、それに従って学力水準が同様になるよう二つの組に分け、抽籤によって東西両校に振り分けることにした。当時、西校へあるいは東校へと、もとの学校や友人と別れて行く者たちは、一種のあこがれや期待とともに、元の学校に対する愛情の念や慕情に堪えられず悲壮の感を抱いたのであった。ま

た居住地域の関係で学校を変わることに釈然としない感情を抱いた者もあった。しかし個人的な感情や事情は一切考慮されなかった。元の学校に残る者についてもそれは同様であった。

生徒の数に応じて教師もまた東西に分かれることになった。担任学科や勤務年数などと共に、互いに相手校のそれらの点も考慮して決められた。私は西高校にもとの高等女学校以来十六年間勤務し、半数の生徒と共に東高校に移って来て、それからまた十六年間勤務することになるのである。

東西両校交流の日は、昭和23年7月1日と定められた。当日両校それぞれ半数の交流要員は残る者たちと挨拶を交わし、両校で打ち合わせた同時刻に出発し、西へ東へと打ち合わせた同じ道筋を迫って途中で挨拶を交わしてそれぞれの学校に到着した。

かくて男女共学の新制高校は発足した。私は東高校に勤めた者であるから、東高校についてその後の一端について述べて見たい。画期的な新制高校として出発するためには種々の問題があった。新しい民主主義教育のため、また共学のための施設設備、教育理念と方法、学習指導生活指導の目的と方法、授業時間、共学の実際面、クラブ活動の問題その他万般に亘って、すべて初めてのことなれば幾多の問題があった。後になれば大した問題にもならぬほどのことでも、いろいろ問題になった。

その中の一つ、男女共学の問題について言えば、同一校に男女が学んでいるというだけでよいのか。同一教室内に男女がおればよいのか。男女交互に席を並べておるべきなのか。その他男女の組合わせ状況、それに卒業後の希望や学力差などいろいろな事が絡んで来る。それらの点についてさまざまの学級編成が試みられた。

それからもう一つ。生徒の生活指導や学力指導について、教師生徒共に他の学校よりいかに抜け出るかについて本当に真剣であった。学業にも運動にも格別の成績を挙げようと努力した。同一水準同一条件の他校と、異なる特色ある校風の樹立は学校一致しての目標であった。かくて、その他の種々の条件も加わった結果ではあるが、加古川東高校の校風は徐々に確立して来たのであった。



中嶋先生の授業風景



昭和24年2月～昭和58年3月

土井政子

四半世紀以上に及ぶ、東高校での思い出は数多く、中でも応援歌問題は私に取って最大の事件であった。時は昭和29年。歌詞の募集で西島三恵さんが当選となり、作曲が私に廻ってきた。一方、清水校長先生も格調高い御作詞に中学3回卒のA氏とY氏に作曲をご依頼の噂。これを知った生徒側が大暴れ。全校総会を開き、校長先生がご説得。私は西島さんの6行詞には苦勞し、^{モチーフ}動機を何度も切り捨てる。その結果、母校の或る旋律を借用。後はどうにか纏めて完成させたが、自分の名前は伏せて、音楽部作曲として公表。A氏とY氏の二種の御作品から一曲を選べとのご命令に、気兼ねし乍ら「 $\frac{4}{4}$ 拍子の方を」と申し上げる。ところが、15年以上経っても西島作詞の方だけしか生徒は使用せず、私は自分の在職中に、生徒会に懇願し、やっと或る年の体育

応援歌問題◇G7(ピアノ)よ、 今いずこ!

祭に吹奏楽部によって初演。清水先生にお知らせ致すと、ご達筆な毛筆のお礼状を戴き、事件は解決した。

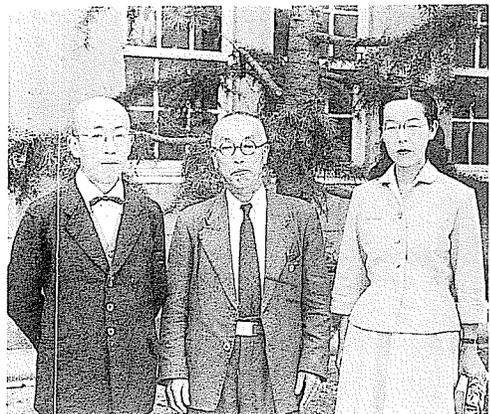
原田峻一先生への懐かしさは一入である。

I先生が肖像画を描いて貰われたと伺い、私もお願いすると「描きましょう」とご承諾下さり8号で胸から上を。出来上りを拝見した時、専門家は私をこの様に描くのかと、大いに不満で「泣いたゴリラみたいだ」と失礼な事を申し、次に15号の上半身をお願いする。ブラウスはその儘の色彩で美しいが「この顔は法律でも学んだ女傑の顔」と文句を云い、次は30号で腰を掛けた全身という事になった。放課後いそいそと衣裳を持って美術室に向う私にI先生は「今からですか？」と声を掛けられる。衣裳は空色の下着であって胸元の刺繍と袖付仕立は洋服に見えるらしい。完成は流石に力作。

双葉寫真館さんをお呼びして絵と並んで寫して貰う。それを郷里の親戚の画家に見せると「腸の周辺が少々…」と云う。当地に帰るや「この絵は胃の下が短いのでは？」と、自分の姿勢が悪いのを棚に上げてまた文句。先生は少しも腹をお立てにならず「30号では無理だったかなあ？」と独白なされた。そこを透かさず私は厚釜しくも「先生、もう一枚だけ50号でお願い出来ますか？」と恐る恐る伺うと「い、ですよ。描きましょう」と簡単にお一言。今度は私の家にご足労いたゞく事にして服装は豪華なネグリュジェを選んだ。藤色で衿付のボレロが珍しい仕立。ところが今度は「それ、西洋ネマキだろ！」とお当てになり吃驚仰天!!先生はお出ましの度に入口で「上らせて頂いてもい、ですか？」と堅苦しく礼儀正しい。召し上り物も、ケーキ・苺・和菓子・お寿司を同時に口にお入れになる。カルピスを「こんな美味い物は飲んだ事がない」とおっしゃり、私は驚いた。途中カンパスを見に立っては「先生、私の鼻こんなに恰好がい、でしょうか？」と喋り出す。「貴女の鼻筋は通っていますよ」と。私はまさかと思ひ乍ら、今度は何とか美人にとのお心遣いを申訳なく、恐縮した。完成後先生は「これで勘弁して下さい。何か希望がありますか？イヤー！こんな大作は加古川に来て初めて描きました。大変勉強になりましたよ」と、決して皮肉ではなくもったいないお言

葉であった。「失礼ですが御礼はいかほどで？」と小笠原流に頭を下げると「いや、それはご心配なく。下手ですからね」とおっしゃり、やっと実費として画材店の領収書を示され、描き賃は僅か5千円。更に荷造りをして日通から私の郷里に送って下さり、誠に無慾で純真な芸術家でいらしかった。

さて、清流会ご寄贈のピアノは今どこに在るのだろうか？このG7を菅原洋一さんをご存知なく、ピアノ開きでは松本幸三さんが輝かしいテノールを。広瀬敏郎さんは優しく寄り添い、藤村匡人さんを私は受験指導で連日しごいた。11月13日には加古川で菅原洋一35周年ふるさとコンサートを。翌14日は神戸で松本幸三“歌いまくって30年、記念リサイタルを。音楽教師として感無量。創立70周年をお祝い申し上げ、ご発展をお祈り致します。





昭和29年4月～昭和45年3月

八 城 昭 義

38年間の県立高校における教員生活のうち、その半分に近い16年間を本校でお世話になり、多くの先生方をはじめ、周囲の皆様のご指導ご支援により、まがりなりにも成長させていただいたことを大変感謝しております。

その間、さまざまな思い出がありますが、多くの先生方や生徒との触れ合いの中で、やはり旅の思い出が最も多く脳裏に刻みこまれております。

近年の日本人のレジャーは、ゴルフなど一部を除いては家族中心のものとなり、職場グループのそれはかなり少なくなっているようです。本校勤務16年間を振り返ってみますと、修学旅行は別として、年に職員旅行が1回、学年担任団が1回、社会科担任団が1～2回、総計50回以上は1泊乃至5泊の旅をしています。

旅の思い出

昭和30年代当時の教員の安サラリーの中から、毎月旅行費の積立ては家計面から大変でしたが、旅の楽しさ、見聞は何事にもかえ難く興味のあるものでした。ことに社会科担任団の旅行は、地理や日本史の教材に関係あるところをこの目で見るのが目的でしたので、質素節約を旨とし、地方の駅前の商人宿に素泊りということも度々やりました。「洗濯物があれば出しなさい。洗っときますよ。」というような、一流旅館では味わえない温かい親切にふれることもよくありました。男鹿半島西端にある火山地形「マール」の素晴らしい教材に目を見張ったり、牡鹿半島の女川港で鯨の解体作業を見学したり、隠岐の海蝕地形を小船で海から眺めたり、能登半島北端の見事な千枚田など、枚挙にいとまがありません。

その能登半島を社会科担任団で一周した時

のことです。なんの食あたりであったのか、ほとんどの先生方が下痢に悩まされ、私自身は元気で、和倉温泉での夕食に供された鮎の刺身が誰も食べられず、私一人で舌鼓を打って賞味し、恨まれました。

苦い思い出もあります。昭和37年3月末、伊豆の大島及び伊豆半島一周の旅を学年担任団で実施した時のことです。夜行列車で早朝伊東温泉に到着し、直ちに伊豆大島に渡りました。順調に三原山のカルデラを見学したりしましたが、次第に風が強くなり、岡田港に着いた時にはかなりの強風でした。乗船するための商船が風にあおられて棧橋に容易に着船できず、その間に風は一層強まるばかりです。結局、午後2時の出船予定が午後5時過ぎになりました。私達一行の旅程の最後が伊豆の大島であれば、そこで一泊することも考えられましたが、旅程の初日で、そこで狂えば、後の旅程（宿舎の予約など）が全部狂ってしまいますので、やむなく乗船しました。大変な西風でした。大島の東を航行している時は、船酔い客があちこちという程度でしたが、島影を北にぬけ、進路を西にとると800トンの船は木の葉のように波に翻弄されました。棚から物の落ちる音、スクリューのから回りの音、船室で寝ている私達は、右に運ばれたり、左に運ばれたり、生きた心地がしませんでした。船内は寂し声なし。生命に不安を感じると船酔いもとまるのがわかりまし

た。救命胴衣を着けるよう船内放送があるかと思いましたが、放送も一切ありません。後から聞いたことですが、放送によって乗客に不安を抱かせると、みな甲板に上り、重心が高くなり、転覆の恐れが大きくなると船員が言っていました。

夕方5時に伊豆熱川温泉の港に着く予定が夜中11時過ぎに到着しました。旅館の方も心配して待っていてくれて、夕食を済ませ、入湯して床に着いたのが午前2時でしたが、興奮して寝つけなかったことを憶えております。その時のニュースによりますと、最大瞬間風速46mということで、大型台風なみであったようです。

のちのち、この伊豆旅行は何度も語り草となりましたが、以後30年が経過するなかで、この旅行に参加した8名の先生のうち、小沢先生、岡先生、穂塚先生の三先生が故人とされました。ご冥福をお祈りいたします。





昭和33年4月～昭和42年3月
兵庫県立明石城西高等学校長
澄谷博紀

わが青春の東高

創立70周年おめでとうございます。東高には大学を卒業した昭和33年から9年間お世話になりました。着任当時は、現在の運動場のところに木造の校舎があり、廊下は長年の油引きで油が黒く染み込み、校舎間には樹木が多く植えられて、落ち着いた雰囲気でした。

今振り返ってみますと、東高での9年間は私にとって非常に貴重な期間でした。生徒諸君に言わば鍛えられて、英語の教師として成長できたと思います。生徒からの鋭い質問に立往生しないように、必死になって教材研究に励んだことがなつかしく思い出されます。講読の時間に、教科書以外に文学作品や評論など自分で教材を選び、苦労しながらも楽しく教えることができたことなどはとても恵まれていたと思います。特に印象深い学年などを挙げてみますと、

着任1年目に教えた13回生（残念ながら持ち上げられなかったが、3年生のときに再び教科担任ができた）と顧問をしたESSの11回生のメンバー、着任2年目の12回生、初めてクラス担任をした15回生、2度目にクラス担任をした20回生（3年生になるとき私は転勤した）、技術面での指導は全然できなかったが、顧問をしていた軟式テニス部の部員達があります。

良き生徒諸君、良き教師集団に恵まれて幸せな教師生活を送れたことを感謝しながら、加古川東高校の今後益々の発展を祈念いたします。



昭和40年4月～昭和49年3月
兵庫県立明石城西高等学校教諭

阿部 俊彦

東高が創立70周年との由、心よりお祝い申し上げます。駄文ですが楽しかった東高在任中のことをスケッチ風に書いてみます。校舎：着任したころはまだ創立以来の木造モルタルの校舎で、グラウンドは現在の校舎の所にあり、現在のグラウンドの位置に二階建ての校舎が並んでいた。一階に校長室、事務室があり、その東隣りに宿直室がありました。そこにはタンスがあり男子職員の名前が引き出しに書かれていて、各人のシャツが入っていました。宿直員制があったころです。風呂は校務員室に入れてもらいました。今も在職されている前さんにもよく世話になりました。南に二棟あった普通教室とは木の屋根の渡り廊下でつながっており、今はもう故人となられた木下先生や北出先生の担任しておられた2年生のクラスに、ギシギシと鳴る

30年前の東高 —楽しかった日々—

階段を上って授業に行ったことがあざやかに思い出されます。

普通教室の南側には作法室があり、そこで忘年会や体育大会の慰労会がおこなわれていました。今では考えられないのどかなものでした。作法室の西には美術室があって名物先生の前田先生が住んでおられたことも印象深くのこっています。校舎の東側は渡り廊下でその東に校務員室・調理室があり、テニスコートに面して保健室がありました。昔の良き校舎のた、ずまいであったと思います。

職員：私が着任したころは古い伝統的な雰囲気があったように思います。学年主任は井置・谷沢・高松の各先生がグルグルと担当しておられたようです。私は生意気で無鉄砲でもあったので、新任早々の職員会議で最長老格の先生にカミついて一瞬会議が

凍りつくようなこともありました。また「担任させろ！」の要求をして3年目にやっとさせてもらいました。それが何と女子ばかりのクラスで、2年3年と担当しました。生徒の数は58名で、今から考えるとよく入りきれたものだと思います。思い出も色々なに残っています。

古いといえば組合活動なども停滞していたのですが若い人を中心に初めてストに突入したときの息づまる緊張感も忘れられません。

現在の学校現場はなぜこんなに忙しいのかと思うぐらいバタバタと追われていますが、当時はもっと職員同士で遊ぶ余裕がありました。とくに定期考査中などは、毎日午後になるとテニス・ソフトボール・ボーリングなどをしていました。年輩の先生方とも一緒でした。

試験中以外でも夕方になると私達は頻繁に近くの喫茶店で教育論議と称して議論していました。ときには10人近くにもなりました。「竹林の七賢」ならぬ「茶林の七奇人」ともいうべき集まりの中から、のちにガリ刷りの東高有志職員の同人誌『亞』がうまれました。14ページからときには50ページを越えるものまで、3年余りの間に10号まで発行されました。まったくの手作りのものであっただけに楽しい思い出としてのこっています。

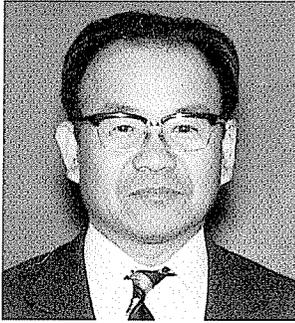
女子クラスを卒業させて次に二回男女混合

クラスを担当しましたが、このとき生徒全員の家庭訪問を思い立ち、夏休みを利用して東は明石の東端（当時は学区内）から西は曾根、北は志方まで50ccバイクで汗だくの家庭訪問をしたことも、担任としてよい勉強になりました。

また昼のSHRに毎週一回クラスでバレーボールをするなど勝手なこともさせてもらいました。

部活動：着任して担当したのが軟式テニスと地歴部・放送部であった。ラケットを握ったこともないテニスであったが、部員と一緒に素振りから始めて、毎日のようにコートに出ていた。さいわい男子は19回生の市場・村垣組、20回生の西川・畑組、21回生の木下・小林組などいずれも県で1位あるいは2位になり、何もできない顧問のもとでよくがんばってくれた。また合宿も学校で男子だけおこなったが、女子部員が朝・昼・晩の食事をつくってくれたことは今思い出しても大変迷惑をかけたなあと深く感謝したい。

生意気な若僧であったが、先生方には大変可愛がってもらいました。祈！益々の御発展！



昭和46年4月～平成4年3月
財団法人 青松会 理事
小 原 博

歩く・歩む

本校も創立以来70年、人生で言えば「古稀」とか、その間歩み続けて来たことになります。大変お目出度いことです。

その間にはいろいろなことがあったでしょう。火災で消失した創立当時の校舎、再建された木造モルタル塗りの校舎、現在の鉄筋校舎、戦前の恐慌、戦後の荒廃、荒凶などを知っている校地、その上でくり広げられた人間ドラマ等々……。

なぞなぞに「四本足で歩き、やがて二本足、次に三本足で歩くものなあ～に？」と言ったことがある。人間の一生を「歩く」ことに関する一面からみたものだ。

人間歩くことは大変大事な機能である。人類進化の途上（約350万年前）二本足（脚）歩行が生れ、四つん這いから立ち上ったために前足（手）が自由になり物を作ったり、使ったりすることが出来るようになり文化

もそれに伴って築き上げられて来たと言える。

「歩く」と言えば生徒の頃、誰言うともなく 3人で約8kmの道を早朝自宅から学校まで歩いてみましたが三日坊主ならぬ一日でチョン、2日目からはやはり自転車通学にもどってしまいました。戦中、戦後間もない頃でしたので通学途上自転車の故障が多く、日毛の穴門近くの自転車屋さんが「たまり場」で修理の間だべるのが楽しみでした。

「遠足」と言った学校行事がありました。近くと言っても4km位ある所（例えば石の宝殿）へ文字通り歩いて行っていたのですが、最近はバス旅行が多くなり歩くことが少くなりました。4月氷丘へ新入生歓迎遠足ということで歩いて行っていました。少し前からは校内でするようになりました。

交通事情、生徒数の問題もありますが続けて欲しかった行事です。

平素小生が校内でどの位「歩く」かを測った時期がありました。その数値をみますと〇年1月は平均5,792歩/日、2月は4,726歩/日、3月は4,989歩/日となっています。この3か月間で最高は9,429歩(当日は入学学力検査の日でした)で、最低は2,571歩(教科書購入日、土曜日、共通一次テストの日)でした。もう少し長期間測ったのですがメモがみつかりません。1日1万歩が健康のためによいとか、学校厚生会から万歩計をもらったことがきっかけで歩く人もいます。

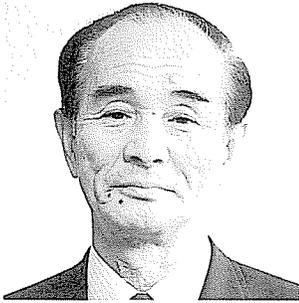
農作業も最近では乗用田植機・トラクター・コンバイン・軽トラック・小型ダンプカーなどで歩くことが少くなりましたが、

私は歩行型トラクター・バインダー・一輪車・リヤカーなどでできるだけ歩いて田畑に出るようにしています。

現在は測っていませんが退職してからは1日数千歩位になっているかも知れません。よいとわかっても仲々実行に移せないのが人の世の常、少々肥満気味ですので歩いたらと思いつつ日々を送っている次第です。たとえ1日でも思い加古川市主催の「ツデーマーチ」に1日参加し10km余り(25,570歩)歩きました。少し疲れましたが久し振りに快い汗をかきました。

いろんな病気持ちですが80周年にまたお会い出来ればと思っている今日此頃です。末筆乍ら本校が益々発展し、大臣をする人があってもよいとも思ったりしております。





昭和47年4月～昭和62年3月
武庫川女子大学教授
松本 敏和

クラブ（剣道）活動の思い出

前任校（姫路西）から転勤し加古川東高校で体育教師としての職を終えるとは考えてもおりませんでした。これも偏に皆様方のご指導とご協力の賜とそしてお世話になりました15年間を懐かしく偲んでおります。着任後1年間は何かと学校にそして生徒にとけこむのに必死でした。その間努めて生徒に接して感じましたことは、前任校と類似の進学校でありながら勉強と運動の両立に悩み秀れた能力をも低下させている生徒がいるのではないかと……。完全な両立は望めませんが少しでも近づける手段はないものかと考えて過去の私流の「何が何でも引っ張っていく」指導方法を変更して、少しのヒントを与えて生徒が自分で目的を持ってやる気を出させ短時間で集中してより効果的な練習が大切な要素であると考えました。東高生は頭も良くその上素直であ

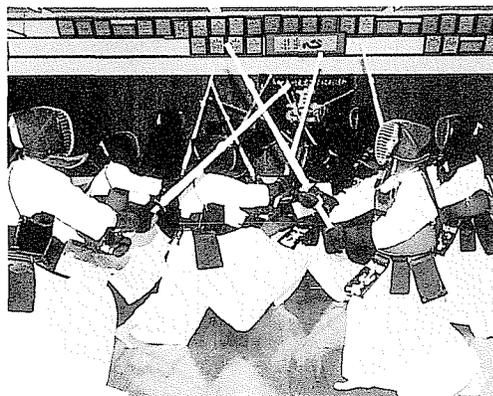
る点剣道には合致する受け入れやすい部活動でありますから、特に生徒とよく話し合いそして主将を中心にして限られた時間内の独特の練習メニューを作成しました。その間も伝統とご理解のある剣道部OB会の方々、そして加古川剣道連盟の先生方にも直接のご指導をいただき今更乍ら深く感謝いたしております。年2回（現1回）の合宿練習こそ全く私にとってまたとない好機会でした。男子生徒と1つ蒲団で寝ました。足で顔を蹴られたり、大きないびきや寝言に驚かされた今後二度とない思い出。満足な部室もなく、練習が始ると狭い道場は若い男女の熱気で満杯。気を抜くものなら転倒し、ぶつかり合う様は頼もしくさえ感じました。隣りの柔道部の常深先生の厳しい指導練習にも大変刺激を受け正味1時間の練習は短かく時間オーバーすることも度々

ありました。

東播大会入賞，ベスト4，つきにも恵まれて信じられない早すぎる優勝。男子は全国大会こそ参加することはできませんでしたが近畿大会にはアベック出場するなど数回の参加ができました。このように男子が強くなりますとそれにも増して女子剣道が強くなりました。昭和54年には中谷（武庫川女子大剣道部主将～現明石市立二見小教諭）が福島県で行なわれた全国大会に個人出場し4年後の58年には夢にまで見た団体で県大会優勝，そして愛知県で行われた全国大会に出場いたしました。（尙岡田，（次）竹元，（中）越生，（副）木村，（大）元井）。元井は神戸大学の剣道部主将として全国学連大会で活躍し，木村は結婚後一児の母ながら全国婦人大会で全国優勝するなど現在も県代表選手として又後輩のよき指導者として活躍しております。生涯スポーツ，生涯剣道のよき手本として私達さえ学ぶことは大であります。

生涯忘れることのできない加古川東高校。誰しも旧中学は5年，現高校は3年で卒業ですが私は母校でない東高校に16年も奉職させていただきました。そして第二の母校と自負しております。このよき思い出を胸に70周年を記念し永遠の弥栄を念じております。

（結婚されている方々も旧姓で失礼しました。）





昭和49年2月～昭和51年10月

廣岡正義

教頭を拜命して、最初に加古川東高校へ着任するとは、何と倅せなことよと、感激に咽ぶ思いで校門を潜る。

前任の馬場教頭先生とは、三木高（三木高女の方が正しい）以来の間柄で、いつも私に席を譲って転出される。

この日、実にタイミングのよい助言を下された。三日以内に全職員の名前と顔を覚えよというのである。

早速卒業アルバムを借り出して、家で首っ引きで取り組み、この課題がクリア出来る頃になると、職員室は、好意と親愛の情に充ち満ちていた。有難い助言であった。

着任勿々、耐寒マラソンの準備期間ということで、校外へ出て、生徒諸君の周回コースの視察に当たれという。指導部長だった故中村先生に案内されて、指示された場所に立っていると、黙々と走る集団の中の一

着任当初の思い出

かたまりから、私の前を通過する時に、かけ声が出る。

「三三五五四四三二」

一回りして来ては、また、これを繰り返す。三回四回、かけ声を弾む思いで聞いていた。このかけ声の数字は、前日の着任式で、私が挨拶した中に出てくるもので、この一団はあの挨拶は面白かった、気に入ったよと、私にエールをおくってくれているのであった。

強烈な、今に憶い出に残る印象である。

生徒諸君は、柔軟な感性の持ち主で、透き通るような感動には、素直に伝えてくれる。この次に、また挨拶をする機会があったら、またまた伝えてくれよと、奮い立つ思いで聞いていた。

3 3 5 5 4 4 3 2 というのは、2の25乗のこと。実は、挨拶の中で、私がここにいる

のは父と母がいたからで、その父と母にはそれぞれ両親がいた。かくて二五代遡っていくと、2の25乗、二五代前に33,554,432人も父と母とがいてくれたからこそ、今の私がある。諸君一人一人についても33,554,432人の父母がいなければならないわけだから、全くの他人じゃないことになる。よろしくという内容であった。

挨拶という字が、どうして「てへん」なのか。口でするから「くちへん」にするとか、ことばでするから「ごんべん」であらわすのなら、理屈に合うが、「てへん」とは変だと気づいたのは、退職してからであった。慌てて辞書に当たってみると、何と禅宗から来ているとかで、在職中の不勉強のせいで、生徒諸君に伝え損ったことを後悔している。挨拶という熟語がある。押し合って坐る意だそうである。

拶指という熟語がある。指の間に棒をはさんでせめあげる拷問のことという。

挨拶とは、禅の問答の心構えをあらわすもので、問う者も、答える者も生命がけ、いい加減な問い方、答え方なら容赦しないぞという気魄がこめられた言葉だそうである。作麼生(そもさん)「そも」は「何」。「さん」は助辞。中国宋代の俗語で、禅宗で使う。どうじゃ、いかにの意。

これを受けて答える側は「説破」(せっぱ)切迫の気合いを感じさせる問答開始の挨拶である。

そんな意味があるなどとは、全く考えもしていなかった当時であるが、打てば響くような反応を得て、ますますファイトを燃やし、出会いを大切に、しっかり挨拶をしていけるよう勉強しようという気を起こしてくれた着任当初の思い出である。





昭和51年4月～平成2年3月
兵庫県立北須磨高校教諭
太田淳夫

14年をふりかえって

創立70周年、おめでとうございます。
私はあと数か月で38年の教職生活を終わろうとしていますが、その間、加古川東高でお世話になった14年間は特に印象深い、また有意義な期間でした。
私が着任したのは昭和51年4月、街に「ビューティフル・サンデー」の曲が流れていました。入れていただいた学年は、今は亡き中村理平先生が主任、井上仁先生が副主任でした。一見厳しいようでその実人情味溢れた中村先生と、いかにも芸術家らしく豊かな知性と感性を兼備された井上先生は、この時大変お世話になった方として、忘れ得ない方々の一人です。
入学式が済んでしばらくの間は、まだ新しい学校に慣れていない私は、うろろう、あたふた、夢中で過ごしました。「あさぎり寮」での「校外研修」、個別面談、日岡山への欲

迎遠足、そして中間考査、考査が終わると文化祭準備、文化祭本番、文化祭を挟んだ教育実習などなど、矢継ぎ早やの行事をなんとかこなしてほっとした時には、はや6月下旬、1学期も終わりに近づいていました。慣れていなかったせいでしょうが、正直言って、なんと忙しい学校だろう、と思ったものです。
そんな中で、さすが加古川東だ、と感心したのは、学校に慣れていないはずの生徒が、そうした行事、特に「校外研修」の時の学級活動や文化祭の準備をする際に、慣れない私が下手な指示を出すまでもなく、学級委員長を初めそれぞれの学級役員が実に見事に学級をリードして、ほとんど自分たちだけでやり遂げたことです。この時の学級委員長は沼田君と言い、後に生徒会長を勤めたぐらいですから特に優秀なリーダーだ

ったのですが、生徒会の自主的な運営、体育祭での応援合戦の指揮、指導などを見ますと、やはり豊かな指導性を備えた優秀な生徒がたくさんいることは確かです。学習面での優秀さは言うまでもなく、人物的にも優秀な生徒にこれほど恵まれた学校に、これほど長い間勤めることができ、とても幸いだったと思います。

その後昭和58年までいろいろな学年に所属しました。中坊先生（先生も先年亡くなられました）の学年で3年間、そのあと再び中村学年、そして岡田収一先生の学年にそれぞれ1年ずつお世話になりました。岡田学年では副主任をさせていただきましたが、紺野、井上、河村、徳田、立花、前田、武田、岡部、鳩川（先生も亡くなられました）、磯野の各先生というそうそうたるメンバーで、私はその中で揉みくちやにされている気分でした。

昭和59年に教務部の仕事を仰せつかりましたが、この年創立60周年記念行事が行われました。あれからはや10年、早いものです。教務部での4年間は授業や考査、教育課程、入学者選抜などに関わる仕事に取り組みましたが、入学者選抜と授業時間割作成を行なう3学期から春休み明けまでの忙しさは格別で、お世話になった山根先生（この方も亡くなられました）、藤井舜介先生、公森先生、森先生、井上正仁先生には感謝しています。

入学者選抜といえば、昭和60年に本校で最初の理数コース推薦入試が行なわれました。占部教頭先生のご指導をいただいて入学者選抜実施要領を苦勞して書き上げました。苦勞といえば、数学、理科の先生方の苦勞も大変でした。県教委のチェックを受けながら各校で問題を作成するのですが、何度も作り直しを求められ、大変苦勞されたようです。

昭和63年とその翌年、総務部で前田先生、岡村先生、岡先生、小寺沢先生にお助けいただきながら、各種式典、職員の厚生、PTAなどの関係の仕事をしました。

平成2年3月31日、最後の片付けをして校門を出たとき、何とも言えない虚脱感に襲われました。それまで自分を支えてくれていたものがすっかりなくなってしまった、そういう気持ちでした。（平成5年11月記）





昭和55年4月～平成元年3月
兵庫県立農業高等学校教諭
紺野靖幸

加古川東高との9年間

創立70周年おめでとうございます。旧職員としての思い出との事ですが、何からまとめたらよいのかとまどっています。

私は、東高に昭和55年から9年間お世話になりました。36・39回生の担任及び生徒指導部に属し、精一杯勤務させていただきました。県立兵庫高校へ転出するまでの9年間を懐しく思い出しながら(34～43才)印象深い出来事を、この原稿に書かせていただきます。

まず、36・39回生の修学旅行についてですが、従来からの3泊4日、信州方面という制約の中で、旅行好きという事から実施案作成係となった私は、何とか変化に富んだ内容にアレンジ出来ないものかと考え、名古屋→信州から立山黒部アルペンルートを経て金沢より北陸本線経由で加古川まで専用列車で帰る案を学年会に提出しました。

方面という言葉をとって取った、雨天のリスクの多い案でしたが、竹一千城・福島浩之両校長先生及び各学年団のご理解を得られ実施されました。幸い2回とも好天に恵まれ、生徒諸君には十分に立山黒部アルペンルートの秋の大自然を満喫してもらえた事と思います。帰りの列車の中で、39回生の「六甲おろし」の大合唱を散々聞かされたのも懐しい出来事でした。(注…S60年阪神タイガース優勝ノ私は大の巨人ファン)

バスケット部の顧問としての思い出は、数限りなく有りますが、34回生三浦泰君をキャプテンとするチームが県総体で3位に輝いた事が強く思い出されます。新チーム結成時には、中学生との練習ゲームですら負けていたチームが見事な戦績を残したのです。部員の努力・頑張りに心から讃辞を

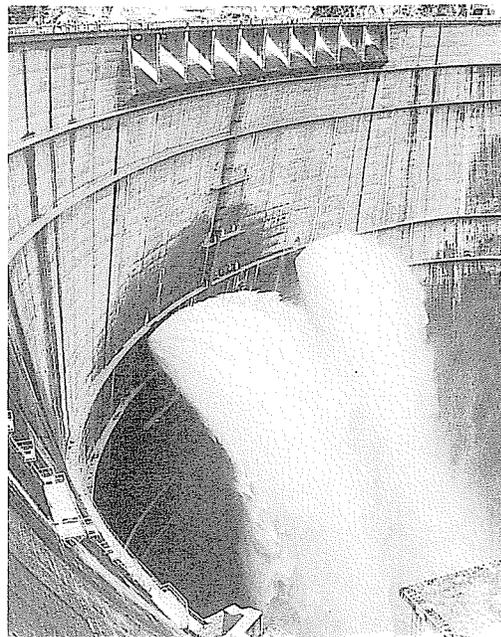
送りたいと思っています。島根国体に県代表に選抜され出場した松下博昭君も素晴らしい選手でした。今年こそ今年こそ、2部へ転落かと周りから言われながら1部校の座を守りぬいた女子部員の人達。指導者として全ての面で未熟な私に付いてきてくれ、素晴らしい思い出の数々を残してくれた彼ら男女バスケット部員に心から感謝しています。

生徒指導部に属した残る2年間では、特に自転車の係として、駐輪場の設置及び違反自転車の取り締りに全力を注ぎました。意地になって無許可自転車にチェーンをかけ廻った事、違反常習者の生徒諸君との間に不思議な心のふれあいが出来た事なども懐かしい思い出です。

体育の授業終了前にクイズを取り入れ、正解者は無罪放免、間違えば、グラウンドを3周走ってから終り、とかのペナルティを課したり、巨人が負けた翌日は、時間ギリギリまで授業したりと生徒諸君には相当な迷惑をかけた事と思っています。

今まで書いてきたように、東高への貢献は、微々たるものであったと思いますが、私にとっての東高在職9年間は、かけがえの無い貴重な経験でした。東高を去った現在も、今後もその経験を誇りとして頑張っていきたいと思っています。

加古川東高校が、今後益々ご発展されます事を念じつつペンを置かせていただきます。





昭和56年4月～平成2年3月
兵庫県立御影高校教諭
河村 芳 道

木々をめぐる風景

好きだった風景を三ヶ所思い出します。
まずひとつめは、グラウンドバックネット裏の桜の木々です。加古川東高校の9年間、野球部の顧問でした。時折グラウンドに出ると、結果として桜の木々をめざし、その下に居ることになりました。春の花の頃は言うまでもなく、夏の緑陰も格別でした。夏の陽射しの下、練習試合の彼我の選手諸君が、この木陰を選んで憩っていました。中には、前日いささか飲みすぎたと思える相手校監督が、木陰で体を休めながら、選手に指示することもあり、その光景もふしぎと絵になっていたものです。また、夏の桜の木は、無数と思えるほどの蟬たちをその幹に抱えこんで、蟬しぐれの音や、空蟬の姿とともに忘れられません。子どものころ蟬捕りが下手で逃げられてばかりいた私も、ここでは大変な蟬捕り上手でした。

そんな桜の木々を背に、時折審判をすることもあったのですが、こちらの方は昔の蟬捕りと同様、下手でぎこちないものでした。

次は南館の南西にある藤棚です。正確に言うと、その藤棚を通して教室の窓越しに射す陽の光というところでしょう。しかも、季節は冬で、教室の子どもたちは3年生でなければなりません。冬の陽が、すっかり葉を落とした藤棚のフィルターでこされ、透明な光の束となって教室に射し込みます。寒さに背を丸めうつむきに歩いて入る、その教室で見た、成長した穏やかだが緊張感のある3年生の表情をなつかしく思い出します。

最後には本館北側の植え込みです。といっても現在のものではなく、今はなきかつてのものです。そこでは、ヒマラヤスギの大木に混ってさまざまな木々が雑然とだが、

しっかり個性を主張していたように思えます。もっともこのことに気付いたのは、植え込みの模様替えがあり、整然とした一見いやに行儀のよい今の姿になった時です。植え込みだけでなく学校や社会も、木々だけでなく人間も、一見雑多であるが、個性を主張した上で調和しているのがよいのだと、いささか強引に思ったりもしたものです。

現任校の中庭は見事な桜の園です。手に取る近さで、窓一面に広がる桜の下の子どもの表情は決して桜の美しさや生命力に負けません。むしろ互いにひき立てあっているといったところです。

遠く思いおこせば、私自身の高校時代には、3階の高さをしのぐユーカリの巨木がありました。学校への思い出が、ふしぎと木々への思い出につながるのは私だけでしょうか。





昭和57年4月～平成4年3月
兵庫県立姫路西高等学校 教諭
藤 井 一 亮

東高の文化をおもう

昭和48（1973）年，秋，加古川の地に越してきました。当時，粟津神社のすぐ近くの住まいから明石市の方へ通勤しておりました。出勤の途中や，夕方の帰宅時に多くの東高生に出会ったり，また，加古川図書館でも真剣な眼指しで読書や勉学に励んでいる東高生を目にしたことがよくありました。詰襟のバッジとセーラー服の刺繍が印象的であったことを今でもはっきりと記憶しています。

それから十年近く経った昭和57（1982）年，東高に転勤し，今度は内部より生徒諸君を眺めながら，東高の教育に参加することになったのです。たしかに，内側の人間となってみると，東高にも，多くの人々が現実に生活しているのですから，様々な問題が私の眼に映ったのも当然のことです。私自身も喜怒哀楽の思いに駆られたことも

度々でした。しかしながら，上記のことを承知しながらも，やはり，東高は種々の課題を生徒と職員が一体になって，その解決を図ろうとし，また，新しく創造しようとする情熱のある生き生きとした学校でした。毎日の厳しい学習に取り組む真剣な態度はもちろんのこと，加古川の名物とも言われる体育祭や文化祭，そして，人間としての在り方を深く問う同和問題や障害者問題についての全校あげての討論の高まりなどに東高の意気込みがよく現れておりました。

毎年，何名かの先生方は転勤や退職で東高を去っていかれ，生徒諸君も三年間で卒業していきますが，それらの活動は連綿と継承され，今や東高の文化となっているように思われます。特に，先にあげた討論会について，私はホームルームやその事前の打ち合わせ，また，全校委員会などでクラ

スの諸君や生徒会を中心とする人たちとよく話し合ったことを思い出します。そこでは「本当に分かるということはどういうことなんでしょうか」、このことが繰り返されてきたのです。これは、ギリシアの哲人の言う「無知の知」から「真なる知」、つまり、よき生き方を目指しての共同作業を地で行くものようでありました。

人と人とが真剣に向き合えば、お互いの深淵をのぞくこともあるでしょう。

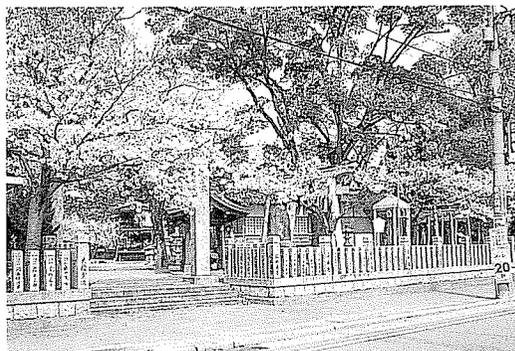
人と人とが本当に理解し合い、友となるには、時には激論を経なければならぬし、涙しなければならぬこともあるでしょう。しかし、このことによって人は友を得るでありましょう。人を知り、心の友を得ることは高校時代の最大の喜びの一つだと確信しています。

先日、一人の卒業生と同じ電車に乗り合わせたとき、彼は万感を込めて、「東高はよかった。学校に行くのが楽しかった」と、語ってくれました。私は、彼のように自分の高校時代をいとおしむ卒業生を数多く生み出している加古川東高等学校はこの地の立派な文化財だと思うのです。もちろん有形のそれではありません。東高で日々行われている教育そのものを指してのことなのです。一般に無形の文化財は一代限りですが、けれども、東高の教育は時代が移り、人々も替わりますが、永遠に伝えられていく文化財なのです。私はそう信じています。

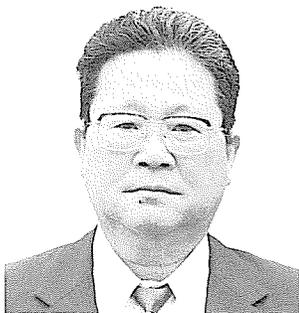
かつて、与謝野晶子は、

劫初より、つくりいとなむ 殿堂に
われも黄金の 釘一つ打つ

と、詩いました。私は在職十年もあったのですが、とても彼女のように黄金の釘は打ちませんでした。しかし、自分の人生のある一時期、小さな、小さな鉄釘の一つを打たんとしたこと、これを生涯の喜びとしています。



栗津神社



昭和58年4月～昭和62年3月
滝野町議会議員
吉村芳郎

在職中の出来事

創立70周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

従来から、東高校は、東播磨でも兵庫県全体でも進学高校として有名校でした。

私は、県教委社会文化財課参事から加古川東高校事務長として赴任いたしました。

東高校へ赴任するまでの6年間は、事務局勤務で高校から離れて勤務していたため、高校に赴任するのと、自宅から通勤距離が近くなるのと、その上赴任するのが東高校であるため大変嬉しく感じました。

赴任してみて、学校全体の雰囲気は非常に落ち着いた感じであり、生徒諸君の朝晩の挨拶も、きちんとされるし流石加古川東高校であると云うことを強く感じました。

私は事務職員であるため直接生徒諸君とかかわることが少なく関係のある思い出も少ないため、私の在職中に実施した工事関係、

その他について記したいと思います。

昭和59年度は東高校の創立60周年の年に当り、記念事業の計画、学校整備も実施せねばなりません。

前庭のロータリーの改修、校門両脇の囲障の新調と創立記念日に間に合わせるため急遽工事に当たりました。

当日の式典には同窓会の先輩（第1回卒業生）である、三菱金属工業株式会社社長稲井好広氏に御来校頂き体育館で記念講演をして頂きました。

また当時の兵庫県知事坂井時忠氏に御出席たまわり祝詞をいただきました。

当時としては高校の創立記念日に現職の県知事が来校されることは非常に稀れなことであり、加古川東高校なればこそと、我々も深く感謝いたしました。

昭和60年にプールを使用しない時期だった

と思いますが、底の鉄板が破れて噴水のように水が吹き上げ、プールの底に大きな穴があいてしまいました。

その原因は、プールが出来るまでは、プールの底になっている下に水路があったため出来上ってから水路となって、水が流れていたため、下からの水圧で押し上げられ溶接してあった鉄底が破裂して、噴水のように吹上げたのです。

県当局に状況を報告し、専門の技師に現場を調査して頂き修復の打合せをいたしました。結論から云いますと、このまま再建しても駄目だ。校地の外側の擁壁を改修して水がプールの底に廻らないように遮断して、プール全体を新設しなくてはならないことになり、早速着工に向けての準備をし、昭和62年3月末、新プールが完成しました。また昭和61年に野球部の生徒で大変大きな当たりを打つ生徒が出現し、近所の民家に打ち込み、窓ガラス、屋根瓦等を破って、野球部長と私と一緒に謝りに何回か行ったことがありました。

このまま放置しておくわけにもいきませんので防球ネットを高くするしかないと考え、県当局に状況を説明し、予算要求と設計の依頼をいたしました。

周囲の防球ネットを一段と高くし、ボールが外部に出ないようにしました。またバックネットも新しくし、三角形の天井もつけました。

バックネットの天井張りと言うものは、外には例のない状況だと思います。

それでも完全防御出来たと云う状態ではなかったです。学校周辺の民家には、ボールが飛び込むため、多くの迷惑をお掛けし、お叱りを受けたりして、問題もありました。私は昭和62年3月31日付退職いたしました。学校の玄関を出る時、校長先生初め多くの職員の方々に見送られ、花束まで頂き学校を去ったのですが、その時は本当に胸が熱くなり、37年間兵庫県に勤務し、その最終の4年間を勤務させて頂いたことは感謝で一杯です。今後東校の益々の御隆盛を祈念すると共に、同窓生、生徒諸君の御多幸と御健勝を心からお祈りいたします。





昭和58年4月～平成5年3月
兵庫県立夢野台高校教諭
公 森 博 子

思い出 雑感

創立70周年を心からお祝い申し上げます。加古川東高校では10年間お世話になりました。まだ転任して間がないのですが、色々な想いがよみがえってとてもなつかしく思っております。

私が着任した年は38回生が1年生で、授業も、ホームルームも生徒会も、各行事も38回生と一緒に東高でのスタートでした。その年の冬は加古川では珍しく大雪が降り、「早く下校しなさい」の放送を聞きながら、37回生の2年生と立体凧作りをしました。その時の凧作り感想レポートは今も大切に持っています。

その頃の美術教室は、まだ机が木製で、なごりの椅子がいくつか残っています。窓枠も鉄製で開閉がとても重く、すき間から風が入り、ガラスもすりガラスで、いつもぼんやりした光が教室を照らしていたような

記憶があります。その後鉄枠もサッシに変わり、窓ガラスも入れ替り今の明るさの美術教室になりました。

その教室で——暗幕が破れて、スライドがうまく映らず、いつも授業のたびにカーテンを押さえてくれた生徒。クラス毎のスケッチブックをいつもクラスメートに配るサービスをする生徒。必ず使った机を雑布でふいて帰る生徒。——数えきれない思い出をたぐってみれば、授業よりもその周辺のふとした出来事や、生徒の表情が浮んできます。

東校に着任して間もない頃、生徒会室前の廊下を、ひょいと下靴を脱いで歩いている生徒を見て、「ああ、土足はダメなんだな」とあたり前のことなのですが、すごく感心しました。大きな行事—体育祭・文化祭はもちろん、学校生活のいろいろな場面で生

徒のパワーに圧倒され、早くこの学校に慣れたいなあと考えたものです。ホームルームでの話しあいも、スタートは生徒の声から始まったのだという歴史。球技大会の得点方法は、単に勝ち点だけで決まるのではないこと。すべての委員会は公開されており、だれもが参加できること。等々。年を重ねるごとに少しずつ、東校の「精神」を先生方や多勢の生徒から教わったように思います。

先日、突然卒業生が訪ねてくれて、「卒業してから思うけど、東高での生活は、いろんなことを考えるきっかけを作ってくれたと思っています。」と聞き、私も全く同じ想いで一杯になりました。

東校で学んだこと、様々な出会いを大切に育ててゆこうと思っています。

東校の「精神」がいつまでも生き生きと息づき、今後益々発展されることをお祈りいたします。



樋渡典英（高校47回）

あの日、あの頃、そして今…

思い出	穴田 等	(中学 1 回生)
我が加古中時代	井上 貴之介	(中学 3 回生)
新入生の追憶— 2 円 50 銭の夏服・辛かった寒稽古—	橘 清八	(中学 4 回生)
物を生かす生物学	豊田 喜唯	(中学 5 回生)
清流会東京支部	三浦 節	(中学11回生)
私にとっての「加古中」—愛する勇気と苦しむ勇気を—	田中 國夫	(中学15回生)
太平洋戦争時に生きる中学時代	宮永 弘兄	(中学21回生)
軍人ニ賜ハリタル勅諭	水原 洋城	(高校 2 回生)
清楚可憐なセーラー服よ、永遠なれ	田代 倭子	(高校 5 回生)
東京湾のパイロット	古門 昭生	(高校 7 回生)
9 回生東京同窓会—我等 9 回生—	大川 京子	(高校 9 回生)
今あれば古きも楽し	鹿多 証道	(高校20回生)
ハチャメチャ生徒会	森本 幸吉	(高校28回生)
偏屈生徒の感謝のことば	脇谷 政孝	(高校33回生)
君達はダイヤモンドの原石	阿野 康子	(高校39回生)
私の大学生生活 1 年目	前田 晴子	(高校45回生)



中学1回生
穴 田 等

思い出

光陰は矢の如しと云うが早や70年と云う歳月がまたたく間に過ぎ去った。

大正時代の終りに近い大正13年母校加古川中学校は呱呱の声を挙げました。その年の3月26日隣りの加古川女学校にて入学試験が行われ私も第1回入学生150名の一人として入学を許可された。

思へば母校は当時加古・印南両部における多年の要望により新設されたが校舎は未完成のまゝで入学式は女学校講堂で行はれて開校の運びとなったのである。

加古川の粟津の一角（現在の位置）に周辺田圃の中に建てられその校姿はモダンな建築物として当時としては近代的立派なものだった。私等1回生はピカピカの小倉服に赤い編上靴を穿いた姿は通学途上街の人からジロジロと眺められたものである。

さて、校舎の建設工事は急ピッチに進めら

れ4月14日漸やく第1棟が出来上り、女学校から机椅子を借りてきて其の日から授業が始められた。校舎は出来たが備品類は全くなくて不自由乍ら一学期は過ぎた。

校庭は地均しの出来てない全く河原同様大きな石ころだらけで歩くのが困難な有様でした。夏休みが明けて登校してみると背丈け程の夏草が生い繁り、体操どころか草引きが授業がわりで新入生として我慢して仲良く精を出し、友情も生まれました。

二学期の授業も順調に進み秋半ばの頃突如として大災難に見舞われたのであります。

忘れもしません、11月30日の夜の8時45分母校に大火災が起きました。

校舎の南西隅附近から出火し折柄の強風に煽られ校舎2棟小使室等が焼け落ちました。講堂と雨天体操場及び武道室は何とか火災を免がれましたが……

何と云う悲惨なことでしょう！

当時の記録には

眞に職員生徒の落膽はもとより地方有志の憂慮，県当局の苦心，將又一般社会の懸念はただ悲惨の一語を以て表はすより外はなかった

と誌されてあります。

当時の職員生徒はよく協力一致跡始末に尽力しました。

僅か3日間休業して焼跡の片付けにかかっただけで，其の間に焼残りの雨天体操場内を四室に仕切り仮教室として授業を再開したのであります。

県当局の配慮により再建工事が逸早く進められ翌年3月末には教室一棟と小使室及び附属建物の再築工事が完成しそれから次々と整備工事が行われたのであります。

こんどは準耐火構造で瀟洒なものでした。1回生のみが体験した学校火災のことは以上記述した通りであります。

次に2年生のとき3学期の2月15日全校生徒が寒風を衝いて高御位山に登山しましたその時の生徒の作文の一節に

この山は中國山脈の一山であってさほど高い山ではないが非常に眺望のよい所である，漸やく頂上に達すると渺々たる瀬戸内海の景色，淡路島を始め無数の小島がはっきり見え白帆が其の間に点々としてゐる，云々

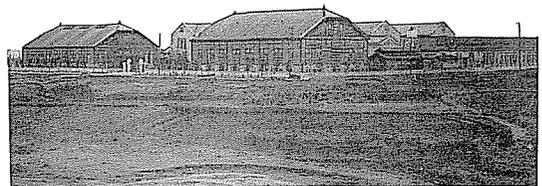
とある，その山頂からの眺望は60有余年を

経た現在の姿は変貌著しく我國經濟の半世紀にわたるめざましい發展により今や東播工業地帯として煙突が林立し煙が空を蔽い昔の姿は全く見られないのであります。

次に思い出としていつ迄も忘れられないのは4年生の5月中旬全校職員生徒高砂港より摂州丸に乗り込み鳴門観潮に行った時のことであります，淡路島の西岸を南進し南淡亀の浦に上陸し観潮台上よりの渦潮の壯観は素晴らしいものでしたが帰路船上よりの観潮の時には先生も先徒もみんな船に酔い全くのグロッキー，吐き出すのを見て酔わない者一人もない有様，中には血さへ吐く者もあって船酔いの恐ろしさ苦しさを存分に体験しました。

その時のことは未だに私の頭から去りません。本当に苦しい鳴門観潮でした。

中1回生としては数々の思い出もありますが紙面の都合上この稿で終ります。



当時の中学校全景



中学 3 回生
歯科医師
井上 貴之介

我が加古中時代

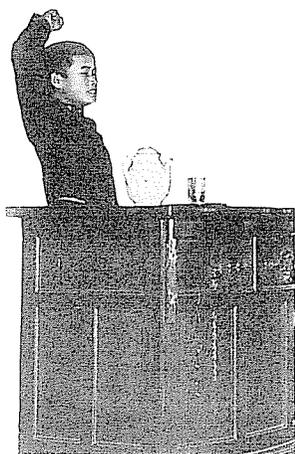
今日的に云えば、地域活性化の為に、前途有為の青年を育成すると云う目的で、明石一姫路の中間地区に設立された母校のように思われます。いずれも同様かも知れませんが、創立当時は、高い理想に燃えて、校長以下、大変はりきって居られた様です。講堂演壇左右には、質実剛健。自治創造と立派な扁額が掲げられ、文字通り、厳格そのものでした。登下校の際、先生は勿論、先輩に欠礼でもしようものなら、忽ち、鉄拳が飛んだような空気でしたし、下校後、普段着で歩いているのが見付かれば、即、注意と今から考えれば、想像も付かない状態でした。各市町村の狭い地区の小学校に暮してきた過去の学校生活からぬけ出て、初めて世間に出た様に、広い範囲の友人達が出来ました。立派な人、良く出来る人、怖い人、さまざまでした。初めて広い世界

の中に飛び込んだ様で、随分と当惑する事も多かったです。

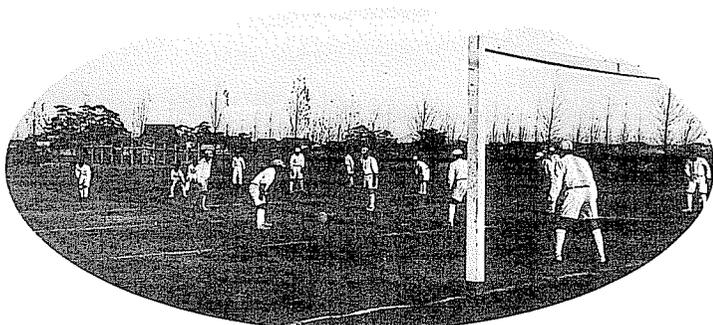
学校長の建学方針に、協力しない先生を、生意気だと云う事で、なぐりつけ、退学させられた一回生が、おられました。方法は別として、仲々、大人であったなど、今も強く印象に残っています。以来60年余、建学の精神は実を結び、地区地域県下は勿論、各地に於て、立派に加古中精神を発揮されて、国家、社会に尽されているのを見る時、若き日の教育の影響をしみじみと感じます。また、社会生活をしてみて、同窓の友情、有難味をつくづくと身にしみて感じる事があります。

戦地で永年月過した時、明日をも知れぬ戦地生活でも、同窓であると云う事で、かばい合って生き抜いた事も、度々、ありました。ある意味では、同窓生は、兄弟以上

の深いつながりをもった関係と、今更乍ら、感謝しています。ある時、突然、幼なかつたあの頃の友人、しかも、音信不通の彼は今はどうしているかな、元気かなと、追想すると共に、懐かしく思い返す事もありますが、これも、加古中という、血のなせる業か、現在の母校の発展が誇らしく思われると共に、益々の隆盛を祈って拙文を終わります。



中3回生の頃
弁論部



蹴球部



中学4回生
橘 清 八

新入生の追憶

— 2円50銭の夏服・辛かった寒稽古 —

第4回生の私達は、昭和2年に入学した。やがて着る夏服ができるまで当分和服着用ということになった。150名の一年生全員の中で洋服を着ていたのは姫路から入学したI君一人だけだった。他の者はみな着物に袴をつけ、しかも茶皮の編上靴をはく明治初期のハイカラ族の写真そのままの姿だった。加印地方最高学府の学徒として自他共に認め合いあこがれの的でもあった。大きな雑糞（布製の丈夫な鞆）を肩から斜めにかける。一日分の教科書と辞書など小さい私にとって重すぎ遂に脊柱が右へ曲がり、軍隊生活で不動の姿勢点検のたびに左肩が上っていると注意される困をなした。既に制服を着ている二年生以上は、教師や上級生に対し挙手の礼をすればよいが、和服の新入生は帽子をぬぎ、頭を下げて「お早うございます」と挨拶しなければならない。

登下校しながら前後に絶えず注意しつつ欠礼をしないよう気をつかうことが重荷であった。もし欠礼すれば後日の罰が恐しかった。私の通学路は、現在の稲美町から登校する自転車通学生が多く、それらの上級生に対し一々帽子をぬいで敬礼すると、彼等は車上から「お早う」とは言いながら簡単ぞんざいに挙手の礼をしてサーッと通りすぎる。全くシンドイ動作の連続であった。学校近くなると登校生も多くなり、教師には直立停止の敬礼をしなければならず、もちろん午後の下校の際も同様であった。

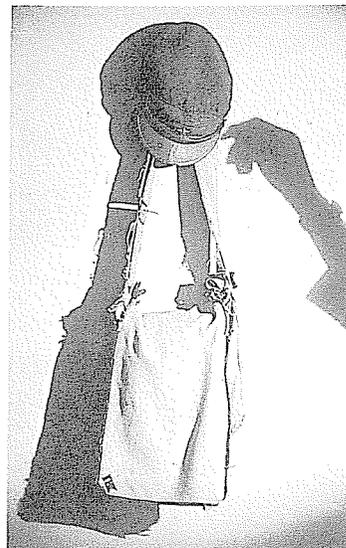
五月になってやっと霜降り地の夏服が出来上り、ゲートルの巻き方も綿密に教えられた。昭和初期の物価安の時代とは言え、詰襟^{ツメ}上衣長ズボン一着が2円50銭だった。某英語教師が「これがアノ2円50銭の服か」と半ば軽侮の語調で服を撫で廻したことも

記憶に深い。もう上級生に一人一人脱帽敬礼しなくてもすみ、軽く挙手すればよかった。

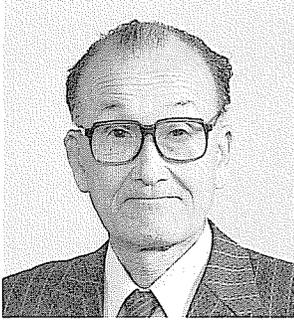
6月以降酷暑になっても、謹直な教師は白麻の詰襟服を崩さず着て授業をされたが、自由主義の教師は自分でサッサと上衣をぬぎ、「お前らもぬげ」と言われる以外師弟共々制服のまま学習を続けた。登下校も上衣着用、あの長いゲートルを幾重にも巻いたが、登校後また帰宅してほどくと身が軽くなる思いがした。現在の半袖一枚の高校生姿を見ると全く自由な解放性を羨しく感ずる。ついでながら冬服がまた特殊で、他校では外套が許されているのに質実剛健の校訓が遵守され、木綿の上衣に肌着は白ネルのシャツ一枚と規定され、ズボンの左右ポケットも作らせなかった。白の軍手手袋のみは許されたがマフラーなど厳禁、靴下は軍足のみという徹底した華美文弱排斥ぶりに終始されていた感がある。

一月始め、寒の入りになると武道の寒稽古が実施された。学校から2-3キロの在住生は、早朝六時から開始される本校の道場稽古に参加しなければならなかった。電灯もない真暗な教室へ手探りで入り武道着に着替える。全く冷水を浴びるような稽古着、道場の床、壘は氷のように冷たい。多勢の雰囲気の中で一時間余りを夢中で暴れ廻り、やっと温くなった所で解散する。霜の一杯おりた夜明けの田舎道を走って帰る

と、母が朝食を作るべくかまどを燃やすところだった。このような十日間の荒行がすむと皆（精）勤賞が授与されたりした。いろいろ追憶深い事どもが浮ぶが紙数が尽きようとしているので筆を擱く。



カバンと帽子



中学5回生
神戸大学医学部
のじぎく会会長
豊田喜唯

物を生かす生物学

私は理科の生物の教師として母校の東高校で4年間勤めました。それはいつ頃の事かと聞かれる時、歌手の菅原洋一さんが東高校の生徒だった頃と言うことにしているのです。私は加古中5回生の仲間ですが、実は3年で中退なのです。それが何で5回生なのか、5回生には重松景正君や龍見譲君が居ます。この回は昭和32年に同期会を始め、その後毎年欠かさず会合を続け、平成5年は37回目でした。4年終了で姫高へ進学した豊岡正見君が仲間なら3年終了で姫師へ進学した豊田も仲間だと言うことで、昭和44年以降5回生になっているのです。でも会名なしでした。

この回の会名が五清会に決ったのは一昨年です。森、久保田、豊田の3名の案、5回生の清流で五清会案が合格になりました。

加古中へ入学の頃私は医者になるつもりでした、所が父が事故で死にかけて弱気になり師範学校へ行って安心させてくれと言うのです。師範学校は小学校教員養成のための国立校で、卒業者は国家の責任で全員教職に就いたのです。教員資格を取得することと教員として採用される事が全然別になっている現在と著しく異った制度だったのです。師範学校には中学5年卒業後2年で卒業する二部と言うコースと高等小学2年卒業後5年で卒業する一部と言うのと2種類がありました。私は中学3年から一部コースへ入ったので、3年生になった時中学同級生が二部へ進学し1年先輩になって卒業して行きます。その頃になって思い立ったのが再進学、晩学独学の苦学でした。「子供らの帰りに静かこの教室に浪人教師が受験書を読む」東京高師理科3部、生物学

に進学です。生物学は科学の一分野です。東京での学生生活が始まったのです。私は科学と宗教は矛盾すると思っていました。所が科学と矛盾しない宗教があることを発見したのです。東大の生物を出て生物学教授であり禅の師家でもある立田英山老師にめぐり会えたのです。東京在学中最大の収穫はそれでした。禅的生物学です。人間は生物である。例外なく死ぬ。死ぬ時の用意これが肝要。そして死の瞬間に至るまで如何に生きべきやこれが更に重要。地球上で最も重要な生物、それは後にも先にもひとつ、かけがえのない存在である、この自分である。この自分の持って生まれた能力を最大に生かして生きる生き方の研究。これが私の言い続けてきた物を生かす生物学です。医者になれなくて生物の教師になった私は、この体が死して後なお生かされる道を知りました。篤志献体です。医学生には人体の解剖実習が必修なのです。私の死体は火葬場へ行く前に神大医学部へ入院し、医学生の勉強のお役にたった後火葬場へ行くのです。神大医学部の献体の会は兵庫県花の名をとってのじぎく会と言います。私の登録番号は554号で、賛同してくれた家内は555号です。私は今その会の会長になっています。現存会員数は2815名です。

私は教員中は実学を主張しました。実物に触れる学習を大事にしました。その癖が残っていて、自宅門前に説明つけての植物

展示が今も続いています。東高勤務の次は県教委でした。小学3年の理科学習に「コオロギを飼いましょう」、というのがありました。同じ飼育するなら後の楽しみが多い方がと助言したのが始まりで、毎年7月に鈴虫の幼生を提供しての鈴虫学校が今も続いています。さて、理科関係以外での、物を生かす生物がひとつあります。私宅は加古中第1回卒の酒見真暁先輩ご住職の龍泉寺の門前にあるのです。終戦後一早く釣り下げられた鐘が一向に鳴らないのです。「方丈さんあの鐘死んでますがな、私に生かさせて貰えませんか」門前の小僧の暴言にお許が出てつかせて頂くようになって47年、朝は年中6時に6つ、夕方は夏場は6時に18、冬場は5時、集まって来た子供の頭をなでて良い子になります良い子になりますと言ひ、今日の感謝と幸福の鐘が鳴る鐘が鳴ると斉唱し、ありがとうと言ひ合うのです。



博物授業



中学11回生
東京船舶株式会社
相談役
三 浦 節

清流会東京支部

平成5年10月20日清流会の東京支部総会が竹橋会館で開催された。出席者は76名。

私は稲井支部長、岸本支部長のあとを継いで昨平成4年から東京支部長をつとめさせて貰っている。

来年が東高校創立70周年に当るので『記念誌を発刊すべく作業にかかっているので、玉稿を賜り度い』と編集委員の山田拓史先生から御要請が来ているので東京支部の今迄の歩みなどを皆さんからうかがってこの記念誌に報告してみたい、とこの総会で挨拶をした。

案の定委員の皆さんを余計に忙しくしてしまう事になったが東京支部事務局の明野昭夫さん（高12）が梅谷（中15）末広（中17）野坂（高3）小林（高5）槽谷（高11）の皆さんに話を聞いて纏めて貰った処によると、

(1) 第1回は昭39年（1964）に虎の門共済会館で開催して44名が出席した。

発起人は中川（中2）塩田（中15）槽谷（高11）であった。槽谷正彦さんがこの時の事務局をつとめた。その後数回休んだ年もあるが大よそ年1回毎年七夕さまの様に顔を合せてきた。場所は虎の門会館、虎の門共済会館、旧海軍水交社、目黒のあかねクラブなどを経て昭60年（1985）からはずっと竹橋会館で開催されてきた。

(2) 関東地区の清流会々員は（東京、千葉、神奈川、埼玉の4都県を合計して）約1400名と見られる。支部総会に関する案内は手元の名簿を基にして500/550名に発送している。過去の出席者の数は昭39年/昭49年（1964/1974）は平均41名。昭50年/昭59年（1975/1984）は平均49名、昭60年/平成5年（1985/1993）は平均71名とふえてき

ている。先日の10月20日の総会でも末広幹事からは是非皆さん誘い合せて賑々しく集ってほしいと熱心に呼びかけが行われた。

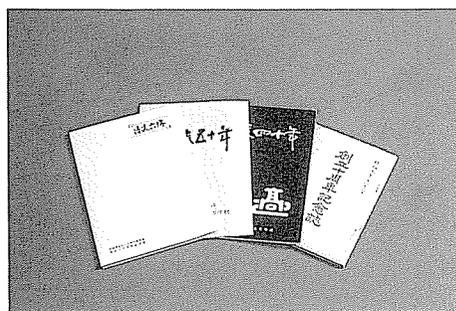
(3) 東京に於ける事務局は昭61年迄は佐藤産業にお世話をいただいたが昭62年からハリマ化成に引受けて貰っている。明野さんはハリマ化成東京支店の社員である。総会開催に当ってはその3ヶ月位前から幹事の梅谷(中15)末広(中17)海堀(2)野坂(3)林(4)小林(5)藤田(5)明野(12)清野(22)塩治(25)大西(34)の皆さんが数回集って細かく精力的に打合せの上で諸手配が行われている。

ところで初代支部長稲井好広氏は中学校第1回の卒業生でながい間三菱金属(現三菱マテリアル)の社長をつとめられた。私もその訾咳に接した事があるが、清流会には欠かさず出席された様子がハリマ産業新聞の記録でよく判る。東高創立60周年には母校に出かけて後輩激励の講演をされた。

こゝに昭56年(1981)の支部総会で話された挨拶の記録がある。『私は年中多忙で追い廻されているが1年間でこの総会を一番楽しみにしている。何と云っても多感な青春時代を5年間同じ学び舎で共に勉強し生活した思い出は一生忘れられない。1年に一度こうして一堂に会して過去を回想し将来を語る、そして若い後輩が遅しく成長する姿をみる事が出来る事は先輩としてこれほど嬉しいことはない。東京支部も660名

を数えている。総会には必ず出席するという積極的な意欲があればこの会は益々盛会になるだろう。こんごも発展することを祈ります』と。

稲井さんは平成2年(1990)4月7日になくなった。78歳であった。



記念誌 4冊



中学15回生
追手門学院大学教授・
関西学院大学名誉教授
田 中 國 夫

私にとっての「加古中」 —愛する勇気と苦しむ勇気を—

私は昭和18年3月卒業の中学15期生。私の中の母校にまつわる意識は常に第15回の卒業生という意識だけであった。今、創立70周年記念誌の原稿依頼をうけ、70という数字がふと自分の年齢が数えて68才という事実とつながった。そして全く迂闊なことだがここで始めて母校は私の生れた大正15年の2年前に誕生し、私の人生と同じ激動の昭和史の中に生きてきたのだということに気付いた。

私は書棚から『創立65周年記念、1990、清流会員名簿「清流」』をとり出した。私の目は昭和14年3月卒業の第11回卒業生、つまり、私の4年先輩の頁でとまった。物故者の異常な多さの故である。熾烈な太平洋戦争との関係なしには考えられない数字である。

私は目を母校小史の大正15年（私の生れ

た年）に移した。大生15年2月2日。姫路第39連隊長長瀬中佐による本校最初の教練査閲があるとあった。昭和2年10月26日。第1回修学旅行出発。9時加古川駅発翌27日呉着。海兵団海軍工廠を見学、江田島の海軍兵学校見学。ここで改めて私の加古川中学校、5年間で鮮烈に蘇ってきた。

昭和13年入学、昭和18年3月卒業という私の加古川中学5年間の生活は昭和16年12月真珠湾攻撃に始まる太平洋戦争をはさんだ軍国主義日本のクライマックスの真只中であつた。理数系の弱かつた私は理数系の強く頑健な体軀をもとに次々と全国民憧れの海軍兵学校、陸軍士官学校に合格し入校して行く先輩、級友を大いなる羨望と苦しい劣等感とともに送り出したことを今も鮮烈に思い出すことができる。軍事教練と出征将兵遺族への稲刈奉仕作業、粗末な制服、

空腹の毎日とつらい生活の連続ではあったが、今はそれをさわやかに思い出すことができるのが不思議である。

この不思議な気持を、中学卒業後、私の専攻することとなった社会心理学の視点から整理すると次のようなことになるのかとひそかに思っている。

本来、戦いというものは国家が、この戦いは正義の戦いであると理念を与えるものであり、神は（わが国の場合、天皇であった）兵士よ、それが汝の生き方でありその仕事であると祝福を送るものである。日本も勿論、その例外ではなかった。私自身もその中学時代をおおいつくした戦争を聖戦と信じ、天皇の祝福を感謝、死を恐れずにひたすら国家に役立つと考えていた。その意味では精神は大変に「健康」であった。あの時ほど迷いのない一途な献身を実感し、輝くような一時期を体験したことはなかったと今でも思っている。「軍靴にふみにじられた青春」という人もある。客観的にはそうかもしれないが、私の主観の中にはそうした被害者意識はなかったし、今もないと正直に告白することができる。また私の心の中に戦争に荷担する悪事を働いているという意識は全くなかったし、ましてや自分が「生命」より大事な「自由」を破るファシストであるという認識などの一かけらも持ちあわせていなかった。とって他方、また「板垣、死すとも自由は死せず」と、

理念のために死を賭けた人間が日本にもいたといった歴史教育をうけなかったせいにするつもりもさらさらしない。私達がよびなれた校名「加古中」を使えば私は、加古中時代を思い出しながら自分の心を正直に、昭和20年、敗戦のその寸前までの自分の心を正直に吐露しているだけで、戦前の教育をうらんだり、戦争を賛美しているものではないことを軽率な誤解を避けるために一言つけ加えさせて頂こうと思う。

今、加古中時代を思い出しつつ思うことは、国家に対するにしろ、恋人に対するにしろ、それを愛する勇気を持つ時は、同時に苦しむ勇気を持たねばならぬということを知ったことである。私にとっての加古中も例外でなく、それはこよなく好きな愛の対象であったが苦しい恋人でもあったのである。



軍関係の学校へ進んだ者（中11回）



中学21回生
株式会社宮永商店
代表取締役社長
宮 永 弘 兄

太平洋戦争時に 生きる中学時代

憧れの県立加古川中学校へ入学したのが、昭和18年4月。時あたかも太平洋戦争勃発2年目の年であった。

校門をくぐると桜が咲き誇り、我々の入学を祝福するがごとく迎えてくれたのが、ついこの間の様に思われる。

入学生は、総勢200名。1クラス50名で、すべて男子生徒ばかり4クラスであった。5年間の課程を終了したクラスメイトは県立加古川中学校第21回生となり、また6年間の課程を終了した者は、加古川東高等学校の第1回卒業生となった。

卒業後、同期生で「清流Z A会」を結成し、年に3回ゴルフ大会を開催して交遊を温めている。「Z A」の由来は、「Z」は勿論アルファベットの最後の文字であり、「A」はアルファベットの最初の文字からである。毎回たくさんの出席者があるのは

思い出深い証拠でもあろう。

戦後まもなく、日本の教育制度が旧制度の六五三三制より、男女共学、教育の機会均等、民主主義を掲げ六三三四制へと大きく改変し、当時の県立加古川女学校が県立加古川西高等学校に、また県立加古川中学校が県立加古川東高等学校に校名がそれぞれ改称された。昭和19年4月の入学組と昭和20年4月入学組は、「くじ引き」で東西に分かれた。今でも「自分は東校に入ったのに、くじ引きで西校に回された」と言う後輩も時々うかがえる。

ところで、我々の中学生時代は、太平洋戦争の真只中であり、2年生の1学期から食糧増産に農家へ勤労奉仕に精励したものだ。

食糧も充分でなく、毎日パン1個とミルク1本が主食で、これならまだよい方でひ

どい食事の日も何日かあった。

戦争は日増しに激しくなり、昭和20年4月から学徒勤労働員として川西製作所〔現在の富士通(株)〕へ満員の汽車に乗り国鉄宝殿駅と大久保駅を毎日往復していたものだ。工場では、飛行機の部品を製作していた。

その内、アメリカ艦載機が工場へも度々爆撃に来るようになり、工場を分散するため我が中学校の校舎へ多数の機械が移動され、各教室に旋盤、ボール盤等を据え付け、学校工場としての日々が続いた。

学校では軍事教練があり、軍隊より配属された軍人による厳しい訓練が毎日続けられ、学生はおろか非戦闘員の内でも少年隊の一員のような日課でもあった。当時は16歳で海軍予科練隊として本人希望で入隊した同級生が3名あり、その内2名が戦死して帰らぬ人となった。彼らのご冥福を心よりお祈りする次第である。

そんな時代でも、本分の勉強と中間、期末のテストは続けられた。カンニングもよくやって先生からきつく叱られた。柔道と剣道は必修科目で全生徒が入部し、冬の寒稽古では朝早く寒風のなか上級生に投げつけられたり竹刀で叩かれたりした。また、当時の加古中は相撲が強かった。多可郡中町の金比羅神社の奉納相撲は有名だった。貨物列車にゆられ試合に行き、他校の選手を次々倒して優勝したのも楽しい思い出の

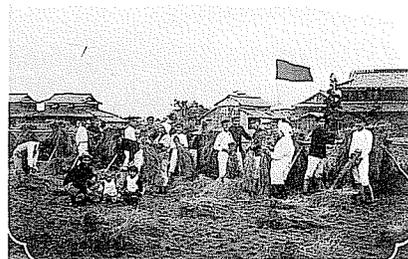
一つでもある。今その時を思いおこせば、悲喜こもごも走馬燈のように脳裏をかすめ中学時代が非常に懐かしく思われる。早いもので卒業して46年になろうとしている。

久しぶりに母校へ行く機会があった。校舎をはじめ体育館等々の施設が一変して昔の面影が何もなく一抹の淋しさを感じると共に歴史の流れと現在の立派な諸施設にあらためて感動した次第である。

在校生諸君には、このような好環境のもと立派に学び、楽しく遊び、悔いのない青春時代を力一杯送られんことを祈念申し上げます。

本年は、創立70周年を迎え心よりお祝い申し上げます。

また、このような歴史と伝統ある県立加古川東高等学校の堅持に日夜ご努力賜りました諸先生方、先輩各位のたゆまぬご努力とご支援を心より感謝申し上げ、今後ますますのご健勝をお祈り申し上げます次第であります。



勤労奉仕



高校2回生
霊長類学者
水原 洋城

軍人ニ賜ハリタル勅諭

1944年四月、加古川中学校に入学したわれわれは、毎日昼食の前に、学校教練教科書の冒頭にある“軍人勅諭”の唱和学習を、クラス担任の先生の指導でやらされていた。この軍人訓戒の“勅諭”は1882年天皇（明治）の名で発せられたもので、山縣有朋の発案、西周起草、福地桜痴の作文によるといわれる。当時の私は、むろん執筆者が誰であるかは知らず、ただ文章そのものに興味をひかれた。“勅諭”なるものをはじめて読み、唱えてみて、その文のわかり易さ、口調のよさに驚いていたのである。むろん書けといわれてもとても書けないような繁雑な漢字や奇形的漢語は多かったが、文意は頭に入り易いのである。それに、これはまことに懼れ多い極みではあるが、方々に、ふしぎなところや滑稽なところもあって興味をそそられた。ふしぎなというのは、天

皇が、自分はえらいのだから皆は身を犠牲にして忠節をつくせ、とか、軍人がぜいたくになってそのために悪いことに手を染めるのが心配だから、くれぐれも気をつけろ、とかいうふうに、言わでものこを、馬鹿念を押している点である。また滑稽なというのは、五箇条に分けて説いた訓戒の中身は、当然のことばかりであって、守ったり実行したりするのは、ちっとも難しくないから、どうかよく心得てくれ、というふうに、神さまの方から人間にものを頼んでいるように聞えるところであった。こんなことは、先生に質したり友人に話したりできない物騒な話柄だから黙っていたが、私はこういう“勅諭”に一種の人間臭さを感じて興味を持ったのである。あのようなものに人間臭さを感じるとは、と翠聲を買うかも知れないが、そう感じたことには理由が

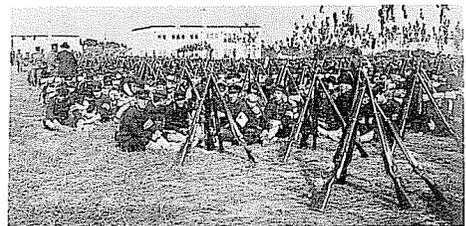
あったようだ。それは“戦陣訓”との比較の問題である。

戦陣訓は、当時の陸相東條英機が1941年陸軍將兵に示達した、戦地における軍人の行動規範訓戒である。われわれは、これを学校で教わることはなかったが、こども用の解説書の類を通読する機会があった。こども心にも、こっちの方には、一種の抵抗感というか、非人間的強制に対する不快感が先に立った。筋道の立った反駁を行うだけの学力はなく、この思いあがった権力者の魂胆まで見透すことはできなかったが、その文章のどこを読んでも砂を噛むように空疎で真実味のないことはよくわかった。

“勅諭”には乏しいながらも残存した、対象を説得しようという調子の“人間臭さ”すら微塵もなかったのである。おとなになって、あとから知ったことに照らして考えてみると、実はこれは当り前のことであった。“勅諭”後、半世紀以上を経て、すでに天皇“現人神”イメージは定着し、管理体制も完備した軍にあっては、もはや將兵を“人間臭く”説得する必要もなく、將兵の方でも、“勅諭”4年前の竹橋事件のように近衛兵が反乱を起こすなどという“人間臭い”反発力を喪失していたから、その種の不祥事発生の懸念もなくなっていたのである。管理主義は、管理を自己目的化する上に、自己崩壊に到るまで歯止めなしに暴走するから、山縣有朋から東條英機までの“勅

諭発戦陣訓行き”の道は、本来熔接レール的一本道である。東條ヴァージョンが人間臭さを欠くといっても、山縣版がその分だけヒューメインであったことにはならないのである。こどもの私が“勅諭”の文章に興味を覚えたのも、それは、当時の、天皇が尊い由縁も知らぬ庶民を忠義な軍人に仕立てる必要に迫られた山縣のゴーストライター、福地桜痴の筆先の操觚者ぶりの軽妙さに対してであって、山縣のストラテジーに対してではない。またふしぎに感じた部分も、これまた“勅諭”10年前の軍人の汚職を含む陸軍の不祥事、山城屋事件の元兇が山縣本人であったことを知れば、ふしぎでもなんでもなくなる。

さて、今の日本の企業や役所や学校には、勅諭や戦陣訓の商業主義版が徘徊してはいないだろうか、などと改まるのは野暮な蛇足というものであろう。丁度紙数も盡きた。



演習小休止



高校5回生
田代倭子

清楚可憐なセーラー服よ、 永遠なれ

KH左ポケットのマーク。卒業して早や40年余、ふと街角で見かける東高女子生徒の制服姿、楽しかった日々がまるで昨日のように思い出されます。

終戦直後の学制改革、男女共学、学区制実施などの急激な変化の中で迎えた入学式、元男子中学校であった武骨さとかめしさの残る校舎、ひいき目に見ても掃除のいきとどいたきれいだな—といえない廊下、教室等、それを毎日毎日雑布で床を拭く、綺麗にならない。私のクラスは女子ばかりでしたので、毎日磨いていると黒い床でも光って来て他の男子クラスとは違いが出て来ました。中学当時のセーラー服そのまま入学し、先生方は中学生時代に無い清らかさとやさしきで新入生を迎えてくださった。それまで抱いていた元男子校への不安を取り去り安らぎをおぼえました。同じセーラ

ー服でも東校の校門をくぐった途端異ったものとなり自信と誇りに満ちた自分自身に変わり、3年間潤いと活力に満ちた生活を送ることが出来ました。

当時セーラー服の制服は西校も同じでした。物資の貧困な時代で、中学校3年間着用してもまだ充分着用しに耐え得ると見て制服として採用されたのでは……。その為東校と西校の区別がつきにくい欠点がありました。その後第8代校長清水敬治先生によって、男女共学であっても男子らしい男子、女子らしい女子に成長するようにと、素朴で親しみのある美しいK・Hの胸章を採用され、冬は濃紺にえんじ色のマークが映えて可愛いく、夏は純白のセーラーに紺のネクタイでとてもすがすがしく、県下数多い高校でも40数年親子で愛用されている制服はそれほど多くはないと思います。よ

く学びよく遊び全力を尽しながらやさしさを忘れることなく受継がれています。毎年作成される卒業アルバム、3年間の思い出をカメラに納めアルバムを完成されている一コマ一コマは変わっても着用している制服は変わらず、中味と共に光る美しさと新鮮さを現わしています。

日常生活でごく当り前の事をごく普通の事のようにやり抜くことの難しい現在の社会において、ゆるぎない自信を示しているのが東校の制服、何かと新しいことに目を奪われがちな世相の中で、地中深くしっかり根を張り新入生を迎え入れしっかり育てあげています。入学当時の校舎もすっかり無くなり校庭の端にあったポプラの木は一本もありません。時の流れですべてが変わって行く中で変ることなく愛されているK・Hの制服にあこがれ、希望をもって入学された新入生に末永く受け継がれて行くことを願います。制服への思いを書きながら私自身在校生陸上競技部に入部し練習を重ね、先輩方の指導によって楽しさ苦しさそして耐えることを身をもって学び成長することが出来感謝しています。

これからの人生、いろいろな事があると思いますが、母校で学び身につけた貴重な財産を生かし胸を張り夢を持ち前進されることを切望いたします。



長田薫（高48回）



高校7回生
横須賀水先区
水先人会パイロット
古門 昭生

東京湾のパイロット

卒業したのは昭和30年3月、「清流新聞」の編集に携わっていた私は、講堂の左横の小部屋で原稿を書いたり、校正をしたり、特に発行間近かになると、放課後、新野辺の印刷所に出向いたものである。当時、高校生は長髪禁止であった。もう40年もなるので定かにおぼえていないが、校内の長髪事件に関し、新聞部でこの問題を取上げ「長髪事件覚書」と題する小説を連載することとなった。連載も数回に及び、小説が佳境にはいろうとする頃、学校側から連載中止の要請があり、これを機に新聞の編集を先輩にゆずったのであるが、こんな時代をなつかしく思い、筆を執った次第である。卒業後、神戸商船大学に進み、大阪商船(現商船三井)に入社、外航船の船長として世界をめぐり、平成元年、水先人の国家試験に合格、現在横須賀水先区水先人会に所属

し、東京湾で水先人(パイロット)をしている。水先人は水先案内人ともいうが、水先人(パイロット)が正式名称である。パイロットになるためには国家試験(運輸省管轄)を受け水先人免許を取得しなければなりません。現在、全国の港に700人余りおります。パイロットというと大抵の人は飛行機の操縦士(パイロット)と思われるでしょう。船のパイロットをご存知の方は少ないと思います。これは笑話でなく、本当の話です。あるパイロットが子息の学校に父親の職業「水先人」と書いて書類を提出した所、担任の先生が「水洗人」と先に「シ」をつけて「スイセンニン」と訂正されたという。このように日本は四方を海に囲まれた海運国でありながら、日本人くらい海に関する知識が乏しく、マナーの悪いのは世界に例をみないのではないかと思います。

もともとパイロット（PILOT）という言葉はギリシャ語の「オール」という意味からきており、船を港に嚮導する免許を有する者となっております。

消費生活が豊かになるとともに、ヨットやプレジャーボートがどんどん増えて来ると思いますが、もっと海に対する知識やマナーを身につけないと陸上の交通事故と同様、海上の交通事故即ち海難事故が多く発生することでしょう。

では具体的にパイロットの仕事を紹介します。私の場合東京湾のパイロットですから東京湾に入航してくる船に、基地（久里浜）から小さいボートで向い、その船に乗り込んで船長に代り、東京湾入口から、横須賀、横浜、川崎、東京、千葉の各港へ安全に運航すること、又各港から東京湾出口まで嚮導して、その船の安航を祈りながら小さいボートに下船する。これが私の仕事です。東京湾に入って来る船は長さ300mを超える総屯数15万屯以上の巨大タンカーから、内航小型船まで、その数一日に1000隻に及びます。朝夕のラッシュ時にはせまい航路内に船がひしめいており、その上、漁船、ヨット、プレジャーボートが加わり、衝突、接触事故が起らないのが不思議なくらい輻輳しています。

最近はLNG船（天然ガス積載船）も多くなり、船も巨大化しているため、ひとたび事故が起き、油でも流出するようなことに

なれば、文字通り東京湾は火の海となるでしょう。このようにパイロットは船の安全運航になくてはならない存在なのです。

パイロット要請船への乗下船には縄バシコを利用するのですが、静かな時でも慣れないと昇り降り是非常にむづかしいのですが、海が荒れているときなど命がけの仕事です。しかし、仕事を終え、その船の船長から感謝され、その船の安航を祈りつつ下船するときの充足感は何とも云えず、パイロット業務に生きがいを感じている毎日であります。



タンカーに乗りこむ



高校9回生
大川京子

9 回生東京同窓会

—我等9回生—

昭和32年に卒業した私達は早くも55才になりました。20代～30代は忙しさにまかせてお互いにご無沙汰をしていました。

不惑を前にした昭和53年9月9日、重陽の節句に、東京・青山で最初の9回生東京同窓会が開催されました。

20年ぶりに再会した皆様は当然の事乍ら18才の青年では無くて、すっかり立派な社会人に変身していました。

確か私達の時から成績アップの為の実験ケースとかで男子組(4クラス)、女子組(3クラス)に別れていて男女混合のコミュニケーションは殆ど無かったと思います。

戸惑っているのも束の間、お国訛りが飛び出すとスーツの奥から見憶えのある幼顔が蘇って来ました。

故郷の香りのする安心感に満ちた不思議な空間からは、自然に昨日別れた友人の様

な利害関係とは無縁の明るい会話が弾みまです。東京の真中で、心は高校生にタイムスリップした20数名の中年が、試験の点数やグレード別、男女別クラスを嘆いたりして盛り上っているなんてさすがに東高生だなあと今更乍ら感嘆すると同時に身が引き締まる思いがして、やっぱり宿題は真面目にやっておくべきだったと変な所で反省したりしました。絶え間のない笑い声、意義ある時は瞬く間に過ぎて、帰って来た青春の余韻を残し、散会となりました。

2回目迄に10年間のブランクがありましたが、ふり返る年数の方が多くなった今、多数の希望により毎年行われる様になりました。

今年も10月15日、7回目の東京同窓会がありました。

毎回会場の確保とお世話を引受けて下さ

っている杉本直和さんと会員各位の熱意、そして地元9回生各位の友情と十倉茂明さんの心遣いの結晶とも言えるこの会は、年々円熟味を増して来ます。70周年記念講演会の講師を後輩の為ならばと快諾して下さいました魚住武司さん、世界各地を舞台に活躍中のビジネスマン、アークヒルズに大音楽ホールを建てた方、単身赴任の方、正しい加古川弁を守り続けている方、元相撲部で偉丈夫の方、プロ級のビデオを撮って下さる方、最後の大和撫子の女性陣、9回生の特色を備えた個性豊かな会員が名を連ねています。

今回は時間が取れずやむをえず欠席となった方が数名出た事やご主人の定年退職で帰郷された方、早逝された方が出て、しみりとした場面がありました。そんな中で、関西から参加して下さいました田中敏夫さんは、昭和34年地元での同窓会の返信葉書や資料を持参して、出席者を驚かせました。若き日の自己の筆跡に出合った人、東京に在学中で欠席の通知を今は無きお父様が代筆されて、これは形見だとして貰い受けた人もありました。

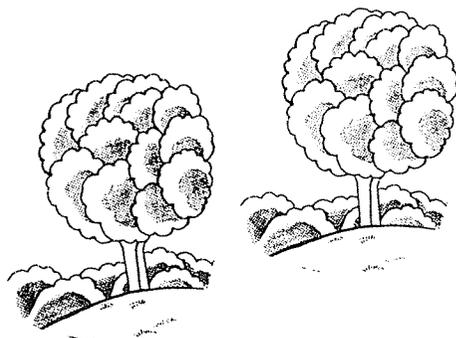
十倉さんから今年も贈物が届きました。加古川市制40周年記念ワインを送って頂いた時は中身の味もさる事乍ら、山本嘉彦先生画のラベルに感動して空瓶を頂いて帰りました。

昨年ペース大学（NY）のESL教室で、

1日学ぶ機会がありました。NY滞在中の娘が通っていたのですが、通常2人で1クラスの処、先生とクラスメート（アルゼンチン、23才）の好意で仲間に入れて頂いたのです。私と息子の飛入り組が緊張するばかりで余り話せないのを見て、どのくらい学校で英語を学んだのかと聞かれ、はたと考え込んでしまいました。この場でも勉強不足が露呈して、恥ずかしい思いをしましたが、トライしたお陰で英語のみならず多くの物を学びました。

私にとって東京同窓会は東高そのもので、今でも教わっています。各分野でご活躍の懐の深い同級生の皆様は常に先に進んでいる先輩です。ご指導を感謝しています。

来年も又掛け替えのない笑顔に会えますように心から祈っています。





高校20回生
浄土真宗本願寺派 妙正寺副住職
鹿多 証道

今あれば古きも楽し

高校を卒業して4半世紀、仲間が集まると何故か昔話の花が咲く。「ショーもないことを覚えとんのォー…！」と、互いにけなしながら、話は盛り上がる。情景、登場人物、台詞…、果ては後日談まで添えられて全員がショーもない同類項。

入学の昭和40年は旧制中学の建物がまだ健在。油引きの床が珍しく、履き替えなしの便利さに感心。雨の日の長靴授業に記憶がないのはなんとも不思議。雨にも負けず、運動靴での通学スタイルは今も変わらず、大人に解らない「伊達の薄着的気質」か。そういえばクラブ所属者には、部室は何とも便利なもの。履き替え、更衣、物置、早ベン、なんでもござれ。開いた傘や雨合羽のある静物画は、木製の古びた舎屋にふさわしい。

正門を入れれば植え込みのロータリー。正面に本館、一階の廊下の壁には「登龍門」と書かれた大型のヒラに続いて、新卒業生の合格者・大学名一枚ずつの貼り出し。国公立に続いて私大。筆頭は東大理I、墨の色がとりわけ黒い。

二階に教務室…、放課後、学級日誌を届けに行ったついでに、出席簿の数学の授業欄に似たような印をつける。なんでも指名済みのチェックだとか。当分の間、前に出て黒板に問題を解くことを課せられなかったのだから、先輩の悪知恵伝授は大したもの。

右は講堂。小さな小さな舞台では、文化祭ともなればとても賄いきれず、専用の組木で10倍くらいのステージを仮設する。演劇と吹奏楽の部員が、何名か動員されての足場職人的な本格作業…、文化祭前の丸一

日は公欠扱いで受講なし。

舞台の両脇に、各々かなり汚い部屋があって、左側は新聞部と雑誌部、右側は吹奏楽部の部室。両室とも扉にそれなりの施錠はある。よく見ると、錠をかける金具から長い紐。その先は穴から中に入って先端にぶら下がっているのがキー。誰でも開けること可能。

しかし、講堂の正面と横側の扉ともなれば、用務室保管の鍵でしか開けられない。たまたま部室に忘れ物をした先輩、放課後遅くに一計を案じて建物裏側へ廻り、窓からの侵入を試みた。窓はそう高くない位置にはあったが、2枚のガラス窓を滑車とロープで上下させる骨董品。ガラス止めの漆喰で手と服を汚しながら身体が半分入った時、前の通りを歩いていたのが私服刑事。マン悪く捕まった方も私服で、当時は近くにあった本署へ連行。運良く生徒手帳を持っていて、事情聴取のみの無罪放免はめでたい限り。生徒手帳の携行義務ここに真価を發揮…！

体育館…、数本の登り縄とバスケットのゴール以外は殺風景。天井には明り窓。剣道の防具の倉庫は夏ともなれば悪臭の巢。寒稽古の足の冷たさは格別。本館寄り南西隅に教官室、「體育研究室」の文字が古めかしく、いかめしい。しかも出入りの先生は柔道着に剣道の稽古着姿もあって、おっかなびっくり。

その南側、少々剥がれた板壁。この薄汚い壁面こそ、合格発表の掲示板。年に一日、その「時」だけ、特別に注目を浴びる。

そこに始まる3年間。

ひとつ紐解けば、たわいなく続く数々の笑い種。

その時期あればこそ、

今懐かしく、

「今」あればこそ、

わが行く手に輝く日の柱…と。

現校舎、着帽無く往来の在校生、長髪の野球部員を見る目にOB25年の思い果てなく、また様々。



鹿多氏は高校野球審判として甲子園で活躍中



高校28回生
モリス株式会社
代表取締役
森 本 幸 吉

ハチャメチャ生徒会

創立70周年おめでとうございます。
高校時代というと、20年も前のことになりますが、私の人生においては、かけがえない素晴らしい時期でした。
私は高校2年生の時、生徒会長に立候補しました。実は、私の親友を立候補させてくたくたくと勧めているうちに、「おまえがでるんだったら俺もでる。」と言われたものですから、急遽立候補いたしました。私は、友人が当選するものと思い込んでいましたが、ふたをあけると、なんと私が選ばれてしまいました。さあ大変です。ちょうど当時は学園紛争の嵐のあと、グレード制が廃止され三無主義という言葉が流行、きわめて平和ではありましたが、生徒会自体は盛り上がり欠け、活動的ではありませんでした。このような時代背景に、全く経験の乏しい私が、リーダーシップをとっていくわけで

すから、正直、プレッシャーを感じながらの船出でした。キャッチフレーズは、「明るい生徒会」。とにかく明るくいこうと決め、女子の執行部は、クラス別アルバムを頼りに出来るだけかわいい子を揃えました。朝礼では一貫して、「皆さん、今週も頑張りましょう」で通しました。

最初の行事は秋の運動会でした。通り一遍の企画ではおもしろくないと思い、ただのリレーに“運命”を流し、「ベートーベンリレー」と名づけてたりもしました。お蔭様で日没後に行ったファイヤーストームは、最高に盛り上がりました。これに味をしめ、翌月には放課後に、フォークダンスをする事にしました。ところが、いざやるとなかなか参加してくれません。マイクで精一杯呼びかけて、やっと始めることができた事を思い出します。

冬には、こんな事もありました。夜11時頃までかかって、ガリバンで生徒会報を書き上げ、当時書記長の上田靖夫君が、輪転機に入れ回したところ、まっ黒の原稿しか出てきません。なんと彼は裏返しに入れたものですから、せっかくの原稿は使えなくなってしまいました。みんな批難ごうごうで、結局やり直して帰ったのは深夜の2時。おまけに帰る道中おまわりさんに呼び止められ、事情を話してなんとか帰してもらいました。

とっておきは文化祭。企画運営一切を副会長の望月美孝君、磯野仁志君にまかせ、私は一人特設ステージで、西城秀樹の物真似を一日中やっていました。これは大変うけて好評でした。

またこんな事もありました。当時、風紀委員長の横田英樹君の問題発言事件です。先生から生徒達の遅刻の問題に対処しなさいとご指導がありました。私たちは、校門で遅刻者に注意を呼びかける事になりました。朝礼で彼は、「僕は別にかまわないと思いますが、先生がうるさいので遅刻の取締りをします。」と思わず本心を言っていました。その時は大爆笑でしたが、後で先生から大目玉を頂きました。

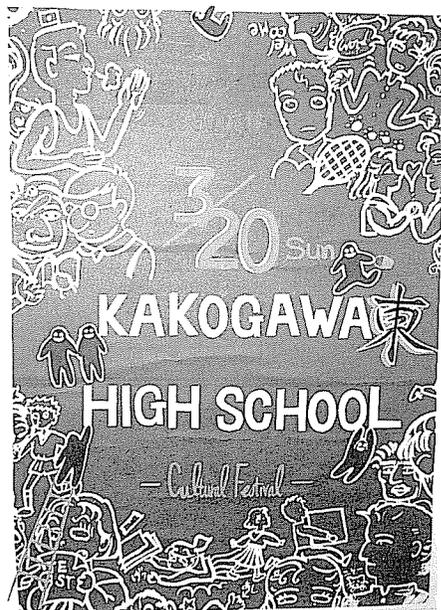
このように思い起していると、いかにハチャメチャな生徒会活動であったかご想像いただけると思います。しかし、やっている本人達は誠に真剣でした。あっという間

の一年間が終わった時は、みんなで涙を流し感動を分かちました。明るくいこうというキャッチフレーズの第一幕は完結できたと今も信じております。

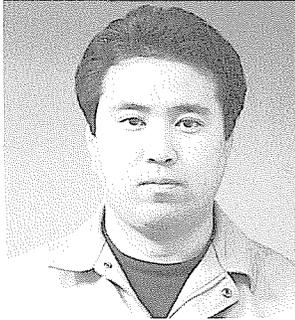
今、社会へ出て14年がたとうとしております。まがりなりにも、企業経営に携わる者として心掛けねばならない大切な事——人との出会い、未知への挑戦、揺るぎない精神力等々——を高校時代に体験出来たように思います。これらを胸に私は「今週も頑張ります！」

最後に生徒会活動を通じて大変お世話になりました先生、先輩、友人の皆さん、どうもありがとうございました。

母校の益々のご発展をお祈り申し上げます。



文化祭ポスター
竹中素子（高47回）



高校33回生
株式会社協和電気商会
取締役副社長
脇谷政孝

偏屈生徒の感謝のこぼ

創立70周年…“激動の昭和”をたくましく生き抜いてきた母校が無事に“古稀”を迎えられることを喜んでおります。私が加古川東高校で学ばせて頂いたのは、昭和53年4月からの3年間です。私の今までの人生（わずか30年ですが）の中で最もかたくなに、そして偏屈に生きた時期であります。

私は中学時代より柔道に没頭していました。幸い指導者や仲間に恵まれ、みんなでめざしていた県大会団体戦優勝、全国大会出場を果たすことができ、柔道のおかげで充実した毎日を送っていたので、高校においても柔道部で頑張っていきたいと思っていました。運良く東高に合格し、「さあ、これから柔道頑張ろ！」と思っていた私の前に難敵が立ちはだかりました。それは、あの「4STEP」などの問題集や課題でした。今思えば何のことはないごく当り前の

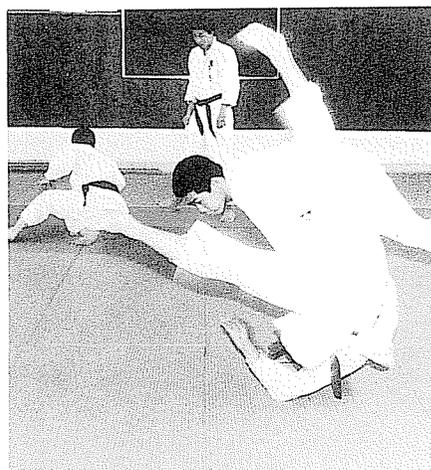
課題であったのですが、柔道最優先で考えていた当時の私にとってはその課題に取り組まなければならない時間がとても惜しく感じられたのです。充実した環境の中で豊富な練習量をこなしている中学時代のライバルのことが気に掛かりました。帰宅してからも夕食後トレーニングを行っていました。励むというよりは、やらなければ気が済まないという気持ちの方が強かったように思います。負けず嫌いの性分が、自分自身の考え方や行動までもどンドン窮屈に追い込んでいき、知らず知らずのうちに「中学時代の方が良かった。」とか「学校へは柔道をするために来とるんや。」などと考えるようになってしまっていました。高校生として本来なすべきことを真正面から受け止めず、自分にとって都合の良い面だけを増幅させて満足しようとしていたのです。学

業の方は本当におろそかになっており、担任の先生方をはじめ多くの先生方に御迷惑をおかけしていました。柔道の練習だけは一生懸命やっていましたが、「妥協することは負けること。稽古中は自分に厳しくなければ…」と思い、自分を追い立てるあまり、他人に対してもその厳しさを要求してしまうようになっていました。後に続く後輩たちには過疎化現象が起り、少人数での練習で私自身余計に苛立ってくるというまったくの悪循環の状態でした。そんな私に対して、柔道部の顧問であられた常深先生は辛抱強く指導して下さい、また同級生や生き残った後輩たちも一生懸命付き合ってくれ、汗を流してくれたおかげで、柔道の方ではそれなりの成績を残すことができました。しかし、高校生活の中で私は結局一度も自分自身を客観的に見つめるということができずじまいでした。

「もっと柔道がやりたい。」という気持ちで天理大学体育学部に進学しました。常に日本一をめざす集団の中で強い先輩に木の葉のように投げられ“井の中の蛙”であったことを痛感しました。激しい練習、厳しい寮生活が自分に充実感をもたらしてくれました。約70名の部員の中で、いろいろな人間を見ることができました。一番尊敬していた先輩は自分に厳しく他人に優しいタイプの方でした。努力を重ね、オリンピックで金メダルを獲得されました。また、自

分に厳しく他人にも厳しい先輩もおられました。私はその先輩に出会い、初めて高校時代の自分の姿に気付いたのです。練習中に大ケガをし、後悔と絶望感で入院生活を送っていたとき、多くの仲間の暖かさに触れて初めて“恩”というものを実感しました。「人は一人では生きられない。いつも誰かと生きている。」ということに気付くと、今までのかたくなな生き方が無性に恥かしく思えてきました。そしてそんな生き方を理解しよう、支えようと努力してくれた仲間のありがたさを改めて、身にしみて感じる事ができたのです。

彼らと出会えば、行き着くところはいつも同じ昔話。時のたつのも忘れ、大笑いできる時間がたまらなく楽しい。そんな“心の拠り所”をくれた東高に、心を込めて「ありがとう。」



柔道部



高校39回生
尼崎市立城内中学校教諭
阿野 康子

君達はダイヤモンドの原石

「君達はダイヤモンドの原石です。君達はこれから磨いていくことによって、すばらしく輝くことができるのです。」この言葉は、私が在学中に、竹一校長先生が私達に言うてくださった言葉で、現在教職に携わっている私にとって、また私が生きていく上での礎となっています。

今、こうして創立70周年記念の原稿の御依頼を受け、改めて私の東高での三年間を振り返ってみると、色々な事がつい昨日の事のように思い出されます。胸にK・Hと刺繍されたセーラー服を着て、夏の暑い日も、冬の寒い日も自転車を通ったことや、クラスの仲間と協力して作り上げた文化祭・体育祭、そして色々な事について討議しあったH・R。あげればきりがありません。皆さんの思い出が私の心の中に残っています。そして、これらの思い出を思いおこ

すたび、心がなごみ、温くなる自分を感じます。それはなぜでしょうか。それは、当時私の回りにいた友達や、先生方が、「私を一人の人間として認めてくれている。」という安心感を持って毎日の学校生活を送ることができたからだと思います。そして、あの校長先生の言葉……。自分の可能性を信じ、一人の人間として認めてくれる人がいるということは人間にとって、どれだけ大きな力を生み出すことができることでしょうか。このような素敵な人達に囲まれた学校生活であったからこそ、自分の力を発揮し伸ばそうと努力できたのではないかと思います。

私は現在、尼崎市で中学校の音楽教諭として勤務する傍ら、声楽の勉強にも取り組んでいます。加古川シティオペラと加古川音楽家協会とに所属し、加古川の文化発展

のため微力ながら尽力できればと思っております。また、平成5年8月に在学中に所属していた合唱部のOG合唱団「東雲」が結成されました。代表として母校に何か恩返しできればと活動内容を模索しています。

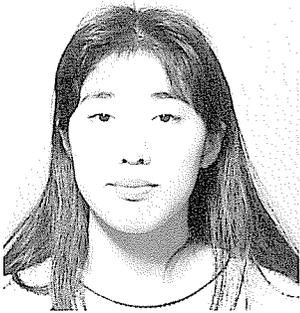
私にはまだまだ可能性が残されていると思います。そして、これからも益々、色々なことに自分の可能性を信じていきたいと思えます。東高で得られた言葉を胸にして。



岩井良子（高48回）



橋田明子（高48回）



高校45回生
京都大学医学部2回生
前田晴子

私の大学生活1年目

私が東高を卒業し、大学に入学してから、はや1年余りが過ぎました。時の流れの速さを身にしみて感じています。

私が大学生活を始めて最初に感じたのは、大学で何かに束縛されることはほとんどないということです。例えば、入学当初は講義に欠席することなど考えもしませんでした。しかし、講義を聴いているよりも図書館で本を読んでいる方が面白いこともあります。また、あらかじめ講義の予定表を配布し「興味あるテーマの日に出席して下さい。」とおっしゃる教授もいます。初めは驚きましたが、これが本当の勉強なのだと思います。講義に出席しなければいけないという束縛はなく、自分の勉強したいことを勉強できることに、大きな喜びを感じました。(もちろん、毎回欠かさず出席する講義もたくさんあります。)

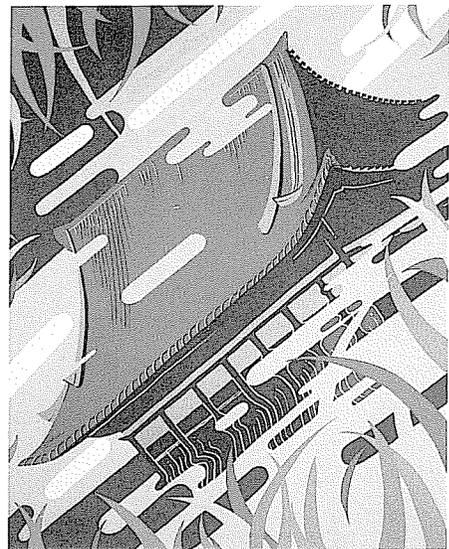
こうなると、時間がたくさん生まれます。しかし、暇で仕方がないなど言うてはられません。まず、京都には多くの名所があります。休講通知が貼り出されると、それとばかりに友人と自転車を飛ばして観光に行きます。また、以前からやってみたかったパラグライダーにも挑戦しました。そのためには、バイトで資金を稼がねばなりません。それに、いくら講義の出席は自由と言っても、試験に通らなければ単位をもらえないので、試験勉強も当然やらねばなりません。高校時の選択科目によって、友達同士、お互いに先生になって教え合います。静かにしていればどれだけ粘っても文句を言われないような喫茶店をみつけて、朝10時から夜12時まで勉強しました。

今、私が特に力を入れているのがサークル活動です。そのうちの1つ、医療研究会

では、様々な医学的知識を学んだり、病院・保健所や作業所へ行って現場で働く人々や患者さんから勉強させてもらったりしています。このサークルでは、常に、私はどんな医師になりたいのか、なるべきなのかを考えさせられ、私の気持ちの様々な矛盾点や、今まで見えていなかったものに気付かされます。夏休みには、奈良の精神科の病院でフィールドワークをさせていただきました。この経験を通して、私は、精神障害者は身体障害者よりもさらに冷遇されているなあと感じました。障害者も健常者も同じ一つの社会で生きていくのが本当の姿だと思うのですが、健常者の理解が不十分だと不可能です。私自身、東高のLHRで学んでいたものの、精神障害者や知的障害者とコミュニケーションをとることはできるのだろうかと考えることがありました。しかし、実際に精神障害者の人達と話すと、そんな考えはことごとく崩れていきました。入院患者さんの中には、同年代の人もたくさんいて、大学受験の話や入院前の生活の話聞かせてくれました。とても純粋で他人の表情や感情の変化に敏感な反応を示す人達でした。私は自分勝手なイメージを作っていたことを反省しました。しかし、それは私だけではないようで、患者さんが退院して一人暮らしを始めると、文句を言ってくる近所の人達がいるそうです。少しでもそんな無知な部分を自分なりになくして

いけるよう、勉強していきたいと思います。

とりとめのないことをいろいろ書きましたが、とりあえず毎日楽しく過ごさせていただいています。下宿生活も、病気になった時以外は快適です。学園祭も近付き、最近友人と鍋を囲みながら模擬店の企画をねっています。東高で出逢った友達と同じくらいに大切な友達にしていけたらと思います。私にとって東高は、新しいものの見方・考え方と、医師を志すきっかけをくれた、そして素晴らしい友達と出逢えた、大切な空間であり、大切な時間です。大学が私にとってどういうものになるのか、それが分かる6年後をわくわくしつつ待ちながら、毎日を頑張っていこうと思います。45回生のみさんと一緒に。



村田依子（高48回）

加古川東高校のあゆみ

加古川中学校・加古川東高等学校沿革

●開校までの経緯

本校の設置は、加古印南両郡の多年の要望であり、明治38年通常県会で「加古印南ノ地ニ中学校増設ニ関スル意見書」が議決され、時の県知事服部一三氏に提出された。

翌39年にも重ねて同趣旨の意見書が議決された。当時、中学校は県立で神戸、姫路、豊岡、龍野、柏原、州本、伊丹、小野、私立で鳳鳴があった。

更に明治44年の県会で同様の議決があり、服部知事に提出されたが、いずれも県財政の都合で見おくられた。神戸二中が明治41年設置されている。

大正11年本校建設に要する土地8,000坪及び建築費の30万円は各町村負担とし、本校設立の実現を期することとなった。各町村長中10名の委員を作り、このうち加古川町長小山十次、鳩里村長藤田太郎治、米田村長松本増吉、伊保村長中谷与吉郎の4氏を特別委員とし、この4氏の奔走久しい努力の結果、目的は達せられた。

両郡町村負担金の中に伊藤長次郎、多木久米次郎、大西甚一平の諸氏が巨額の寄附をされ、これらと土地8,000坪の目録を添えて「寄附採納額」を大正11年12月18日付折原巳一郎県知事に提出した。県会をはじめて大正12年より3年間の継続事業として設立、建築起工を決定した。費用は337,213円であった。(内30万は上記地元負担であったと思われる)

ところが不時の火災で一部を焼失した為に、復旧の必要が生じ継続事業の期間を1年延長し支出金額は、483,873円と更正したのが大正13年であった。

当時、大正9年鳳鳴が県立に移管されたのをはじめとして、神戸三中、市立尼崎中、市立明石中が本校と相前後して誕生している。

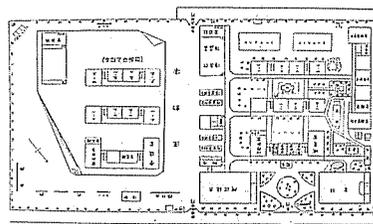
◆加古川中学校時代◆

大正13年（1924）

- 2. 9 文部省兵普第8号を以て本校設置の件認可せられる。生徒定員750名。兵庫県視学官学務課長古川静夫、本校校長事務取扱を命ぜられる。
- 2. 25 兵庫県加古川高等女学校内に本校仮事務所を置く。
- 3. 14 兵庫県社会教育主事兼視学委員瓜生兵吉氏、本校初代校長に補せられる。
- 3. 23 兵庫県立加古川高等女学校で、この日より3日間入学試験施行。
- 3. 28 合格者150名の氏名を発表。
- 3. 30 教室1棟並に小使室及附属建物が竣工。
- 4. 7 兵庫県立加古川高等女学校の講堂で、第1回入学式を挙。同日14日新築校舎普通教室1棟が完成し、授業開始。
- 5. 10 印南郡曾根町（曾根の松）に第1回遠足。
- 6. 2 東宮殿下（昭和天皇）御成婚記念奉祝式を挙。
- 6. 19 校友会誕生、各部の委員が任命される。
- 7. 11 本日より19日まで希望者140名高砂浦で水泳練習。（最初）
- 9. 30 本館及び講堂、生徒控所（後の体育館）教室1棟並武道場銃器室の建築が竣工。
- 10. 18 父兄会（第1回）出席者135名。
- 10. 22 御真影並教育勅語謄本下賜。瓜生校長、大河原教諭が兵庫県庁に出頭、伝達式をうけ午後1時3分加古川駅着列車で捧持し、本校職員生徒地方官民沿道に奉迎、続いて奉戴式を挙。
- 11. 30 午後8時45分南棟普通教室より出火、本館教室2棟小使室を全焼し、武道場生徒控所の一部を焼失した。御真影は加古川警察署に奉遷、職員生徒が跡始末に協力、わずか3日間の休業で講堂を4部に仕切り授業開始。
- 12. 1 御真影を加古郡役所にうつす。
- 12. 8 習学班の組織を作る。通学区域を27に区画し各団に団長、副団長を置き、担当教諭を定める。風紀衛生の指導、社会奉仕作業、非常の際の召集伝達の訓練をするものである。
- 12. 27 御真影を加古郡役所より本校にう



開校祝賀提灯行列



加古中学校舎平面図

つす。

大正14年(1925) —————

- 3. 31 教室1棟、小使室及附属建物竣工。準耐火構造である。
- 5. 3 職員生徒一同、神戸方面旅行、絹業博見学。
- 5. 5 講堂の仮教室より教室に移転。
- 6. 13 1年生は曾根、2年生は二見に遠足。
- 6. 24 挙手の敬礼を採用。
- 10. 3 職員生徒一同、書写山に遠足。
- 10. 11 第1回学芸大会。
- 11. 30 災厄満1年にあたり追憶の会。職員生徒の追憶談、橋本加古郡長、小山加古川町長、松井警察署長等の講話。又校友会誌第1号火災追憶号を発刊。
- 12. 7 皇孫殿下御降誕奉祝式挙行。旗行列で加古川町を一周する。同12日にこの記念樹を中庭に植える。
- 12. 18 理化学実験室新築。並に本館竣工。

大正15年(1926) —————

- 2. 2 姫路第39連隊留守隊長長瀬中佐による本校最初の教練査閲。
- 2. 15 全校遠足、城山に行く。
- 4. 19 瓜生兵吉校長は県立豊岡中学校長

に転任。藤井慶乗県立山崎高等女学校長が第2代校長として着任。

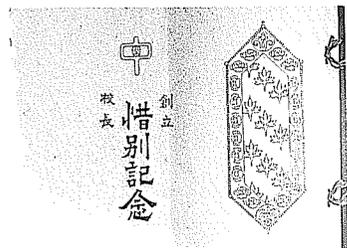
- 5. 25 伊豆少将講演。武道場の額「養移体」の3字の揮毫を請う。(少将は日露戦役に乃木將軍幕下として出征した人)
- 6. 19 教室1棟竣工。
- 9. 18 庭球部コート開き。武道場の東と西に新設。
- 10. 7 本日より4日間、3年生が姫路39連隊に兵営宿舎。(最初)
- 10. 18 全校遠足、明石太山寺より鷹取駅をまわり帰校。
- 11. 1 水丘村方面で姫路39連隊と県立農学校及び本校で連合演習(最初)
- 11. 3 本校全員長距離競争。(最初)午前10時学校発国道を東へ走り、平岡村新在家より南下、別府に至り海岸を西へ尾上を経て帰校。約3里5丁、1着3年1組佐伯、53分50秒。
- 12. 25 午前1時25分天皇陛下崩御。午前10時30分校庭集合、遙拝式を挙行、哀悼の意を表する。

昭和2年(1927) —————

- 2. 7 大正天皇の御大喪、運動場に祭壇



創立当時の外人講師
ヘンリー先生



瓜生校長惜別記念誌

を設け、午後5時より講堂で御真影を拝し、学校長は玉串を捧げ遙拝式を行う。

5. 17 職員生徒90名軍艦扶桑に便乗、高砂浦より神戸に向かう。

上記以外の職員生徒は高砂浦より、淡路の西岸を船行、観潮台(亀の浦)に登り鳴門の渦を見る。帰途は洲本經由明石海峡を通り高砂浦に着く。

9. 20 明治節制定される。趣旨を話し、明治天皇に関する訓話。

10. 26 第1回修学旅行出発。9時加古川駅発翌27日呉着。海兵団海軍工廠を見学、江田島の海軍兵学校見学。次に宮島参拝、宿泊。28日広島の浅野泉邸に遊び大本営跡見学、岡山より宇野高松を経て金比羅宮に参拝、宿泊。29日高松栗林公園に遊び、午後8時加古川駅着。

昭和3年(1928)

4. 昭和初頭大不況、緊縮財政の政策に沿って卒業アルバム製作中止。

5. 23 校旗制定、5年松浦巖を旗手として奉戴式を挙行。意匠は紫地の中央に徽章を金モールで縫いとした

もの。旗竿の先端に戟をつける。

6. 7 開校式、正門前に祝開校の緑門を造り、国旗を翻す。

10時より挙式、県知事式辞県会議長以下来賓祝辞、祝電、11時終わる。町公会堂前の会場で協賛会主催の祝賀会に来賓を、本校控室で父兄を招待、生徒には各記念品を配布。来賓273名、父兄349名。

夜は楽隊を先頭に全校700名の生徒の提灯行列を全町にくりだす。9時終了。

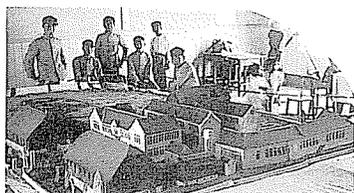
第2日 運動会。

第3日 講演会、高部乃木堂の軍事講談、旭大象の琵琶。

この3日間、教室で生徒の書画参考品を展示、特別教室で設備と実験を公開。各組毎に催し物、作り物、或は模擬店を設け種々の食品を販売。

10. 2 4年生広島より四国方面に修学旅行。

10. 9 御真影下賜、校長藤井慶乗、書記村上喜代治が県庁に出頭、伝達式をうけ午後10時28分加古川駅着の列車で捧持、職員生徒奉迎し奉戴式を挙行。



校舎全景模型



校旗

- 11. 10 御大典奉祝式を挙行，全校職員生徒旗行列を行う。
- 11. 23 5年生高岡射撃場にて実包射撃を行う。
- 12. 8 天皇即位式が11月10日に挙行され，本校も記念事業として①植樹，②温室の建築をする。
①は生徒各自に樹木1本ずつ持参させ中庭に植える。更に吉野桜100本を購入して校庭の周囲に植える。
②は11月初旬に起工，本日竣工，建坪20坪，総工費1,210円，費用は生徒1人宛2円を出す。

昭和4年(1929) _____

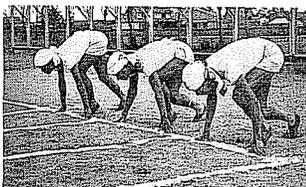
- 1. 12 全校職員生徒，京都御大典式場拝観の為上洛。
- 3. 4 第1回卒業式，卒業生117名，卒業記念にテント2張を母校に寄贈。
- 4. 27 藤井校長，山口県立下関高等女学校長に転任。
- 4. 30 三浦教諭，校長事務取扱を命ぜられる。
- 5. 11 加古川町は鳩里村と合併，町の依頼により全校生徒の旗行列を行う。
- 6. 5 天皇陛下，大阪の城東練兵場で近畿2府5県の諸団体約12万人の御

親閲。本校4年5年生徒177名職員6名参加。

- 6. 7 天皇陛下本県に行幸，本校職員生徒一同は早朝より上神，ご通過の沿道にならび奉迎。
- 6. 26 村上書記逝去。(同書記は島根県美濃郡高城村の人，日露戦争に従軍して後本県巡查部長となり，大正13年3月本校に奉職)。
- 7. 25 岩村寅之助県立小野中学校長が第3代校長として着任。
- 8. 5 第1回同窓会。出席者約80名。

昭和5年(1930) _____

- 1. 25 武道大会を開く。(最初)武道場に大神宮を奉祀。
- 5. 22 本年度より音楽科を新設，校友会基金より，600円を援助してピアノを購入。(1,200円)
- 5. 29 ロシア人の音楽家を招き，弾き初めをする。午後公開授業。
- 6. 2 5年生，広島より九州方面へ修学旅行に出発。
- 6. 4 4年生，広島方面へ修学旅行に出発。
- 6. 13 本校弁論部誕生「正しき思想」「真の言論」をモットーとする。
- 7. 3 校友会基金より200円を支出して



競技部



作業部

- サイレンを設置する。講堂で山本正男氏の単独オーケストラの演奏。
9. 6 ラッパ手教育開始、今月中毎土曜日。
10. 1 本日より4日間青野原で宿営野外演習。
10. 26 全校職員生徒は神戸灘の実業女学校に赴き、露台より観艦式を拝観。午後は海港博覧会見学。
10. 30 講堂の左右に教育綱領である「質実剛健」「自治創造」の額をあげる。(費用128円は5年生の寄贈、書は曾紫山先生の揮毫。教育勅語の煥発40周年記念事業であった。)
11. 9 朝香宮鳩彦王殿下御台臨、校庭に記念樹を植える。この頃4日間陸軍大学生の演習の為、校舎の1部を使用。
11. 26 県下中等学校49校の上級生、5,000人が東西に分れ連合演習、本校は西軍に属し宝殿より加古川堤防に至る。あと知事と師団長の閲団式、加古川小学校での分列式、次いで本校校庭で講評。(連合演習参加の最初)

昭和6年(1931) _____

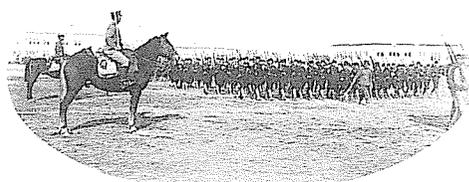
1. 15 御真影を校長と書記が捧持、県庁に奉還。武道大会。寒稽古のおさめ会を兼ねる。
1. 24 校長岩村寅之助、書記龍見良吉は姫路師範学校に出頭、今上陛下の御真影を拝受。午後0時30分帰校、奉戴式を挙行。
4. 8 管理衛生部を新設。
6. 1 夏服着用。今後夏冬ともカラーを使用することに定める。
6. 2 4年生、広島九州四国方面へ修学旅行に出発。
9. 12 本年8月同窓会の総会で議決があり、同窓会基金より275円を出しラッパ鼓隊の用具を購入、本校ラッパ鼓隊を設置。楽長以下17名で編成。
9. 35 支那水害拠金に関し校長の話あり、支那水害義捐金を集める。

昭和7年(1932) _____

3. 4 第4回卒業式、記念に放鳥籠を寄贈。
9. 18 満州事変1周年を記念し、ラッパ鼓隊を先頭に陸軍歌を唱いつつ町内を行進。前日(17日)満州事変記念行軍及び秋元大尉の上海における実戦談を聞く。
10. 26 帝国発明協会兵庫支部展覧会に



朝香宮台臨



連合演習

4年生西寺君特等賞を受く。4年生中村君は佳良。

- 11. 16 天皇陛下、大阪城東練兵場で近畿2府5県の各種団体約8万人の御親閲あり、本校は岩村校長以下生徒5年生75名参加。
- 11. 28 第1時限初め、控所で徴兵60周年記念日に関する訓話。

昭和8年(1933) _____

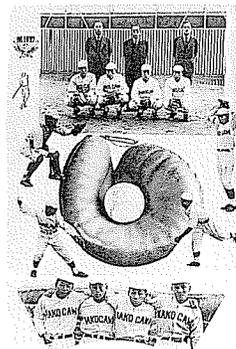
- 3. 4 第5回卒業式、記念の為庭園及び控所に時計を寄贈。
- 4. 27 靖国神社大祭につき高砂神社参拝(最初)。
- 9. 23 御影師範学校主催全国中等学校柔道優勝大会にて、優勝。(主将、花川)
- 10. 8 第1回兵庫体育協会主催県下中等学校剣道優勝大会が甲陽中学校で開かれ、本校が優勝。(主将、北村)
- 11. 10 国民精神作興に関する勅語奉読式、引きつづき職業指導に関する注意。
- 12. 23 皇太子殿下ご降誕、校庭に姫子松を記念に植える。
- 12. 29 生徒非常召集、皇太子殿下御命名式奉祝旗行列。

昭和9年(1934) _____

- 3. 4 第6回卒業式、記念に庭園2か所寄贈。
- 3. 13 建武中興600年記念式、講話と遙拝。
- 4. 10 昨年8月同窓会の協賛を得、同窓会基金より2,000円、校友会基金より1,000円、計3,000円の子算で県営繕課に設計等万事を依頼、中庭に奉安殿を建設する。当日神官を招き御真影の奉遷式。
- 4. 29 天長節、式後第1回卒業生花井秀次氏寄贈の校旗掲揚台竣工、当日掲揚式を行う。
- 4. 30 岩村校長退職、尼崎市学務課長に就任。
- 5. 4 中井修一小野中学校長が、第4代校長として着任。
- 5. 11 昼食後控所で忠霊塔の献金の話あり。
- 5. 31 昼食後控所で6月4日より更衣、及び6月1日より校内でパン販売につき注意あり。
- 6. 4 4年生九州方面へ修学旅行に出発。
- 6. 5 東郷元帥国葬につき訓話遙拝。
- 6. 7 本校国漢科で起草した校歌が本校音楽科で作曲、本日の創立記念日に発表。10月8日頃に東京市芝区松本町44、共益社書店で楽譜印刷



商業科



野球部

して配布。

9. 21 大暴風雨の為、雨にぬれた者多数につき授業中の服装を適宜とする。
9. 23 兵庫県体育協会主催西部中等学校剣道優勝大会を本校で挙行、第1部は本校が優勝。(第2部は姫路師範が優勝)
9. 29 昼食後控所にて風水害義捐金10銭、大楠公銅像寄附金10銭を提出するよう話あり。
10. 3 5年生、青野原野外演習。
10. 20 5年生、高岡射撃訓練。
11. 1 創立10周年記念式挙行。
展覧会開催(3日まで)生徒作品219, 卒業生作品30, 職員作品41, 器械標本192。
11. 2 仏式により講堂で物故会員(客員2名, 会員27名)慰霊祭挙行。
11. 3 明治節拝賀式、ついで9時より記念運動会(演技56)午後4時迄、この記念事業の1つとして1,200円の基金で奨学資金を創設。
更に校長室前の広場に純日本庭園を築く。
運動場の四方に西は4間間隔、北南東は3間間隔に松を植える。母里村井沢豊松氏が特に57本を分与

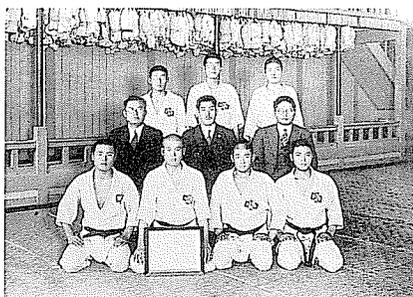
せられたもの。

11. 15 5年生が軽機関銃2つ寄贈、献納式と試射。

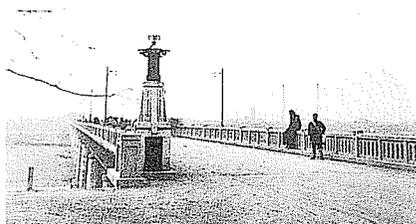
昭和10年(1935)

1. 8 始業式、剣道資格試験合格証伝達式。(2段2名初段7名)
1. 16 武道寒稽古、剣道は講堂、柔道は道場、26日武道大会。
2. 4 全校生徒吃音近視調査、吃音28名、近視222名。
2. 25 東久邇第4師団長宮殿下御台臨。
4. 26 第1時限生徒控所で長尾鷄見学。
4・5年生の一部多木製肥所見学。
5. 8 5年生、加古川第1小学校における徴兵検査見学。
6. 2 4年生、九州中国方面へ修学旅行に出発。
6. 16 本校で西部中等学校剣道大会。
6. 20 連合演習参加。
10. 9 5年生、青野原野営。
11. 1 熱田神宮遷座祭につき臨時休業、訓話遙拝式
11. 15 5年生、高岡で実包射撃。
11. 28 4年生、姫路39連隊に兵営宿泊。

昭和11年(1936)



柔道部



昭和10年頃の加古川大橋

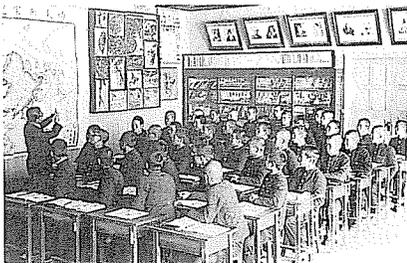
- 1. 16 寒稽古。25日武道大会，田畑範士来校。
- 2. 10 5年生，寄贈の軽機関銃献納式。
- 5. 9 午後道場にて下司書店出張して写真会，全校生観覧。(9月にもあり)
- 5. 17 5年生，騎兵10連隊軍旗祭に参列。
- 5. 18 加古川第1小学校における戸山学校軍楽隊の演奏見学。
- 6. 1 4年生，九州・中国方面へ修学旅行に出発。
- 6. 3 5年生，徴兵検査見学。
- 6. 19 賀陽宮恒憲王殿下ご台臨，師団長県学務部長等が先着，運動場でご閲団式，生徒の成績を御台覧，次に授業を御視察。なおこの月29日30日この折の成績を一般公開。
- 10. 2 5年生，高岡実包射撃。
- 10. 4 県下軟式庭球大会で本校が優勝，優勝盃を受く。
- 10. 5 5年生，軽機関銃寄贈。
- 10. 6 5年生，青野原野営。
- 10. 18 姫路高等学校主催，県下中等学校射撃大会で優勝。
- 10. 25 神戸みなと祭軟式庭球大会で準優勝。賀陽宮殿下チーム対姫路赤十字病院チームの軟式野球試合が本校校庭で行われる。殿下妃殿下御

台臨。この後，宮殿下のご来校度々。

- 10. 29 5年生54名，4年生21名，観艦式拝観の為神戸に旅行。残留の5年生は荒井醤油工場を経て曾根神社へ，4年生は神野村城山に行軍。
- 11. 3 5年生，連合演習参加。
- 11. 14 校内庭球大会，4年生，校内にて狭搾射撃。
午後1時より会議室で公民講座を開く。以後21日まで奇数日実施。
- 12. 5 4年生軍隊宿泊。
- 12. 12 大島鎌吉氏のオリッピックの講演。

昭和12年(1937) _____

- 1. 23 13日より武道寒稽古，本日校内武道大会。
- 3. 13 5ヶ条御誓文渙発70周年記念日につき訓話。
- 4. 19 梁在寛君の苦心体験談を講堂で聞く。
- 5. 17 細田教諭心得新任式。
- 6. 6 4年生中国九州方面へ修学旅行に出発。
- 6. 20 小野中における西部中等学校剣道優勝大会に優勝，優勝刀を受く。
- 6. 23 5年生加古川公会堂における徴兵



地理の授業



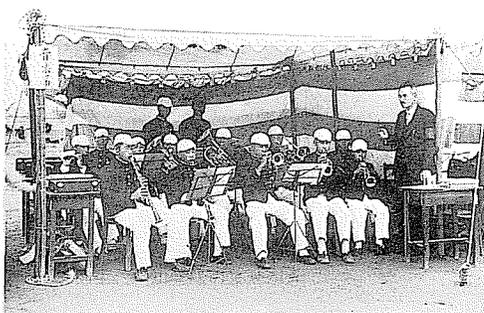
体操の授業

検査見学。

- 6. 27 西部中等学校柔道大会において本校優勝、優勝旗を受く。
- 8. 1 本日よりラジオ体操実施。(20日まで)。この年より毎年、加古川尾上野口米田の学友団は校庭で、その他の団員は出身小学校校庭で。午前8時召集、中井校長の事変に関する訓話武運長久祈願(毎月1日に行う例となる)。
- 9. 1 加古川町出身の長永伍長戦死、遺骨出迎えに加古川学友団が駅頭に行く。以下これに類するもの頻り。
- 9. 9 満州国駐日大使秘書官鮎沼氏来校、4年5年生に対し満州国立建国大学々生募集に関する講談。
- 9. 18 第1時限初め、全員運動場集合、中井校長より満州事変記念訓話並に遙拝。
- 9. 28 中井校長より全国中学校職員生徒一同より陸海軍飛行機献納の件につき訓話。
- 10. 4 本日より6日迄防空演習のためサイレンの使用禁止。
- 10. 6 下司書店出張、事変ニュース映写会。
- 10. 12 5年実包射撃。
- 10. 13 午前8時講堂で国民精神総動員強

調週間第1日につき国歌合唱、遙拝、中井校長訓話。以後1週間、毎日遙拝・訓話・ラジオ体操を行う。戌申詔書渙発日につき詔書奉読式。

- 10. 15 放課後、怪力者来校、体験談その実演あり。
※ この頃戦死者の公葬頻り、その都度職員参列。
- 10. 25 5年生、連合演習参加。庭球部全国大会に出場のため上京。
- 10. 28 加古川町戦捷祝賀行列に一部学友団参加。
- 11. 7 姫路高等学校主催の県下の射撃大会に本校優勝。
- 11. 10 国民精神作興週間第1日、詔書奉読、訓話。
- 11. 26 5年生と4年生の一部が公会堂における大毎記者の北支事情の講演聴講。
- 12. 11 第2時限後、全校職員生徒運動場に集合。南京陥落の祝賀式挙行。ひきつづき全校、日岡神社参拝、加古川町内を行進。
- 12. 15 4年生5年生、飛行隊を加古川駅頭に出迎える。
- 12. 16 下司書店映画会。



運動会の音楽部



鼓隊

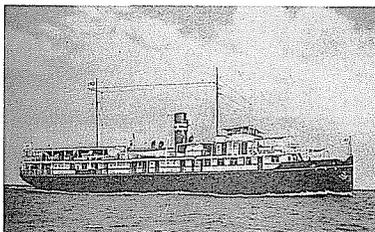
12. 22 午後5年生より寄贈の擲弾筒の献納式、ひきつづき音楽部の演奏会。

昭和13年(1938) _____

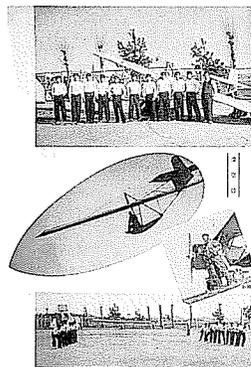
- 1. 22 校内武道大会(19日より寒稽古)。
- 1. 28 午前10時各教室で第10師団戦没者慰霊祭の遙拝式並に訓話。午後県会議員金光氏の北支慰問の講演会。
- 2. 10 講堂で安武少佐の支那事変に関する講話。
- 4. 12 全校で学校前国道に出てイタリヤ使節パウリッチ団長以下22名の使節団の西下を歓迎する。
- 4. 21 細田先生出征送別式。
- 6. 6 4年生、中国、九州方面に修学旅行に出発。
- 6. 15 本日より4日間勤労奉仕。学友団を中心に加印両郡農家の手伝い、一部は学校で作業。
- 6. 19 姫路中学校における西部中等学校柔道大会で本校優勝。
- 7. 5 第1時限途中で全校生控所に集合。水害に関する注意、直ちに帰宅させる。
- 7. 7 支那事変1周年記念日につき登校前、生徒は学友団毎に、各町村における武運長久祈願祭に参列。登校後講堂で記念式、遙拝・訓話・

黙禱。

- 7. 11 5時限、講堂にて支那事変に関する勅語奉読。
- 7. 14 午後控室で中井校長の阪神地方水害視察談。
- 7. 21 本日より3日間神戸地方水害復旧作業に出向く。(須磨妙法寺川の改修)
第1日 5年生
第2日 4年生
第3日 3年生
- 8. 6 全校で飛行場の勤労奉仕(5日間)。
- 9. 4 4年生、5年生、藤江の滑空場整地作業。
- 9. 9 藤原大尉日支事変体験談(3年生のみ)。
- 9. 15 満州国承認記念日(校長より訓話)。
- 10. 5 5年生、青野原野営。
- 10. 11 5年生、高岡実包射撃。
- 10. 24 5年生、加古川原を中心とした東播中等学校連合演習に参加(2日間)。
- 10. 28 武漢三鎮陥落祝賀式、皇居遙拝訓話、旗行列泊神社参拝。
- 11. 7 4年生藤江滑空場整地作業。
- 11. 11 本日より3日間全校で加印両郡の軍人遺家族に対し農事奉仕。



海事訓練



滑空部

11. 26 藤江グライダー滑空場落成式，5年正副組長出席。

昭和14年（1939）

1. 28 武道大会（18日より寒稽古）。

4. 13 学校教練実施15周年記念につき校長訓話。

5. 2 健康週間第1日遙拝訓話，ラジオ体操。（この1週間毎日あり）

姫路護国神社例祭のため教室で午前10時遙拝。柔道，剣道部員10名同神社奉納武道大会参加。

5. 6 全校行軍，八幡村宗佐八幡宮に参拝。

5. 20 朝礼の際，御親閲拝受のため上京の代表生徒10名よりあいさつ。

午前8時27分加古川駅発。

同22日東京宮城前にて御親閲，同時刻を期し校庭で訓話遙拝，分列行進，泊神社参拝，23日同代表帰校，24日講堂で学校長より訓話，勅語奉読式，当日徳富蘇峰氏の講演あり。

6. 3 3年有志，大毎の従軍記者の戦況報告会（於公会堂）を聞く。

6. 5 4年生生徒数名樺原神宮建国奉仕作業のため午前7時52分加古川駅発，7日に帰校。

6. 12 本日より3日間加印両郡各町村の

出征将兵遺家族の麦刈農事奉仕作業。

7. 7 支那事变2周年記念式，午後記念防空演習，全校徒歩通学並びに徒歩神社参拝。

7. 25 剣道部選手京都武徳殿の大日本青年演武大会に出場。26日に柔道部も出発。

7. 29 5年生，徴兵検査見学。

8. 14 4年生30名海軍軍事訓練講習に参加。

8. 24 青少年学徒に賜わりたる勅語奉読式。

9. 18 満州事变8周年記念につき学校長訓話。

10. 3 軍人援護に関する勅語奉読式。

10. 4 1年生公会堂における陸海軍航空展覧会见学。

10. 23 5年生防空講演を公会堂で聞く。

11. 1 興亜奉公日につき学校長訓話。

11. 6 5年生，高岡実包射撃。

11. 14 本日より3日間銃後勤労奉仕。加印両郡出征将兵遺家族の稲刈奉仕作業。

11. 22 剣道部員，鳥取歩兵第40連隊における第10師団管内剣道大会に出席。

12. 5 西田海軍大佐講演。



美術部



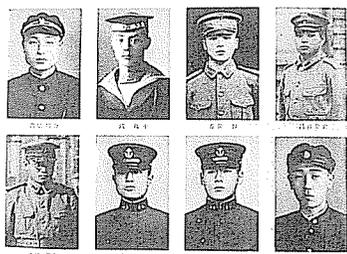
事变風景千人力

昭和15年（1940）

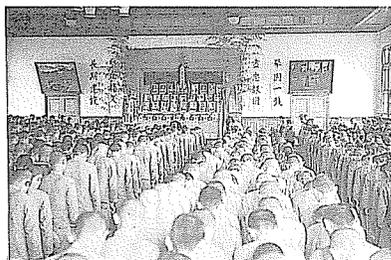
1. 27 武道大会（寒稽古は17日より24日まで）。
2. 13 紀元2600年紀元節に賜りたる詔書奉読式。
4. 9 中井校長，県立尼崎中学校長に転任。松本従之県立山崎高等女学校長が第5代校長として着任。
4. 29 宮中喪中につき天長節拝賀会行わず。
5. 28 5年生，修学旅行に出発。
この年より東京方面へ変わる。
6. 4 4年生，修学旅行に出発。
6. 11 本日より3日間加印両郡遺家族農事奉仕作業。
6. 25 陸軍大尉細田淳先生6月19日戦死の報あり，追悼式。
7. 5 第5学年1組勤労報国団実習。
7. 7 支那事変第3周年記念式講演，閲兵分列式並に泊神社参拝，皇軍武運長久祈願。校長生徒代表は陸軍病院慰問。
8. 29 本日より3日間飛行連隊で集団勤労奉仕作業
9. 13 故細田先生公葬，校長同窓会代表生徒代表が参列。
9. 18 満州事変記念日につき記念講演，

滑空機加古中第一号機命名式（於運動場）滑空部創設は14年度。

9. 21 日毛グラウンドに上記グライダー処女滑空。
9. 29 本校職員並に卒業生の英霊に対し慰霊祭。（細田先生と卒業生22柱）各遺族を招き講堂にて行。細田先生厳父が遺族を代表してあいさつされる。
10. 30 教育勅語渙発50年記念式。
11. 10 紀元2600年奉祝式。
記念行事として①勤労報国団の行事，多木製肥所所有の水田3反余を借入れる。学校の校外特別実習田として経営をし，食糧増産の実をあげ又勤労愛好の精神を養う事とした。
4年生5年生の農業科の時間をあてて管理経営をする。
②記念文庫を作る。
③記念植樹，校長職員生徒が記念式後奉安殿前に集まり松を植える。
11. 12 教育勅語渙発50年記念に賜りたる勅語奉読式。
11. 15 本日より3日間加印両郡遺家族農事奉仕作業。
11. 21 旧職員新京陸軍軍官学校教授橋本



卒業を待たず軍関係学校へ進学した者（中13回）



慰霊祭

源吉氏が来校，講演。この年同窓会は出征同窓の慰問，戦傷病同窓の見舞い，戦死者の慰霊祭をし，講堂にその肖像を掲げるために総会で議決をし寄附を募ることにした。1口1円。「支那料理店『冠珍』にて加古中同窓会」との記録あり。

昭和16年（1941）

この頃校友会は改組されて報国団となり組織は下記のとおり。

- 1 総務部
- 2 鍛練部
 - 奉仕作業班，剣道班，柔道班，野球班，庭球班，蹴球班，競技班，水泳班，剛健旅行班
- 3 国防訓練部
 - 銃剣術班，射撃班，滑空班，防空班，情報班。
- 4 学芸部
 - 図書班，団誌班，音楽班，書道班，詩吟班，工芸班。

- 5 生活部
 - 保健衛生班，農芸班，慰問班
- ※ 9月には国防訓練部に，乗馬班を新設し，憲兵隊馬場で毎週練習。

7. 1 学校前の水田で職員一同田植。

4年生5年生は青野原演習に参加。5年生は往復とも強行軍。

8. 3 はじめて同窓会より母校永年勤続者（10年以上）に感謝状・記念品料を贈る。（10名）

遺家族農事奉仕を食料飼料等増産勤労奉仕作業に拡大，春秋5日ずつ出勤。修学旅行は，太平洋戦争激化のため必勝祈願参拝旅行となり東京，奈良方面。（3泊4日）

昭和17年（1942）

日曜勤労奉仕，嬉野八紘舎整地作業。滑空機格納庫新設。

昭和18年（1943）

1. 21 中等学校令改正，修業年限1年短縮，教科書は国定となる。

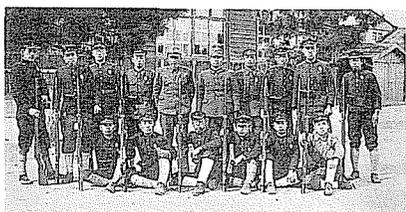
この年より昭和23年まで修学旅行中止となる。

昭和19年（1944）

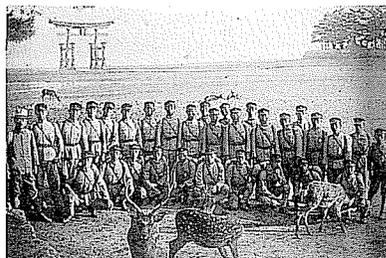
学徒動員，2年尾上飛行場。

3年1組（堀中）キッコーマン醬油，2組（井置巧）多木製肥所，

3組（松岡確）日鉄炉材KK，4組（有藤秀夫）日本造機KK後多木へ，



国防訓練部射撃班



太平洋戦争必勝祈願の修学旅行

4年生(後藤・海老名・窪田・望月)三菱化成伊保工場・国鉄姫路機関区車輛修理工場。5年生東亜機械金属KK
配属将校隨時査閲。

1. 8 学徒動員は毎年4か月の継続ときまる。(閣議)
2. 9 戦時措置として芸能科を廃止, 工作を課すこととなる。(閣議)
7. 11 低学年の動員決定(閣議)

昭和20年(1945) _____

- 1. 2年生は授業と平行して尾上飛行場整地作業に従事する。
 - 教科内においても軍事に関するものを扱う。
 - 放課後1時間銃剣術基本練習。
 - 学校, 機銃掃射を受ける。
8. 15 敗戦。数日後, 職員期せずして集合, 松本校長冥想して校長室を出ず。
- クラブ活動始まる。野球・庭球・陸上・相撲・書道・絵画など。
 - 進駐軍将校学校視察, 学校事情に関する報告書提出。
 - 進駐軍の教育担当者フォークダグスを指示, 体育館で盆踊り。
- この9月文部省は新日本建設の教育

方針を公表, 中等学校以下の教科書より戦時教材を削除するよう通達。又学校報国団を解体し, 自治的校友会に再編するよう通達。更に「国体の本義」「臣民の道」等の使用を禁止し, 職業軍人の教職よりの解職一適格審査委員会をもうけて適不適の決定をする一体育用具, 武道用具, 滑空機の廃棄, 奉安殿の撤去, 修身国史地理の授業停止(この時間は体育或は食糧増産の目的の補充をする)等の通達。

9. 25 志田一夫教諭(英語)逝去。

昭和21年(1946) _____

4. 1 松本校長退職。青山勇県立神戸一中より第6代校長として着任。
 4. 職員室本館二階中央に移転。
 11. 3 運動会復活
 12. 8 相撲土俵開式(全国大会出場記念として贈呈される)
- 生徒自治会の導入で, 学級, 学年毎に委員を選出し, 全校自治会を組織する(G. H. Q.の指令とかで急に作るようになった)
- 運動・文化部誕生(野球・山岳・籠球・水泳・音楽・工作・衛生・書道・尺八



射撃訓練



馬術班

同好会)他に庭球・陸上競技・相撲・絵画。
 ○芋畑となっていた運動場の復元作業。
 この年1月末に地理科再開, 7月15日
 より占領目的を阻む行為の罰則を実施。
 中学校を5年制にする事が復活。

昭和22年(1947) _____
 この年4月新学制による小学校, および中
 学校が発足。

- 7. 30 青山校長, 兵庫県視学官に転任。
- 9. 9 亀岡寛治, 県立神戸二中より第7
 代校長として着任。

◆加古川東高等時代◆

昭和23年(1948) _____

- 4. 1 新制高等学校に移行し, 兵庫県立
 加古川東高等学校と改称。
- 7. 1 兵庫県加古川西高等学校と職員生
 徒を折半交流し, 男女共学を実施。
- 10. 12 運動会
- 10. 23・24 第1回文化祭を男女共学・高
 校昇格記念として実施, 展覧会,
 劇の他バザー・模擬店。育友会賞
 を与える。
- 10. 自治会改革が話題となる。(進駐軍
 の提案によるものか)
- 11. 12・13 交流後最初の秋季校内大会(野
 球・排球・ソフトボール・庭球・
 籠球・相撲)
- 12. 4 第1回校内マラソン。(男子5,000,
 女子2,000m)
- 2. 24 陸上競技部の招きにより村社講平
 氏来校, 講演および実施指導。

全播新制中学討論大会(参加20校)
 において本校併設中学優勝。(於姫
 路東高)(山本・白藤・三浦・岩佐)
 1年生が男女混合共学となつたら
 しい(併設中学はすでになっていた。)

「取引高税印紙の回収に努力を！」
 という記事が「青流新聞」にある。

この年度の「本校重大事件番付」(青流10号
 より)

	東	西
横綱	交流男女共学	文化祭
大関	学区制	自治会会則成立
関脇	運動会	「青流」発刊
小結	長谷川・山田組 国体第3位	文鳥誕生
前頭	校内秋季大会	新中討論会優勝
〃	上良教頭栄転	山本教頭村長に



旧校舎玄関と本館



ロータリー

- 〃 軟式野球優勝 庭球部優勝
- 〃 田中・水野嬢 山岳部アルプス
国体へ出場 へ出場
- 〃 競技部優勝 卓球部優勝
- 〃 山岳部スキー 考古学部土器発見
- 〃 相撲部近畿大会へ 校内マラソン大会
- 〃 竹内先生栄転 井内先生教頭
- 〃 通信部設置 自転車置場新設
- 〃 駅伝出場 野球部県大会へ
- 〃 村社氏来る 予餞会

この頃 校内整備 部室—文化部8室・体育部13室。自転車置場, 被服室2, 家事室1(武道場改造), 女子便所改造, バレーコート移転, 女子バスケコート新設。
ソフトボール・排球・ダンス・茶道・邦楽・珠算の各部設置。

(青流3号より)

昭和23年度校友会校務分掌

総務部

企画・庶務・会計係 上良・糟谷・西口
自治会係(校内・校外) 中島・谷沢

文化部

一、精神科学部

哲学・心理・論理・宗教班 兼松

政治・法律・経済・社会問題班

兼松・水田

歴史・地理・考古学・民族学班

蓬萊・平本・水田

文学・語学班 竹内・高橋・吉田・蓬萊

二、自然科学部

数学班(解析・幾何) 井置・原・糟谷

物理班 中安・田中

化学班 西村

生物班 前田・当津

衛生班 当津

三、芸術部

工作班(建築) 松岡

絵画・書道・写真班

原田・西口・長谷川・中安

音楽班(和・洋楽) 蓬萊・田中・村上

映画・演劇班 磯部・高橋

四、家政部

料理班 住野

裁縫班(洋・和裁・手芸) 在竹・穂塚

茶・花道班

五、園芸部 吉田(薫)

六、新聞・雑誌部 兼松・吉田・高松

七、図書部 望月・西村・前田・中島

体育部

野球部 硬式班 吉田(薫)・谷沢

軟式班 粕谷



活躍めざましい考古学部

庭球部	前田・平本
籠球部	兼松・山本
排球部	山本・柴谷
卓球部	村上・柴谷
陸上競技部	当津・谷沢
相撲部	谷沢
ソフトボール部	吉田・中安
山岳部	谷沢
ダンス部	柴谷

化学・物理・書道・絵画・演劇・地歴・手芸・茶・華・邦楽・雑誌・映画・珠算・放送・図書となる。

昭和24年 (1949)

- 5. 17~20 修学旅行復活。高2回生，別府で一泊する。
- 10. 28 二十五周年記念式典，校旗制定，校歌発表。
- 10. 29 同記念音楽会，笹田和子・伊達三郎・神沢哲郎の各氏出演。
- 10・30 同記念運動会
- 11. ラグビー同好会結成
- 11. 24 最初の英語弁論大会(The English Oratorical Contest)，新聞部主催。自治会を生徒会と改める。
クラブ整備 運動一野球・庭球男女・陸上男女・排球男女・卓球男女・相撲・剣道・柔道・山岳男女・ラグビー・ソフトボール女・ダンス女 文化一新聞・音楽・生物・

昭和25年 (1950)

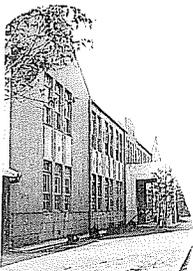
東播大会12種目中，6種目に優勝。野球部後援会誕生。
単位制・選択制が実施されたい。

昭和26年 (1951)

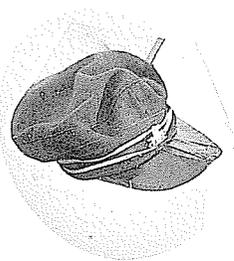
- 4. 1 亀岡校長，県立豊岡高校長に転任。清水敬治，県立竜野高校長より8代校長として着任。
- 4. 16 クラブ整備，放送が新聞部から独立，演劇と映画と分離，柔道，水泳が同好会から部へ，手芸・染色と茶華道新設置。
文化祭中止。
前年度より継続の家庭科施設完成。被服・洋裁・ミシン・割烹・洗濯染色各教室，研究室・日本間・更衣室完成。作法室建築計画，運動場拡張案成る。東播大会全種目優勝。

昭和27年 (1952)

- 5. クラブ整理，語学・珠算・手芸染色・邦楽・茶華・地歴考古・映画・



S 27年当時の本館



S 27年の帽子



化学部

生物・書道・山岳・写真の各部同好会となる。水泳・化学・物理の各部廃止。

- 8. 17 第1回通教祭。
- 9. 3 作法室起工式。
- 9. 8 松本宏絵画個人展を開く。(図書室)

昭和28年(1953) _____

- 9. 剣道部復活, 部員30名余。
- 9. 24 文化祭復活(3年ぶり)
清水校長, 本校賛歌「朝明」をつくる。

昭和29年(1954) _____

- 5. 21 生徒会会則修正, 報道委員会を設置。
- 7. 18 応援歌決定, 作詞西島三恵, 作曲音楽部, 清水校長作詞の「それ清流に」と共に文化祭に発表のはこびとなる。
- 8~9月 三十周年記念施設工事, 体育館補修・前庭道路改修・中庭砂利・緑化・講堂中央館体育館補強塗装。
- 10. 8 三十周年記念式典, 記念誌発行。
つづいて9日文化祭, 10日運動会。
3日には(第6回)文楽興行。
- 11. 21 長門美保歌劇団来演, 「カルメン・蝶々夫人」抜粋。

- 12. 生徒会会則改正案成る。

昭和30年(1955) _____

- 図書室開架式となる。
- 6. 6 講演会, 鷺義徳氏。(中3回生)
- 10. 16 文化祭を芸能祭と称する。

昭和31年(1956) _____

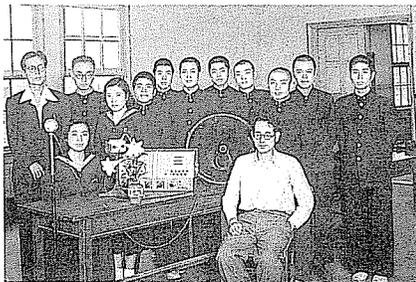
- 4. 1 清水校長・県立芦屋高校長に転任。
川本猪三郎, 県立赤穂高校長より, 第9代校長として着任。
- 10. 28 第十一回国体ハンドボール会場として本校グランド使用。
- 11. 26 アイヌ民族無形文化保護会派遣員4名白老町より来校。

昭和32年(1957) _____

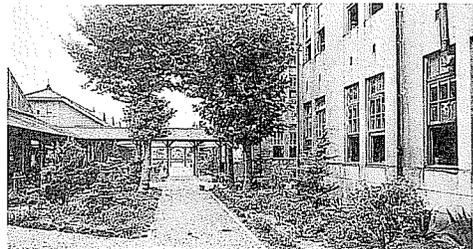
- 4. 28 文楽興行。
- 6. 6 開校記念講演会, 田中国夫氏。

昭和33年(1958) _____

- 4. 1 川本校長, 県立西宮高校長に転任。
井内喜久次, 県立姫路南高校長より, 第10代校長として着任。
- 5. 10 木下勇教諭アジア大会聖火リレー走者となる。
- 5. 16 長門美保独唱会。



S 28年当時の放送部



昭和30年頃の校庭

- 6. 6 小原正三氏（3回生）講演会。
- 10. 10 新井克輔氏ハーモニカ演奏会。
- 10. 24 購買部増築工事始まる。
- 10. 31 阪口保氏講演会。
- 12. 3 便所改築工事始まる。

昭和34年（1959）

- 5. 14 小松杯争奪としては最初の弁論大会。1. 2年全員水曜クラブ入部にふみ切る。

昭和35年（1960）

- 2. 1 全面改築のための運動場拡張工事起工式。

昭和36年（1961）

- 5. 10 能力別指導について検討。
- 9. 19 井内校長欧米視察に出発（11. 4まで）。生徒用傘・各学年50本を備える。卒業記念品としてチャイム。

昭和37年（1962）

- 3. フランス美術展鑑賞。
- 9. 20 校舎増築起工式。

昭和38年（1963）

- 4. 1 井内校長，県立姫路西高校長に転任。柴垣武夫，県立豊岡高校長より第11代校長として着任。
- 6. 5 新館竣工式。
- 6. 「今週の言葉」教室の黒板にも書く。
- 9. 内規集作成にかかる。

昭和39年（1964）

- 6. 東村氏作品寄贈，本館前に備えつけ。
- 6. 25 県教育長総合視察。
- 8. 全日本ゴルフジュニア選手権大会（千葉カントリー）で1年入江勉準優勝。
- 9. 24 オリンピック聖火リレー全員で迎える。
- 9. 25 創立四十周年記念式典，清流会よりピアノ寄贈。26日文化祭，27日体育祭。
- 11. 16 柴垣校長学校提携のため外遊，12月まで。

昭和40年（1965）

- 1. 12 校長婦朝講演会。
- 2. 17 ピアノ開き。
- 4. 15 オリンピック映画観賞会。
- 6. 11 田中国夫氏講演会。
- 6. 24 第二期改築工事地鎮祭。



バスケットボール部



東京オリンピック聖火リレー

- 8. 9 最初の学年野外活動（13日まで於嬉野）。
- 9. 10 台風23号のため臨時休業，つづいて17日も24号のため休業。

昭和41年（1966）

- 1. 25 増築竣工式。
研究集録第一集発行。
- 4. 1 柴垣校長退職。西村勇，県立出石高校長より第12代校長として着任。
- 4. 職員住宅最初の入居。
- 10. 2 運動会，今次以後バザーとりやめ。
- 11. 14 同和教育推進委員会ひらく。
- 11. 26 講堂兼体育館地鎮祭。

昭和42年（1967）

- 1. 19 第三期工事竣工式。
 - 3. 1 校務分掌改正案承認，教務から進路が，生徒課から管理厚生が独立。
 - 4. 7 市田事務長逝去。
 - 5. 4 水曜クラブ取りやめ決定。
 - 7. 13 体育館兼講堂竣工式。18日体育館開きとして籠球試合。
 - 12. 年末年始日宿直代行員設置。
- この年 体育後援会がクラブ後援会となる。
全校体操開始。

昭和43年（1968）

- 4. 1 西村校長，県教委但馬教育事務所長に転任。山本教憲，県教委社教課長より第13代校長として着任。
 - 6. 日宿直全面的に代行員制となる。
- この年 工事の関係で運動会中止。

昭和44年（1969）

- 4. 14 管理棟新校舎へ移転。
 - 6. 12 音楽鑑賞会，東京交響楽団来演。
 - 7. 15 長島晴雄氏3年対象講演会。
 - 7. 15 生徒の長髪を認める旨発表。
 - 11. 21 県英語研究会本校で行なわれる。
 - 12. 19 狂言鑑賞会，劇団潮流。
- この年 木下勇教諭ゆずりは賞受賞。
教師と生徒との関係，生徒の政治・社会活動話題となる。

昭和45年（1970）

- 1. 16 職員同和研修会，長浜氏講演。
- 2. 24 生徒会・全校座談会を行なう。
- 5. 8 全校生万国博見学。
- 7. 20 プール竣工式。
- 12. 17 音楽鑑賞会，栗林義信・飯野淳也・新井克輔・小林崇行各氏来演。

昭和46年（1971）



体育祭にがお絵かき



S44年耐寒訓練

- 3. 2 高橋典治教諭（書道）逝去。
- 4. 1 山本校長，県教委学校教育課長に転任。嶋田幸雄，県立相生産業校長より第14代校長として着任。
- 4. 26 時によって制帽をかぶらない事を認める旨発表。
- 5. 31 第1本館東工事起工式。
- 6. 5 柏谷博之氏講演会「南極自然と生物」
- 7. 17 育友会主催地区別懇談会始まる。
- 10. 19 能・狂言鑑賞会。
- 12. 1 東播高校美術展（於会議室）

昭和47年（1972）

- 1. 8 第1本館第五期工事竣工式。
- 2. 4 旧講堂撤去。
- 5. この年より本校に加古川東コミュニティカレッジ開講。テーマ「家庭の科学・英会話」

昭和48年（1973）

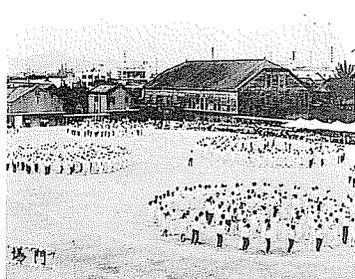
- 10. 7 放送による同和学习を始める。「同和对策特別措置法」の解説を行う。
- 10. 3 定期的にLHRの時間を利用して同和学习を行う。
- 10. 11 生徒の学習机・椅子が従来の木製より，パイプ机・椅子に1学年分

変る。

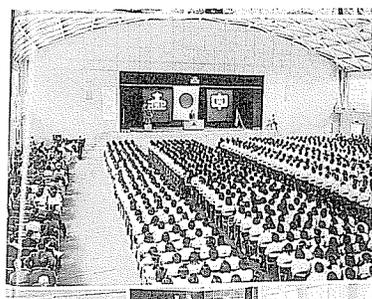
- 11. 3 グレード別学級編成について検討委員会を設ける。
- 11. 10 清流館の建設始まる。

昭和49年（1974）

- 3. 31 格技場・生徒集会室（食堂）完成。
- 4. 1 嶋田校長退職。岩崎宗次郎，県立三本高校長より第15代校長として着任。新年度よりグレード別学級編成を廃止。
- 4. 9 同和教育担当教諭を生徒指導部に1名，各学年に各1名を設ける。
- 5. 17 この年より加古川西高と職員親善試合始まる。
- 6. 7 創立50周年記念式典を盛大に行い，記念講演に田中国夫関学大教授を招く。
- 6. 9 コミュニティー・カレッジのテーマを「文学の心を探る」に変更。受講生80名余。
- 8. 19 清流会より清流館3階会議室を寄付。
- 11. 5 同和教育啓蒙映画「大地の夜明けII部」を全校生徒に鑑賞させる。この頃同和に関する差別問題が各地でおこり，本校職員も糾弾会等



体育祭フォークダンス



創立50周年記念式典

に出席し研修。

- 11. 16 文化鑑賞会で、独唱会を開く。
- 12. 15 生徒の表彰制度（学校賞・皆勤賞・精勤賞・生徒会功労賞）を廃止。

昭和50年（1975）

- 1. 10 模試・実力考査の成績処理を外部のコンピューターに依頼。
- 2. 4 書道教室完成。
- 4. 10 必修クラブの全学年実施は施設・設備の面から困難なので、3年生はゼミナール形式にする。
- 4. 10 同和教育部が専門部として独立。
- 7. 財団法人「青松会」発足。
- 7. 15 地区別懇談会を廃して、学年別父兄会始まる。
- 10. 24 文化鑑賞会、古典芸能として能・狂言（舟弁慶・附子）上演。
- 12. 15 部落解放研究同好会発足し、生徒会を中心として、学習活動始まる。

昭和51年（1976）

- 4. 1 岩崎校長退職。藤本晴保、県立八鹿高校長より第16代校長として着任。
- 10. 20 文化鑑賞会、劇団潮流による松本清張作「左の腕」を加古川市民会館にて上演。

- 11. 10 「共通一次試験」構想が具体化してきたので、父兄を対象に神大教授松田氏の講話を聞く。

昭和52年（1977）

- 4. 1 生徒急増期のため、学級数31、1学年の定員495名となる。
- 5. 18 身障者問題について、県教委小島参事を招いて、職員研修会を開く。
- 7. 19 社会奉仕活動の一環として、献血運動始まり、以後毎年実施。
- 9. 10 修学旅行・体育祭等の簡素化に向けて検討始まる。
- 12. 7 学校仕事の抜本的見直しのため、検討委員会を設ける。
- 12. 13 文化鑑賞会、関西学院大学グリーンクラブ演奏会。
- 12. 16 昭和54年実施予定の大学共通一次試験の試行試験実施。本校生も参加。

昭和53年（1978）

- 1. 9 加古川北高校開設準備室本校に設置。
- 3. 17 加古川北高校の入学試験、本校で実施。
- 7. 19 部落解放研究同好会、部に昇格。活発な活動開始。



S 49年頃野球部応援風景



S 50年修学旅行（開聞岳）

8. 2 全国高校総合文化祭に、本校邦楽部出演（大分県）。

10. 31 文化鑑賞会、古典芸能として能・狂言（隅田川・瓜盗人）上演。

10. この頃、同和HRで身障者問題の学習始まる。

この年より修学旅行の行先が九州より信州に変わる。

12. 18 昭和54年度より管理厚生部廃止、総務部・保健部に所管を移すことに決定。

昭和54年度（1979）

1. 13 大学共通一次試験実施され、本校生372名受験する。

3. 31 体育器具庫、管理倉庫完成。

5. 8 県同和教育指導室編集の、同和資料「高校生と同和問題」を全校生徒に貸与する。

6. 17 県総合体育大会で総合3位となる。県立高校ではトップの座を占める。

7. 28 旧体育館取りこわし、生徒小集會室完成。これによって旧中学時代の建造物が姿を消す。

旧中学時代の面影は生徒通用門にその住時の校門の姿を残す。

10. 18 文化鑑賞会、関西芸術座「奇蹟の

人」を上演。

10. 23 新学習指導要領に基く、新しいカリキュラムの検討始まる。

10. 31 横山光男事務長 逝去。

昭和55年（1980）

1. 23 特色ある学校づくりの一環として教育機器（視聴覚機器）導入される。

4. 18 生徒の交通事故頻発のため、県下公立高校生の運転免許証取得者に対して、学校に免許証を預託する事に決定。

9. 26 多様な生徒に対応できるような教育課程の改訂に備え、本校でも新教育課程編成のための検討委員会を設置。

10. 21 文化鑑賞会、オペレッタを上演。

昭和56年（1981）

1. 4 スキー教室始まる（鉢高原スキー場、二泊三日）。80名参加。

5. 18 伊藤幸夫教諭（生物）逝去。

10. 11 文化鑑賞会、古典芸能（能・狂言）を上演。

11. 16 藤本校長アメリカ、ワシントン州校長協会総会に招待され、訪米。

11. 27 身障者問題を学習するため、映画



合格発表

「典子は今」を鑑賞。

昭和57年（1982）

- 1. 3 水田重之教諭（国語）逝去。
- 4. 1 第1学年9学級となる。丙午生まれのため、全国的に生徒数減少。
- 4. 1 新教育過程の実施段階に入る。
- 7. 13 文化鑑賞会、演劇「あゝ青春高校野球」を関西芸術座が上演。
- 11. 19 藤本校長、文部大臣教育者表彰を受ける。

昭和58年（1983）

- 4. 1 藤本校長退職。竹一千城、県立網干高校長より第17代校長として着任。本年度入学生より1学級47名となる。
- 6. 18 県総合体育大会で男子総合4位、女子10位に入る。
- 7. 11 社会科教室にモニターテレビ4台設置。
- 10. 3 西播教育事務所次長兼学校教育課長桑村寛氏を招いて、同和研修会を開く。
- 10. 27 全校舎の窓枠の塗替え。
- 10. 28 文化鑑賞会、京都エフフォニカ管弦楽団の演奏を聞く。

12. 23 全国進学情報センター所長、丹羽建夫氏を招いて進路講演会を開く。

12. 27 全校舎の照明設備工事完了。

昭和59年（1984）

- 1. 1 尾崎千春教諭（国語）逝去。
- 3. 15 本館内部の全面塗装と前庭ロータリーの改装完了。
- 6. 7 創立60周年記念式典挙行
記念講演「後輩に望むこと」稲井好廣氏（中1） 記念彫塑「道標」除幕 東村正久作（中5）
- 8. 21 自転車置き場（清流館南）2棟新設
- 10. 12～15 2年修学旅行（高山、上高地、白樺湖方面）
- 11. 8 文化鑑賞会「古典落語」桂米朝、朝丸各氏
* 9月韓国全斗煥大統領初来日
11月新1万円札、5千円札、千円札発行

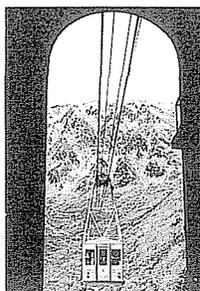
昭和60年（1985）

- 2. 25 第37回卒業式（407名）
- 3. 14 防球ネット他工事完成
- 3. 25 屋内消化栓設備及び防災設備改修工事完成
- 4. 22～23 1年オリエンテーション（県

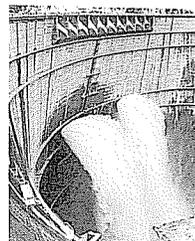


体育祭各団得点表

S
50
年
修
学
旅
行



黒部ロープウェー



黒部ダム

立嬉野台生涯教育センター)

- 6. 16 文化祭
- 9. 22 体育祭
- 10. 13~16 2年修学旅行(高山, 上高地, 黒部, 金沢方面)
- 12. 19 文化鑑賞会「奇跡の人」関西芸術座
 - * 3月, ソ連, ゴルバチョフ書記長を選出
 - 5月男女雇用機会均等法成立

昭和61年(1986)

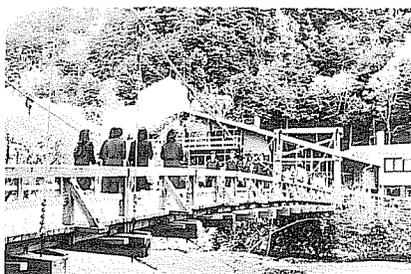
- 2. 25 第38回卒業式(517名)
- 3. 10 プール改修工事完成
- 3. 31 竹一干城校長退職
- 4. 1 福島浩之, 県立相生高校長より第18代校長として着任 普通科理数コース1学級(47名)設置
- 6. 15 文化祭
- 9. 23 体育祭
- 10. 11~14 2年修学旅行(高山, 上高地, 白樺湖方面)
- 12. 15 文化鑑賞会 映画「インドへの道」
 - * 4月ソ連チェルノブイリ原発事故発生
 - 9月社会党委員長に土井たか子就任(初の女性党首誕生)

昭和62年(1987)

- 2. 9~14 耐寒訓練(この年より「寒いこ」が「耐寒訓練」に変わり運動場での持久走になる)
- 2. 16 理数コース入学者選抜適性検査
- 2. 25 第39回卒業式(469名)
- 3. 10 相撲場取り壊し
- 3. 21 文化祭(この年より3月実施になる)
- 3. 31 書道教室増築(2階部分, 普通教室2)工事完成
- 4. 1 第1学年生徒募集定員12学級564名となる。33学級1,551名
- 4. 28 新入生歓迎行事(この年より歓迎遠足を取り止め校内行事になる)
- 6. 21 体育祭(この年より, 共通一次試験に備えて6月実施になる)
- 9. 25 文化鑑賞会 古典芸能「上原まりの平家物語」
- 10. 11~14 2年修学旅行(高山, 上高地, 白樺湖方面)
 - * 3月よりグループ分けを導入した国公立大入試制度スタート
 - 7月石原裕次郎死去(52才)
 - 10月利根川進氏ノーベル医学生理学賞



39回生 絹川学級のよせがき



修学旅行 上高地 河童橋

昭和63年（1988）

- 1. 13～25 西オーストラリア交換生受け入れ
- 2. 25 第40回卒業式（467名）
- 3. 21 文化祭
- 3. 28 普通教室3室新築工事完成
- 4. 1 35学級1,645名
- 6. 19 体育祭
- 9. 30 文化鑑賞会 演劇「もうひとつの教室－夜間中学－」関西芸術座
- 10. 2 加藤誠次教諭（社会科）逝去
- 10. 13～16 2年修学旅行（高山，上高地，蓼科方面）
* 6月リクルート疑惑発覚政治問題化
9月第24回ソウル五輪

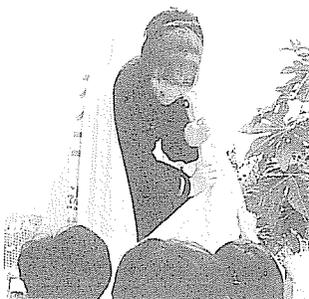
昭和64年平成元年（1989）

- 2. 25 第41回卒業式（517名）
- 3. 21 文化祭
- 3. 31 福島浩之校長退職
- 4. 1 田野勝彦，県立夢野台高校校長より第19代校長として着任
36学級1,692名
- 6. 18 体育祭
- 7. 17～18 球技大会
- 9. 14 文化鑑賞会「オペラ名曲鑑賞」関西二期会合唱団，神戸金管五重奏団

- 10. 11～14 2年修学旅行（高山，上高地，蓼科方面）
- 11. 12 普通教室棟窓枠サッシ及び外壁塗装工事完成
- 12. 18～20 球技大会（この年より2学期にも実施）
* 1. 7 昭和天皇崩御 平成と改元（8日）
2. 24 昭和天皇大葬 臨時休日
4月より消費税導入
6月美空ひばり死去（52才）

平成2年（1990）

- 1. 13～14 共通一次試験に代わり大学入試センター試験実施
- 1. 20～28 西オーストラリア高校生受け入れ
- 2. 28 第42回卒業式（558名）
- 3. 21 文化祭
- 4. 1 学区変更により明石・加印学区から分離し，加印学区となる
文部省指定運動部活動研究推進指定校になる
- 6. 17 体育祭
- 6. 21 映画鑑賞会「天と地と」
- 9. 27 同和教育講演会「今光っていたい」
－娘の遺してくれたもの－田中 蔚



S 61年避難訓練



体育祭騎馬戦

武庫川女子大学講師

10. 12～15 2年修学旅行（磐梯山・会津、日光方面）

11. 15 文化鑑賞会「落語」桂 べかこ、桂む雀氏その他

* 7月神戸高塚高校で校門圧死事件

10月東西両ドイツ統一

この年バブル景気崩壊

平成3年（1991）

2. 28 第43回卒業式（558名）

3. 21 文化祭

3. 31 田野勝彦校長退職

4. 1 磯重美，兵庫県教育委員会事務局参事兼高校教育課長，第20代校長として着任

第1学年学級定員45名 36学級1, 668名

6. 3 県総合体育大会男子総合準優勝

8. 30 普通教室棟床改修工事完成

9. 6 玄関前スロープ工事完成

10. 12～15 2年修学旅行（信州，黒部，金沢方面）

10. 14 第46回石川国体少年A走り幅跳びで3年内井亮7m37で優勝

11. 16 文化鑑賞会「野望の系譜」東京芸術座

* 1月多国籍軍イラン空爆 湾岸戦争開始

6月雲仙・普賢岳で大規模な火砕流発生

12月ソ連邦消滅

平成4年（1992）

2. 10 研究紀要創刊号発刊

2. 28 第44回卒業式（561名）

3. 26 普通教室棟廊下床改修工事完成

4. 1 第1学年学級定員40名 36学級1, 582名

7. 8 中庭花壇の植栽（いきいきハイスクール創成事業）

9. 12 第2土曜日休日制実施

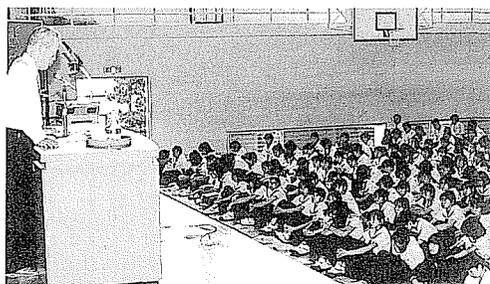
9. 22 文化鑑賞会「サウンド・ニュー」ビッグバンドジャズ楽団

10. 12～15 2年修学旅行（金沢，黒部，蓼科方面）

10. 19 「いきいきコンサート」（卒業生8名，賛助出演者1名）

11. 17 文部省指定運動部活動研究推進校研究発表会
研究紀要第2号発刊（文部省指定運動部活動研究指定校研究のまとめ）

11. 18 普通教室棟便所改修工事完成（各



H2年同和講演会



H5年書初展

階に男女便所を設ける)
 * 2月アルペールビル冬期五輪
 6月国連平和維持活動法案(PKO)
 成立
 7月バルセロナ五輪女子200m平
 泳ぎで中2の岩崎恭子金メダル
 (史上最年少)

7月北海道南西部沖でM7.8の大
 地震発生 奥尻島では津波・火災
 のため死者・行方不明者231名
 8月細川連立内閣が発足 38年間
 の自民政権に終止符 藤山一郎
 死去
 10月水稲稲作指数74 戦後最悪

平成5年(1993) _____

- 2. 10 研究紀要第3号発刊
- 2. 27 第45回卒業式(560名)
- 4. 1 36学級1,498名
校時変更(S.H.R.を6時限終了後
に設定)
- 6. 5 中庭花壇の植栽(いきいきハイ
スクール事業)
- 10. 5 文化鑑賞会,能「案達原」,狂言「柿
山伏」上田能楽堂
- 10. 13~16 2年修学旅行(十和田湖,田
沢湖方面)
- 11. 29 図書室窓枠サッシ改修工事完成
- 11. 6 吹奏楽部員による養護老人ホーム
「永楽園」での訪問演奏(いきい
きハイスクール事業)
- 11. 30 普通教室棟南側,運動場東側植樹
(いきいきハイスクール事業)
- 12. 14 本館棟屋上防水改修工事完成
- 12. 17 予餞会「美女と野獣」鑑賞
- 12. 20 図書室空調設備工事完成
* 6月皇太子ご結婚 休日

平成6年(1994) _____

- 1. 4~6 1年スキー教室(ニューオジ
ロスキー場)
- 1. 28 生徒会長選挙立ち会い演説会
- 1. 31~2. 5 耐寒訓練
- 2. 1 学校諸規定集改訂
- 2. 10 研究紀要第4号発刊
- 2. 28 第46回卒業式(538名)
- 3. 20 文化祭
- 3. 31 磯重美校長退職
- 4. 1 竹内暉雄,東播磨教育事務所長よ
り第21代校長として着任
36学級1438名(全学級40名)第1
学年より新教育課程実施(総単位
数が80単位以上になり,これまで
の履修即修得が弾力的に運用され
る 男子家庭科必修)
- 6. 7 創立70周年記念式典挙行 記念講
演「学問と人生」魚住武司氏(高9
回)記念モニュメント「曙光(円環
の門)」除幕中川猛氏作(高21回)

育友会小史

昭和22年4月 父母と先生の会結成。主として旅費補助を行った。当時の記録によると、谷沢教諭明石出張旅費43円、会員香料50円等がある。

昭和23年7月19日 東西両高校への交流再編成のため父母の会は解消。加古川東高校育友会編成、総会を開き、会則決定、役員選出。会長中川寅次郎、会費月額150円。

昭和24年5月11日 会長中川寅次郎
藤原留治教諭の尽力により、昭和24年～33年の10年間、東高名物となった大阪文楽座をまねいた。桐竹紋十郎、豊竹若太夫、野沢喜右衛門等、人間国宝となり、いずれも亡くなられた方々が来演、空前の盛況であった。収益は各科、特に家庭科の備品の充実にあてた。

昭和24年10月28日 開校25周年記念祝典を行った。総費用196,258円。記念音楽会に笹田和子（ソプラノ）、伊達三郎（チェロ）、神沢哲郎（ピアノ）来演。スクールくじ、50万円、本校に割当て依頼あり、完全に消化した。

昭和25年5月 会長 平郡清

昭和26年6月 会長 平郡清

昭和27年5月 会長 竹中光治
育友会費 150円、生徒会費80円、図書費35円、体保費10円、学習費25円、新聞費10円、同窓会費20円、計330円。

昭和28年5月 会長 竹中光治

昭和29年5月 会長 竹中光治

11月 体育後援会発足、会費月額30円。

昭和30年5月 会長 竹中光治

昭和31年5月 会長 大西為助

現在の球技場にあたる部分の校地拡張のため、新入会員より施設充実費1,500円徴収。

昭和32年5月 会長 大西為助

昭和33年5月 会長 大西為助

施設充実費新入会員より2,500円、育友会費月額200円。

昭和34年5月 会長 大西為助

運動場拡張決定 校地3,000坪。

昭和35年5月 会長 大西為助

昭和36年5月 会長 木村泰

会費200円、学習費40円、図書費50円、体保費10円、体育後援会費30円、施設充実費、新入会員より1,500円、校舎改善費、新入会員より1,000円。

昭和37年5月 会長 木村泰

昭和38年5月 会長 中崎邦夫

昭和39年5月 会長 中崎邦夫

開校40周年記念式典、記念誌発行等、総費637,625円。

昭和40年5月 会長 中崎邦夫

昭和41年5月 会長 中崎邦夫

昭和42年5月 会長 酒見真暁

校地東側の土地買収を進める事に決定。

昭和43年 5月 会長 酒見真暁
学校設備充実資金徴収を廃止する。

昭和44年 5月 会長 丸山重夫
会費 月額300円, 生徒会費150円, 野外活動費50円, 育友会入会費2,000円, クラブ活動費30円。

昭和43年 3月 父兄負担の軽減について全国的な運動が起こり, 同時に大学紛争が高校にも拡がる様相をみせてきた。

昭和45年 5月 会長 松野雄次

昭和46年 4月 会長 稲田 勇
公費負担に当たる分を切捨てる事により, 会費月額100円とし, 図書費, 学習費, クラブ活動費, 入金金・設備充実費・野外活動費等一切廃止した46年度事業として, 会員名簿, 進路の手引の発行を育友会に移管, 地区懇談会, 芸術鑑賞会を行った。地区懇談会は, 開催地19地区, 出席者は全会員の80%に達した。
東側の校地買収が4年がかりで終る。

昭和47年 4月 会長 田中繁雄
同窓会館建設にあたり, 清流会と共に活動した。

昭和48年 4月 会長 大村武雄
会費 月額150円に値上げ。

昭和49年 4月 会長 竹内 弘
6月 創立50周年記念式典挙行
記念講演 「世界の中の日本の青年」関西学院大学教授 田中国夫氏
道場開き 清流館2階の格技

場, 慰霊祭 平野”龍泉寺“で旧職員, 卒業生の遺族多数参列。

昭和50年 4月 会長 前島 博
会費 年額3,000円とする。

昭和51年 4月 会長 前島 博
9月 水害被災会員を見舞う。

昭和52年 4月 会長 坪内 敬

昭和53年 4月 会長 増井 力

昭和54年 4月 会長 大西迅平

5月 育友会功労者表彰

昭和55年 4月 会長 増井 力

9月 座右銘発行

9月 県立山崎高校育友会と協議会

10月 講演会 「青年期の心理」
神戸大学教授 関 岫一氏

昭和56年 4月 会長 籠谷幸夫

5月 育友会功労者表彰

7月 育友会会報創刊号発行

11月 研修旅行 閑谷学校他見学

12月 講演会 「心とからだ」

加古川市民病院長
赤沢淳平氏

昭和57年 1月 育友会会報2号発行

4月 会長 釜谷 研造
育友会規約一部改正

5月 育友会功労者表彰

7月 育友会会報3号発行

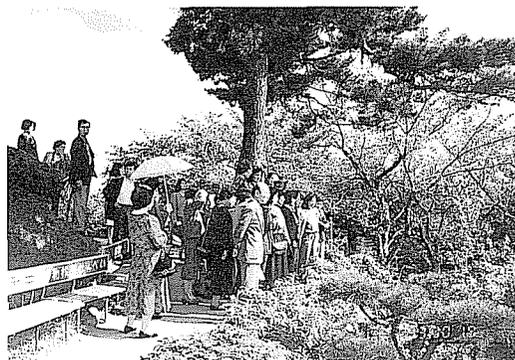
10月 講演会 「体力づくりの基礎」
神鋼病院 松本越生氏

11月 研修旅行 白鹿酒造, 民族学

	博物館見学	10月	研修旅行（キューピーマヨネーズ、立杭焼）
昭和58年2月	育友会会報4号発行		
4月	会長 西海 郁雄	昭和62年2月	育友会会報12号発行
5月	育友会功労者表彰	5月	会長 西川隆雄
7月	育友会会報5号発行	7月	育友会会報13号発行
8月	前育友会会長釜谷研造，高等学校PTA活動振興貢献者として文部大臣表彰を受ける。	10月	研修旅行（瀬戸大橋，竹久夢二郷土美術館）
11月	研修旅行 法隆寺，新薬師寺見学	昭和63年2月	育友会会報14号発行
12月	講演会 「60年入試の対策」 河合塾 丹羽健夫氏	5月	会長 十倉茂明
昭和59年2月	育友会会報6号発行	6月	研修旅行（ホロンピア，88）
5月	会長 釜谷研造	7月	育友会会報15号発行
6月	創立60周年記念式典挙行 記念彫塑 東村正久氏 記念講演 稲井好廣氏 記念誌発行	平成元年2月	育友会会報16号発行
7月	育友会会報7号発行	5月	会長 山崎光夫
11月	研修旅行（田崎真珠，松下記念館）	7月	育友会会報17号発行
昭和60年2月	育友会会報8号発行	10月	研修旅行（石山寺，琵琶湖民族学博物館）
5月	会長 釜谷研造	平成2年2月	育友会会報18号発行
7月	育友会会報9号発行	5月	会長 今津秀人
11月	研修旅行（宇治平等院，万福寺方面）	7月	育友会会報19号発行
昭和61年2月	育友会会報10号発行	9月	同和教育講演会 田中蔚先生
5月	会長 杉原 延享	10月	研修旅行（大学見学，ルミナス神戸，須磨水族園）
7月	育友会会報11号発行	平成3年2月	育友会会報20号発行
7月	県立加古川東高校育友会OB会「東友会」発足	5月	会長 今津秀人
		7月	育友会会報21号発行
		10月	研修旅行（友禅会館，立命館大学，金閣寺，北野天満宮）
		平成4年2月	育友会会報22号発行
		5月	会長 原 享也
		7月	登校指導 育友会本部役員

生徒指導委員会，先生

- 7月 育友会会報23号発行
- 9月 登校指導
- 11月 研修旅行（RSKバラ園，高松最上稲荷，吉備津神社，岡山大学）
- 12月 登校指導
- 平成5年2月 登校指導
- 2月 育友会会報24号発行
- 5月 会長 大庫俊介
- 7月 登校指導
- 7月 育友会会報25号発行
- 10月 研修旅行（天の橋立，宮津エネルギー研究所）
- 7月より生徒指導委員会が「安全な登下校」啓蒙文発行
- 毎年，進路講演会（年二回）文化鑑賞会，献血を開催
- 平成6年2月 育友会報26号発行
- 5月 会長 大庫俊介
- 6月 創立70周年記念式典挙行
モニュメント「曙光」除幕式
「制作者中川猛氏」
記念式典
記念講演「学問と人生」
東京大学農学部教授
魚住武司さん



育友会研修旅行

清流会略史

昭和4年3月4日 第1回卒業生によって兵庫県立加古川中学校同窓会則を制定。

昭和4年8月第1日曜日 同窓会第1回総会を旧加古川中学校講堂で開催。当時の岩村寅之助校長を会長，三浦林平教頭を副会長として同窓会が発足した。

当日は第1回卒業生のうち約50名が出席し，他に第2回生は5年生として在学中であったが，4年修了で旧制高校に進まれた槽谷正一氏が出席された。広い講堂に50数名の出席者でラムネとアンパンが出されたガラソとしたものであったという。

当時の同窓会費は在校中に月額10銭を授業料とともに納入。4年終了で上級学校に進学した準卒業生には，1年分1円20銭を追加徴収したそうである。

以来，母校内に同窓会事務所を置き，代々の校長・教頭が同窓会長・副会長となり，第1回卒業生の長谷川氏等や母校職員となっている同窓生が世話役となって運営された。昭和22年に初めて中1回の田中逸次氏が卒業生として会長となったのである。

なお会員相互の連絡機関として，最初は母校校友会誌の末尾に卒業生名簿を附し会員通信等を掲載していたが，昭和11年より会員数1,000名を超えたのを機会に校友会誌から離れて同窓会誌として独立し，同窓会員相互の連絡親睦に大いに役割を果たしたのである。

その後太平洋戦争の激化につれて用紙不足となり，昭和16年に姿を消したまま終戦を迎えることとなった。

昭和6年 同窓会よりラッパ鼓隊の用具275円
拠出。

昭和9年4月 創立10周年記念。御真影奉安殿建設のため同窓会より2,000円拠出。第1回卒業生花井秀次氏より校旗掲揚柱寄贈。

昭和16年頃 同窓会会計も戦時色を帯びて特別時局資金会計を設置し，同窓生の戦死者の供花料・香料・弔問費等を計上している。また同窓戦死者の慰霊祭を実施し講堂に肖像を掲げる。

同窓会より母校永年勤続者に感謝状・記念品を贈る。

昭和22年頃 同窓会役員会で戦後の新時代にふさわしい同窓会をとということになり，会則が変更され従来の母校校長の会長制度を廃止，同窓生の中から会長が選出されることになった。また同窓会名も新しく清流会の名称が採用されることとなった。

昭和22年8月 田中逸次氏，会長に就任。

昭和23年4月 兵庫県立加古川高等女学校と折半交流。

昭和24年6月 創立25周年，中13回神沢哲郎氏講演。

昭和24年8月 小林茂氏，会長に就任。

昭和26年8月 北村明雄氏，会長に就任。

昭和28年8月 松本亮太郎氏，会長に就任。

昭和30年8月 酒見真暁氏，会長に就任。

昭和32年8月 沢田貞雄氏，会長に就任。

昭和34年8月 穴田等氏，会長に就任。

昭和36年8月 藤本寅二氏，会長に就任。

昭和39年6月 創立40周年，中15回田中国夫氏講演。母校へピアノ寄贈。

昭和44年8月 米谷修二氏，会長に就任。

昭和46年8月 穴田等氏，会長に就任。

昭和49年6月 創立50周年記念，中15回田中国夫氏講演。清流館完成。

昭和58年 8月 長谷川末吉氏，会長に就任。穴田等氏，名誉会長となる。

昭和59年 6月 創立60周年記念，中1回稲井好広氏講演 記念彫塑「道標」中5回東村正久氏制作。

昭和62年 8月 年会費徴収開始

昭和63年 8月 総会会場 プラザホテルへ。
アトラクションとして福引が登場。

平成元年 1月 新年懇親会場 プラザホテルへ。

平成2年 7月 清流会会員名簿発刊

平成3年 2月 会員総数2万人を突破。2月末
現在20297名

平成6年 6月 創立70周年記念 高9回魚住武司氏講演 記念彫塑「曙光一円環の門」高21回中川猛氏制作。

部・同好会この10年

運 動 部

柔道部

昭和56年より部員数が減少し、各学年2～4名の構成であったが、昭和58年、荒井中学から前年度全国中学大会優勝のメンバー吉政和彦・梅本敬二らが入部し、昭和59年度キャプテン大崎正雄を中心に活動が活発になった。昭和60年には、部員数も増加し、各種大会での戦績も上昇しはじめた。また昭和60年には女子部員も1名ではあるが入部し、男子部員に混って活動を始め、本校女子柔道部員の一期生が誕生した。その後昭和61年より、学区内中学校の柔道熱が盛んになり、本校にも毎年幾人かの経験者が入学してくるようになった。この頃の主な戦績としては、昭和59年度近畿高校新人柔道大会において、男子団体ベスト16に入賞、翌年60年には、県総合体育大会男子個人-71kg級で吉政和彦が優勝、石川県で開催された全国高校総合体育大会に出場続く10月に鳥取県で開催された「わかとり国体」に兵庫県代表として出場、ベスト8に入賞した。また、吉政和彦は、全日本新人体重別大会近畿ブロック大会においてベスト8に入賞した。昭和61年には、女子部員の活躍も目立ちはじめ、北川直子が女子個人-52kg級で近畿高校女子体重別大会に出場、翌年、62年度県新人柔道大会では、-52kg級で北川直子、-62kg級で野原実紀がそれぞれ優勝、-

56kg級の香山真由美も準優勝と、出場した3名全員がすばらしい戦績を残したが、残念なことにこの時代には女子団体試合・全国大会も実施されておらず、近畿大会までであった。

昭和62年には、第1回全日本女子団体柔道大会が岡山県で開催され、北川直子が兵庫の先鋒として出場しベスト8となった。

その後、現在まで県内の高校大会では、男子団体ベスト8、東播2～3位の戦績が続いている。また、平成4年度県高校総合体育大会で、男子個人-60kg級で藤井一郎が優勝、宮崎県で開催された全国高校総合体育大会に出場したのは記憶にあたらしいことである。

現在、部員数も男女合せて20余名となり、日々の稽古に熱心に取り組んでいる。

昭和59年度

県高校新人大会 男子団体5位

近畿大会 男子団体ベスト16

昭和60年度

県高校総合体育大会 男子団体5位 男子個人-71kg級吉政和彦1位

県民大会 男子個人-71kg級吉政和彦1位

男子個人-86kg級小山智数5位

全国高校総合体育大会 男子個人-71kg級吉政和彦出場

国民体育大会 吉政和彦ベスト8

全日本ジュニア-体重別大会近畿予選-71kg級吉政和彦ベスト8

昭和61年度

県高校総合体育大会 男子団体 5 位

県高校新人大会 男子団体 5 位 女子個人
個人-52kg級北川直子 1 位 同-61kg級野
原実紀 1 位 同-56kg級香山真由美 2 位
県民大会 男子個人-55kg級松村英明 2 位
同-86kg級小山智数 5 位

近畿高校女子体重別大会 北川直子出場

昭和62年度

県高校総合体育大会 男子団体 5 位 男子
個人-71kg級近藤孝一 3 位 女子個人-
56kg級香山真由美 3 位
県民大会 男子個人-71kg級近藤孝一 3
位

同-86kg級垣内紀彦 3 位 女子個人-52
kg級北川直子 1 位

近畿女子体重別大会 女子個人-56kg級香
山真由美出場

昭和63年度

県高校総合体育大会 女子個人-56kg級香
山真由美 2 位 男子個人-86kg級小山幸
宏 5 位

県高校新人大会 男子団体 5 位 男子個
人 -86kg級小山幸宏 5 位

平成元年度

県高校総合体育大会 男子団体 3 位 男子
個人-60kg級芝本晴哉 2 位 同-86kg級
小山幸宏 5 位 同-86kg級山根正之 5 位

平成2年度

県高校新人大会 男子団体 5 位 男子個
人-71kg級片山茂幸 2 位 同-86kg級青
柳喜臣 3 位

県高校選手権大会 男子団体 5 位

平成3年度

県高校総合体育大会 男子団体 5 位 男子
個人-60kg級藤井一郎 3 位 同-60kg級
山口貴洋 3 位 同-71kg級片山茂幸 3 位
同-86kg級青柳喜臣 3 位

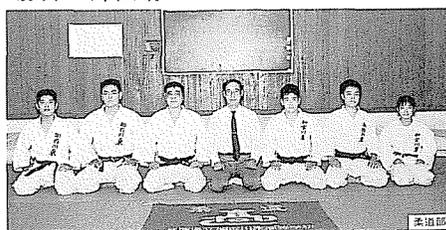
県高校選手権大会 男子団体 5 位

平成4年度

県高校総合体育大会 男子個人-60kg級藤
井一郎 1 位

県高校新人大会 男子個人-95kg級藤原寿
友 5 位 女子個人-48kg級桑沢美帆 5 位

県民大会 男子個人-60kg級藤井一郎 3 位
全国高校総合体育大会 男子個人-60kg級
藤井一郎出場



剣道部

昭和59年度

県総体 男子 3 位 女子 5 位

県新人戦 男子 5 位 女子 3 位

昭和61年度

県総体 男子 5 位

県新人戦 男子 5 位

昭和62年度

県総体 男子 5 位 女子 3 位

県新人戦 女子 5 位

新人戦近畿大会 女子 3 位

昭和63年度

県総体 女子 5 位

県新人戦 男子 5 位 女子 1 位

新人戦近畿大会 女子3位
平成元年度
県総体 男子5位 女子2位
県新人戦 男子5位
平成2年度
県総体 男子2位
県新人戦 男子5位
平成3年度
県民大会 男子3位
平成4年度
県民大会 男子5位
県新人戦 女子5位
平成5年度
県総体 女子5位
県民大会 女子2位

陸上競技部

現在部員数は82名で、練習は基本的には各専門パートに分かれて行すが、「基礎・基本を大事にする」をモットーに、ウェイトトレーニングや走り込み練習など、パートを問わず積極的に取り入れています。時間的・物理的にいろいろな制約を受けることが多いので「密度の濃い練習」を心がけています。そのためには練習内容の精選と充実、部員自身の意識の向上等が必要でこれらを部全体の目標にしています。

この10年をふりかえると、内井亮の国体優勝を筆頭として短距離パートは素晴らしい成績をおさめており、また長距離パートでも8年ぶりに県駅伝に出場を果たすなど伝統のつみ重ねに日々努力しております。

昭和59年度

三段跳 水谷裕司 県大会優勝 近畿大会優勝 全国大会3位

五種競技 加藤直樹 県大会2位

昭和60年度

五種競技 加藤直樹 県大会優勝

やり投 墨谷啓 県大会3位

昭和61年度

2年男子 三段跳 上原誠子 県新人戦3位

1年男子 4×100mリレー 1年男子3位

昭和62年度

400m 瀬戸雅樹 県総体6位

1年女子走高跳 石川昌子 県新人戦3位

平成元年度

1年男子400m 松本徹也 県新人戦3位

1年男子 4×100m R 県新人戦 1年男子1位 (横山貴弘・高田量司・内井亮・大谷拓也)

1年男子走幅跳 内井亮 県新人戦6位

2年男子棒高跳 岡田博行 県新人戦4位

平成2年度

2年男子400m 松本徹也 県新人戦2位

2年男子 4×100m R 県新人戦3位 (横山貴弘・内井亮・大谷拓也・高田量司)

1年男子800m 松山将朝 県新人戦3位

平成3年度

200m 内井亮 県総体4位

走幅跳 内井亮 県総体優勝



4×100m R 県総体3位(高田量司・寺尾
旬矢・大谷拓也・内井亮)

走幅跳 内井亮 近畿大会5位

4×100m R 近畿大会6位 共に全国大
会に出場

1年男子100m 寺尾旬矢 県新人戦優勝

1年男子200m 寺尾旬矢 県新人戦優勝

1年4×100m R 県新人戦3位(萩原俊
輔・平野敦・藤原博司・寺尾旬矢)

1年女子走幅跳 祐谷瑞穂 県新人戦3位

1年100m 寺尾旬矢 新人戦近畿大会優
勝

1年200m 寺尾旬矢 新人戦近畿大会2
位

1年女子走幅跳 祐谷瑞穂 新人戦近畿大
会5位

少年A走幅跳 内井亮 国民体育大会優勝

少年B100m 寺尾旬矢 国民体育大会出
場

平成4年度

男子100m 寺尾旬矢 県総体6位

男子200m 寺尾旬矢 県総体6位

女子走幅跳 祐谷瑞穂 県総体4位

1年男子走幅跳 和田竜一 県新人戦2位

2年男子4×400m R 県新人戦3位(松山
大次郎・平野敦・藤原博司・寺尾旬矢)

2年男子三段跳 中村貴之 県新人戦2位

1年男子走幅跳 和田竜一 新人戦近畿大
会4位

平成5年度

男子走幅跳 和田竜一 県総体6位

三段跳 中村貴之 県総体6位

女子走幅跳 前田裕子 県総体6位

男子走幅跳 和田竜一 近畿大会6位(全
国大会出場)

2年男子走幅跳 和田竜一 県新人戦2位

1年男子やり投 西野元裕 県新人戦2位

2年男子走幅跳 和田竜一 新人戦近畿大
会2位

バレーボール部 男子

昭和63年度

県総合体育大会 5位 近畿大会出場

優秀選手賞 藤崎健一

県新人大会 3位

優秀選手賞 山本勉之
浅原邦夫

西近畿大会 3位

平成元年度

近畿大会出場

県新人大会 5位

優秀選手賞 今西康介

全国選抜大会県予選 5位

平成2年度

県総合体育大会 5位

優秀選手賞 佐々木潤

近畿大会出場

県新人大会 5位

優秀選手賞 松下隆志

全国選抜大会県予選 5位

平成3年度

県総合体育大会 4位



優秀選手賞 松下隆志
松井剛志

この大会4回戦の対市川
高校戦では、第3セット
2-14から16-14とする
大逆転劇を演じた。

近畿大会出場

バレーボール部 女子

毎年バレーボールの好きな者が入部して実に仲よくきっちりと活動している。成績の方は県大会ベスト32どまりであるが、すこぶる元気よく黄色い声を体育館にひびかせている。

サッカー部

サッカー人気にともない部員数はますます増える傾向にある。毎年新入部員は30~40名3学年で約100名の部員の練習場所の確保や試合引率などは大変である。

より自主的な活動で強いチームを目指していることはここ数年変わらない。今も最も難しい課題である。

平成3年度県総合体育大会で2位となり以後県大会優勝がチームの目標となっている。

成績

昭和63年度

県新人大会 3位

平成元年度

県総合体育大会 3位

近畿大会出場



平成2年度

県新人大会 5位

平成3年度

県総合体育大会 2位

近畿大会出場

野球部

部活動を楽しもうとする生徒が増えるにしたがい、例年40~50名の大世帯で、狭いグラウンドを効果的に使用し活動しています。また勉学も考慮しなければならないので、練習も短時間で切り上げ力をつけようと努力しています。

昭和63年度

全国高校野球兵庫大会 ベスト8

平成5年度

全国高校野球兵庫大会 ベスト16

春季高校野球兵庫大会 ベスト8

バドミントン部

技術面の指導をする顧問のいない、生徒の自主性に任せたのがバドミントン部。初めはそのような部活動にとまどい迷う。その後、自主的活動の本当の難しさ、厳しさ、そして楽しさを感じとった部員だけが技術的にも上手になり、人間的にも成長して将来に夢をもち羽ばたいていったのが我がバドミントン部。

昭和56年度

新人戦近畿大会 男子ダブルス出場（長谷川・遠藤組）

昭和57年度

県高校総合体育大会 男子団体3位

昭和58年度

県高校総合体育大会 男子団体 2 位 男子
 ダブルス 2 位 (河野・稗田組) 全国大会
 出場 男子ダブルス 3 位 (松本・広岡組)
 県新人大会 男子団体 4 位
 昭和62年度
 県高校総合体育大会 男子ダブルス 5 位
 (谷郷・伊藤組)
 昭和63年度
 新人戦近畿大会 男子ダブルス出場 (持
 田・藤田組)
 平成元年度
 県高校総合体育大会 男子団体 5 位 男子
 シングルス 5 位 (持田) 男子ダブルス
 5 位 (持田・藤田組)
 県新人大会 男子団体 5 位 男子シング
 ルス 5 位 (島崎) 近畿大会出場
 平成 2 年度
 県高校総合体育大会 男子団体 5 位 男子
 ダブルス 3 位 (島崎・片山組)
 県新人大会 男子団体優勝 男子シング
 ルス 2 位 (島崎) 近畿大会出場 男子シ
 ングルス 3 位 (片山) 近畿大会出場 男子
 ダブルス 3 位 (島崎・片山組) 近畿大会
 出場
 平成 3 年度
 県高校総合体育大会 男子団体優勝 全国
 大会出場 (島崎・片山・北村・松本・原・
 岡本・植田・村上) 男子シングルス優
 勝 (島崎) 全国大会出場 男子シング
 ルス準優勝 (片山) 全国大会出場 男子ダ
 ブルス優勝 (島崎・片山組) 全国大会出
 場 女子団体 5 位

ソフトテニス部 男子

毎年各学年20名前後と多くの部員をかかえ、
 コート数 2 面という狭い所で工夫しながら一
 生懸命練習に打ち込んでいる。

成績

昭和62年度

県新人大会 団体戦 3 位

個人戦 (岩松・三村) 組 ベ
 スト 8

近畿インドア大会 個人戦 (岩松・三村)
 組 ベスト 8

昭和63年度

県選手権大会 団体戦 ベスト 8

個人戦 (一谷・長谷川) 組
 ベスト 8

近畿選手権大会 団体戦 2 回戦敗退

個人戦 (一谷・長谷川)
 組 2 回戦敗退 (岩松・
 三村) 組 3 回戦敗退

全国高校総合体育大会・軟式庭球選手権大
 会 個人戦 (一谷洋彰・長谷川博史) 組
 1 回戦敗退

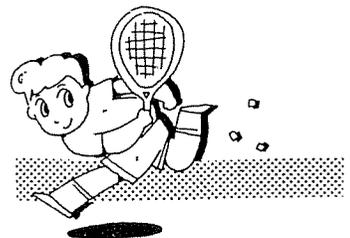
県新人大会 団体戦 3 位

平成元年度

県選手権大会 個人戦 (富山・宇野) 組 3
 位

近畿選手権大会 個人戦 (富山・宇野) 組
 2 回戦敗退

全国高校総合体育大会・軟式庭球選手権大



会 個人戦（富山圭一・宇野朋幸）組 5回
戦敗退（ベスト32）

県民大会 個人戦（富山・宇野）組 5位
平成2年度

県選手権大会 個人戦（北谷・近藤）組 3
位

近畿選手権大会 個人戦（北谷・近藤）組
ベスト8（鳥谷・沼田）
組 2回戦敗退

全国高校総合体育大会・軟式庭球選手権大
会 個人戦（北谷誠・近藤一成）組 1回
戦敗退

平成3年度

県新人大会 団体戦 3位

平成4年度

県新人大会 団体戦 ベスト8
個人戦（長谷川・岡本）組 3
位

県選抜インドア大会 個人戦（長谷川・岡
本）組 2位

近畿インドア大会 個人戦（長谷川・岡本）
組 2回戦敗退

平成5年度

県選手権大会 団体戦 ベスト8

近畿選手権大会 団体戦 2回戦敗退

ソフトテニス部 女子

成績

昭和58年度

県選手権大会 個人戦 ベスト8 全国大
会出場

昭和59年度

県選手権大会 団体戦 ベスト6

個人戦 3位（中谷・神谷）
組

昭和63年度

県選手権大会 団体戦 5位

平成元年度

県新人大会 団体戦 3位

バスケットボール部

昭和56年度

県総合体育大会 男子 第3位

昭和57年度

高校選抜優勝大会 男子 第7位

昭和58年度

高校選抜優勝大会 男子 第8位

県総合体育大会 女子 ベスト8

昭和59年度

県総合体育大会 男子 ベスト8

昭和60年度

高校選抜優勝大会 男子 第7位

県総合体育大会 男子 第4位

水泳部

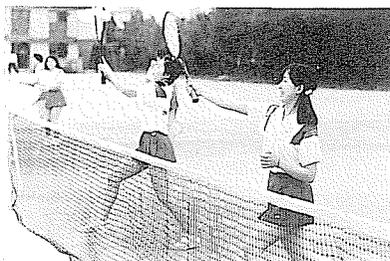
昭和59年度

県ジュニア大会 男子200m平泳ぎ 3位
堤広行

県総合体育大会 男子200m平泳ぎ 7位
堤広行

男子100m平泳ぎ 7位

堤広行



昭和61年度

県ジュニア大会 女子200m自由型 2位
喜多恵子

昭和62年度

県ジュニア大会 女子100m平泳ぎ 6位
高橋文子

男子100m自由型 3位
立石和幸

男子200m背泳ぎ 1位
小東和也

県総合体育大会 男子100m背泳ぎ 2位
小東和也 近畿大会出場

男子200m背泳ぎ 2位
小東和也 近畿大会出場

近畿大会 男子200m背泳ぎ 4位
小東和也

国体予選 少年B 200m背泳ぎ 1位
小東和也 国体出場

国民体育大会 少年B 200m背泳ぎ 6位
小東和也

平成5年度

県ジュニア大会 男子200m平泳ぎ 1位
安田篤史

県総合体育大会 男子200m平泳ぎ 7位
安田篤史 近畿大会出場

卓球部

ここしばらく“ねくら”なスポーツのイメージがあり、人気がなくなったのか、部員不足に泣かされている。

そんな中で、東播地区のレベルダウン？もあり、県大会への出場は果たしてきたが、県大会では2回戦止まり。近年で活躍が目立つ

のは、女子で

平成元年度、平成2年度

県大会ベスト8 近畿大会出場（藤井・松園組）

県大会ベスト16 近畿大会出場（松園・香田組）

ソフトボール部

昭和26年第3回全日本予選会（のちの県総合体育大会）で堂々優勝するという輝かしい成績を残した伝統あるソフトボール部であるが、10年前までは低迷の時代を続けていた。東播地区予選においても初戦コールド負けという苦汁をなめつつけていた。

しかし昭和60年あたりからコールド負けを返上して翌61年には東播新人戦でベスト4、県大会ベスト16を維持するまでに成長した。とりわけ平成2年には東播準優勝、県選抜大会9位と県内でもその実力を認められるに至った。44回生山下美葉投手の活躍が特に光る。平成5年現在、部員不足で再び苦しい状況にあるが、「東播ベスト4、県大会出場」を目標として楽しく練習に励んでいる。



相撲部

この10年、各運動部が華々しい活躍をする中で、ひとり相撲部は部員がいなくなり休部のやむなきに至った。生徒数は増える一方グラウンドはますます狭く、周囲に高いネットを張りめぐらしてできるかぎり広く使うこととなり、ついに昭和62年土俵も無くなったのである。栄光の相撲部を想う時痛恨のきわみというほかない。

この度、中学19・20回生富士原喩史氏より相撲部創設当時のことについてご教示を得たのでそのままここに紹介し、相撲部復活の日の早からんことを祈りたい。

昭和21年

5月26日 第1回兵庫県中等学校相撲大会
(於関学) 団体の部 準優勝

先鋒 富士原喩史 中堅 平本
修一 大将 宮脇久幸

個人の部 優勝 宮脇久幸

6月9日 第1回近畿中等学校選抜相撲大会
(於藤井寺) 団体の部 準優勝

先鋒 富士原喩史 中堅 平本
修一 大将 宮脇久幸

相撲部のないまま全国大会出場が決定した。

10月初旬 相撲部を創設

10月4日 第1回兵庫県総合体育大会相撲競
技(於西宮) 中等学校の部 団体
優勝 先鋒 富士原喩史 中堅

入江多喜男 大将 宮脇久幸

10月13・14日 第24回全国中等学校相撲大会
(於中百舌鳥) 優秀16校に選抜さ
れる。 先鋒 宮脇久幸 中堅

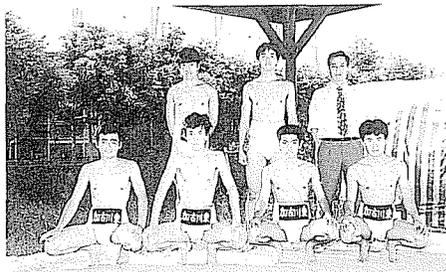
富士原喩史 大将 平本修一

11月1日 第1回国民体育大会相撲競技(於
樞原) 中等学校の部県代表として

宮脇久幸 富士原喩史出場

11月3日 運動会復活する。

12月8日 全国大会出場記念土俵開式挙行



宮川徳一先生のお声がかかりで個人的指名によって4、5人で稽古してきたのが、全国大会に出場することとなった。敗戦直後の暗いみじめな世相の中でこのことは校内外に明るいニュースを提供することとなった。全国大会への県代表は団体としては開校以来初めてであると、青山校長も大会には宮川先生とともに泊りこんでお世話を下さった。



応援団と団旗

文化 部

合唱部

部員数は毎年20名弱と少なく、いろいろくふうして部員集めの努力しているがなかなか増えない。このため、大きな編成の曲が出来ない。合唱曲として迫りに欠ける。文化祭にマイク無しで合唱が出来ない。よって小オペラ(手古奈)、ミュージカル(サウンドオブミュージック、キャッツ)独唱、重唱等を行い急場を凌いでいる。

とっておきの話としては、合唱部活動10年の集大成として、平成5年8月に加古川東高校合唱部卒業生の合唱団を結成し10月3日に第1回の練習会を行った。それぞれ大学生、会社員、店員、教員、花嫁修業中と様々な人生を送っているが、高校時代に出来なかった大人数の、豊かで本校卒業生独特の特徴ある歌声を目指し、息長く歌い続けられる合唱団に育てたい。合唱団の名前は多くの候補の中より、合唱団「^{しのめ}東雲」と命名した。

受賞歴

昭和60年

第52回NHK学校音楽コンクール

兵庫県大会(女声) 教育委員会賞

昭和61年

第53回NHK学校音楽コンクール

兵庫県大会決勝出場(女声) 銅賞



昭和62年

第54回NHK学校音楽コンクール

兵庫県大会(女声) 教育委員会賞

兵庫県独唱独奏コンクール

牟田口由美(2年) 第2位

独唱コンクール西日本大会兵庫県代表

牟田口由美(2年) 優良賞

昭和63年

第55回NHK学校音楽コンクール

兵庫県大会(女声) 教育委員会賞

全日本合唱コンクール

兵庫県大会(女声) 金賞

全日本合唱コンクール

関西大会(女声) 銀賞

兵庫県独唱独奏コンクール

牟田口由美(3年) 第1位

独唱コンクール西日本大会兵庫県代表

牟田口由美(3年) 優秀賞

平成元年

第56回NHK学校音楽コンクール

兵庫大会(女声) 教育委員会賞

平成2年

全日本合唱コンクール

兵庫県大会(女声) 銀賞

平成3年

全日本合唱コンクール

兵庫県大会(女声) 金賞

全日本合唱コンクール

関西大会(女声) 銅賞

平成4年

全日本合唱コンクール

兵庫県大会(混声) 金賞

全日本合唱コンクール

関西大会（混声） 銅賞
平成5年
全日本合唱コンクール
兵庫県大会（混声） 銅賞

吹奏楽部

毎年おおぜいの1年生が入部して大世帯の活発な部です。毎年吹奏楽コンクール、春、夏の吹奏楽祭、秋の兵庫県総合文化祭など多くの行事に参加しております。今後もいっそう練習に励み、将来定期演奏会ができるようがんばります。

吹奏楽コンクール成績
平成元年
兵庫大会（尼崎アルカイクホール）銅賞
課題曲A 風と炎の踊り
自由曲 バレエ音楽「三角帽子」より
終幕の踊り
平成5年
兵庫大会（尼崎アルカイクホール）銀賞
課題曲IV マーチ・エイプリル・メイ
自由曲 法華経からの三つの啓示より
第3楽章

演劇部

部員数は毎年10人くらいです。10年ほど前は、ほんのたまに男子部員が1人入ってくるくらいでしたが、ここ4、5年3、4人の男子が入部する年もあります。男子の役者が1人いるだけでも芝居に厚みが出ますし、大道具作りが心強い。毎年男子部員がほしいものです。

県大会に出場した昭和61年は生徒の創作脚

本でしたが、その後は東京のプロ劇団の脚本を使うことが多く、しかも野田秀樹や鴻上尚史などテンポの速い、言葉遊びを多用する内容の分かりにくい芝居を、生徒達は好んで取り上げています。

いつも体育館のステージで、バレエ部、バスケット部、バドミントン部の活動となりあわせて、セリフのやりとりがうまく聞こえない状況での稽古ですが、なごやかにかつ熱心にやっています。

東播大会では、いつも破綻のない演技で上位5、6位には入るのですが、いま一步演技にはじけるような自由さが足りなくて、県大会出場の上位3校には入れません。本校生徒の気質でしょうか。



放送部

対外的な大会では、県大会入賞・全国大会出場以上の成績だけでも下記のような輝かしい成績をあげてきました。記載しなかったここ数年間も、県大会には毎年のように出場しています。また、校内の日常の活動でも毎日の放送・生徒会行事（体育祭・球技大会・文化祭など）の裏方・全校集会や学年集会の放送準備など、目に見えない所でも活躍しています。

最近の活動からトピックスをいくつか紹介しましょう。現在朝の放送で、前日のプロ野球の結果やJリーグの試合結果を内容に盛り

込んで好評を博しています。また昼のリクエスト番組には昇降口前に設置されたボックスに1ヶ月あたりのべ300枚を超えるリクエストが寄せられています。時には、スイッチが入ったままなのに気付かず「Last Christmas」を部員のひとりが歌っていて、全校に流れてしまった、ということもありました。高価な機器の扱いには万全を期しています。体育祭が6月になったことで、3年生最後のコンテスト県大会と体育祭が重なってしまい、力が二分される状況の中で、ここ数年先輩の輝かしい業績には追いつけずにはいますが、ぜひ全国大会常連校に戻れるよう部員一同がんばります。

昭和59年

NHK杯全国放送コンテスト

県大会1位 全国大会入賞

「げーむ」(ラジオ番組制作自由部門)

同上コンテスト県大会佳作

「続・区麗員」(ラジオ番組制作課題部門)

全国高校放送コンテストジュニア大会

県大会銀賞 牧敬子(アナウンス部門)

県大会佳作 是沢由起(朗読部門)

全国放送コンクール全国大会佳作4位(ラ

ジオ部門ドラマドキュメント部門)

昭和60年

NHK杯全国放送コンテスト

県大会佳作 柴山奈都子(朗読部門)

県大会佳作 「飛べない風船」(ラジオ番組制作課題部門)

昭和61年

NHK杯全国放送コンテスト全国大会出場

県大会5位 釜石美智留(朗読部門)

全国高校放送コンテストジュニア大会

県大会金賞「まるごとレンタル」(ラジオ番組制作課題部門)

県大会銅賞 高橋真由美(アナウンス部門)

県大会銅賞 高見洋子(朗読部門)

昭和62年

NHK杯全国放送コンテスト

県大会4位(全国大会出場)「塾通い大研究」(ラジオ番組制作課題部門)

県大会佳作 小西雅美(アナウンス部門)

昭和63年

全国放送コンテストジュニア大会

県大会佳作 杉山清彦(朗読部門)

平成元年

NHK杯全国放送コンテスト

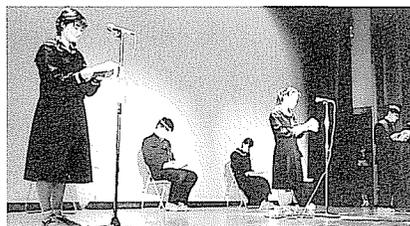
県大会2位(全国大会出場)松田佳子(朗読部門)

県大会佳作「光はほんとに東より?」(ラジオ番組制作自由部門)

県大会佳作「人形じゃない人形アリス」(ラジオ番組制作自由部門)

全国放送コンテストジュニア大会

県大会銅賞(ラジオ番組制作自由部門)



邦楽部

現在3年生6名、2年生4名、1年生7名計17名の部員がいます。3年生はもう引退していますので活動はしておりません。練習日

は火・金曜日で、火曜日には講師の菊庭和子先生のもとで練習に励みます。きびきびしたご指導を頂き上達も早いようです。発表会が迫ると、先生のお家ででも、ご指導を受けることがあります。発表会といえば、昭和63年度に東播磨13校が加盟して東播支部が結成されました。以来毎年8月に高砂市の福祉保健センターで支部演奏会を開催しております。また11月には県総合文化祭があり、順番制で支部より5校が参加しております。明けて1月にはコンクールが開催されます。大体例年参加しますが、あと一步のところまで入賞を逸します。最近では東播のレベルが大分上がってきました。3月には文化祭があり、総仕上げです。以前は会場入場者が数えるほどでしたが、最近はその数も増え、演奏にも力がかかります。琴も大分古くなってきたので新しいもの、また十七弦も備えたく思っています。

成績

- 昭和56年8月 第16回高等学校箏曲演奏会
優秀賞
- 昭和56年11月 第1回近畿高等学校総合文化祭邦楽部門演奏会出場
- 昭和60年 全国高等学校総合文化祭へ
加古川西校と合同出場
- 昭和62年8月 第22回高等学校箏曲演奏会
神戸地区大会 優秀賞
- 平成元年1月 第3回県高等学校邦楽コンクール 銀賞
- 平成元年11月 第9回近畿高等学校総合文化祭邦楽部門演奏会出場
優秀賞

茶道部・華道部

茶道部、華道部共に毎年20～30名の部員を有しており、活動は茶道が月曜・木曜の週二回、華道は隔週木曜の月二回を原則に行っている。

毎年新しく入部してくる全くの初心者も大森先生の指導のもと、上級生の助言も手伝ってめきめき上達してくる。先輩・後輩が共に日本古来の伝統美を学び、継承しようと励んでいる。

文化祭では日頃の練習の成果を発揮すべく茶道部員は、生徒だけでなく一般来客も茶席に招き、お手前を披露している。華道部は、それぞれの好みに応じた花を活けて来客に鑑賞してもらう機会を持っている。

お茶の作法や、季節の推移を伝える生花を通じて、それぞれに日本の美を身につけようと部員達は稽古にいそしんでいる。



書道部

近年、全国規模で書道部部員が減少し、休部、廃部等が話題になっている中、昭和63年度、本校の書道部も部員0になっていた。しかし、6月にやっと2年生2名1年生2名が入部し、何とか部活動を再開することができた。特に2年生がよくがんばり、さっそく県高校書道展（総文書道展）で金政満智子（2年）が推薦賞に入賞、翌64年（平成元年）度全国高校総文書道展の出品者に推挙されると

いう好成績を得た。

平成元年度は部員も増えて9名(1年5名)となり、活動も軌道に乗りだし、多くの書展に出品するようになった。元年度は、全国高校総文書道展出品(岡山県 3年金政満智子)、全日本学生書道展学会賞(金政)日本学書展(準特選5名)東播磨中高総文書道展(3名出品)県高校書道展(総文書道展)で高倉知子(2年)が推薦賞に入賞、翌平成2年度近畿総文書道展の出品者に推挙された。

平成2年度以降現在まで順調に部活動を続けており、平素は競書誌「不二」への出品、古典臨書などで力をつけるよう努力している。

平成2年度以降の主な成績を挙げる。

平2 近畿高校総文書道展(大阪)出品

高倉知子(3年)

日本学書展 特選 末藤晴子(1年)

県高校書道展 特選 中村順子(3年)

平3 県高校書道展 推薦 高倉好美(2年)

平4 全国総文書道展出品者に推挙

日本学書展 特選 高倉好美(2年)

平4 全国総文書道展(沖縄)出品

高倉好美(3年)

県高校書道展 特選 高倉好美(3年)

平5 県高校書道展 特選 原宏美(2年)

日本学書展 特選 原宏美(2年)

準特選 庄司めぐみ(1年)

国際高校生選抜書道展 入選

原宏美(2年)



美術部

現在部員は1・2年生合わせて12名、日々の活動としては、基礎的デッサンを行い、各自油画をはじめとする様々な画材を選択し作品の制作にとりくんでいる。

それら作品は文化祭で展示するとともに県の総合文化祭(毎年、秋に県民アート・ホールにて開催)に出品している。個人的には、加古川市展、高校野球原画展等にも出品している。部員は少しでも質の高い作品をめざし制作に励んでいるが、現在女子部員しかいないので男子の入部を期待している。

成績

昭和60年

全国高校野球原画展 佳作 長谷川純生

第33回高校美術展兼県総合文化祭

近畿総合文化祭へ推薦 長谷川純生

昭和61年

県総合文化祭

優秀作品 長谷川純生 「苦シムル馬」

写真部

常時、撮影とフィルム現像・引き伸ばしとその技術向上のための研究、また年2度程度の部員相互間の作品批評会、体育祭での撮彰と作品展示、1年間の活動のしめくりとしての文化祭での作品展示などが主な活動内容である。

部室兼暗室(2人で作業するのがやっと)が狭く部会もできないこと、年々新入部員が

減少しているのが悩みのタネ。

次に成績であるが、今年まで運動部の公式戦にあたるコンクールはなかったので、個人的に雑誌月例などに応募している程度。平成4年度は三浦印刷カレンダーコンクールで45回生の杉村航が佳作に選ばれている。

今年、高等学校文化連盟に写真部会ができたので、加盟し作品発表など活動していきたい。

ESS

毎年4月初めには、英語を話せるようになることに憧れて、多くの新入生が入部してくる。しかし、2年生終りまで日常活動が続ける者は年々その数が減り、現在は2～3割程度になっている。

主たる活動は、ここ10年ほど変化はないようである。1学期は日常会話の練習（ここ2年間は外国人教師を中心にした討論）2学期はスピーチの準備、練習、3学期は文化祭のための英語劇の制作である。1、2学期にあまり顔を出さなかった者でも、3学期には英語劇の制作に参加する。部員としての責任感の現れか、あるいは衣裳を作ることを含めて劇の制作には遊びの要素があるためか。英語劇の出来は小道具や衣裳の方がセリフの英語より良くできているのが現状である。英語に狂う生徒が増えることを希望したい。

ESSにとっての対外試合というべきスピ

ーチコンテストの過去4年間の成績をお知らせしておきます。

加古川シーサイドライオンズクラブ主催

1989年 1. 2. 4. 5位

1990年 2. 4位

1991年 6位

1992年 1. 2位

その他の大会

1989年 高校英語研究会主催県大会 4位

1990年 神戸市外大ESS主催 5位

JRC

JRC、すなわちJunior Red Cross（青少年赤十字）は、長年の伝統があるにもかかわらず、部員数の増減が激しい。去年はたったの3人で、大きな活動はほとんどできなかった。今年は20人、男子も9人いる。それで、献血の手伝いだけでなく、活動の幅がグンと広がった。みんなそれぞれ「無理のないボランティア」を目標にかかげて、ボランティアを楽しんでいる。毎週土曜日に手話講習会に参加する。この手話という言葉は非常に便利なもので、駅のプラットフォームで線路をはさんで会話ができたりするので実用的である。時には、テストの答も教え合えるらしい。しかし、何よりもよいのは、ろうあ者と話ができることだ。東高でサラマ先生とかたことで英会話できる人は大勢いるかもしれないが、ろうあ者と会話できるのはJRC部員くらいである。

特養老人ホーム「こすもす園」への訪問は8月から始めた。老人ホームというと家族から見はなされた暗い所というイメージがあっ

たのだが、行ってみると全く違う。ガラス張りで太陽の光が館内にさし込み、活気がみなぎっている。おじいちゃんやおばあちゃんはいろんなことを語る。戦争の話とか家族の話とか。部員は子供となり孫となる。知らない世界がここにもあったとみんな口々に言った。田原米子さんという両足、左腕を失った女性が講演会でこうおっしゃった。「人間一人ひとりの顔が違うように、障害もそうなんです。障害も個性のひとつなのです。」と。部員の誰もが学校の友達だけでなく、個性豊かな友達をおおぜい持っている。目が見えなかったり、耳が聞こえなかったり、手足が不自由であったりすることはほんのささいなことで考える必要はない。会って話せばわかることだ。それを、JRC部員だけでなく、みんなにわかってもらいたい。そんな思いでこれからもがんばっていこうと思う。

地歴部

地歴部——何をしているの？といふかられる部ですが、正式名称は、地理・歴史・考古学研究部——この名を正式にいえる人はいない——で要するに社会なら何を研究してもかまわないという部である。

昭和60年には野口神社内にある法隆寺方式の野口廃寺の金堂・講堂を発掘し地元新聞の脚光をあびたが、近年は継続的な入部者がなく従って研究もとぎれとぎれになってしまっている。

平成3年はインド、平成4年はガラリと変わって志方町研究をし、長楽寺の秘仏（重要文化財）を特別に拝観させて頂いた。平成5

年は加印地区人物研究を始めている。

化学部

部員数は、毎年30名程度であり、普段は、週のうち活動日を決めて定期的に活動しているが、文化祭の前になると、展示のためほぼ毎日の活動となる。実験器具、薬品など化学部専用のものが少ないのが悩みであるが、工夫して、テーマを決めて実験など行っている。

なかでも、加古川流域の水質調査を上流（氷上郡青垣町）から下流（加古川市）まで10地点について、毎年夏に継続して行っている。

成績

第37回日本学生科学賞兵庫県コンクールにおいて、46回生住友紀仁の結晶模型が佳作

生物部

この10年間の活動内容は、長期的取り組みのものと、短期的取り組みのものに分けることができる。

長期的なものとしては、毎年継続して小動物の飼育・観察を行ってきた。即ち、ハムスターや文鳥をはじめ、加古川周辺の河川に棲息する淡水産生物、熱帯～亜熱帯産の淡水魚等を、何代となく飼育・観察してきた。

短期的なものとしては、放課後に生物解剖や実験、採集会等を行ったり、休日や休業日を活用して、生物採集・観察会を行ってきた。この休日や休業日を活用した活動としては、次のようなものがある。



- ①昭和60年 5月 姫路市増位山における生物採集・観察会（11名参加）
- ②昭和62年 8月 水上郡青垣町佐治周辺における河川生物の採集・観察会（7名参加）
- ③昭和63年 8月 飾磨郡家島本島網手ヶ浜における海浜生物の採集・観察会（8名参加）
- ④平成2年 8月 飾磨郡男鹿島における海浜生物の採集・観察会（9名参加）
- ⑤平成3年 8月 同上（9名参加）及び2回にわたり加古川の水生昆虫の棲息調査（6名参加）
- ⑥平成5年 8月 播磨灘沿岸の自然観察会（3名参加）

地学部

現在部員は30名、毎年流星観測や星野写真撮影を目的とした校外合宿を実施している。そしてその成果を文化祭で展示発表している。

特に1993年8月10日～11日にかけて県立西はりま天文台で行なったペルセウス座流星群の天体観測では午後10時から午前3時までの5時間にわたって合計300個以上の流星の観測をした。そして8月11日の朝日新聞夕刊に加古川東高校地学部の観測成果として掲載してもらった。このことは部員たちの大きな財産として残っている。

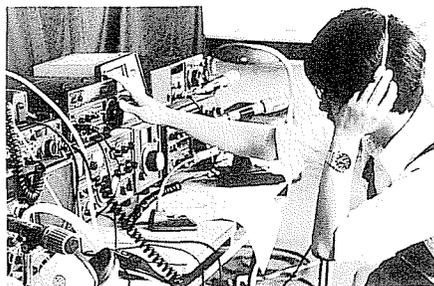
今後は、天文班、地質班、気象班の各分野において地道な努力を重ねることとチームワークによってさらに発展していきたい。

政治経済研究部

我々政治経済研究部は、東播総体のような大会もなく、部員も他の文化部、運動部との兼部の人が多く、政経部一筋という人はごく少ない。そんな政経部でも結束だけは強く、先輩後輩は仲が良く、和気あいあいと日々活動している。巷では東高で最も入部しやすい部と呼ばれているらしいが、政治や経済のことだけではなく、幅広い分野にわたって研究している。話題は広がり、気がつけば日は既に暮れているということもたびたび。学期ごとの部誌発行。文化祭における展示。とにかく、マイペースで楽しい部活を続けていきたい。

アマチュア無線部

活動自体は、派手な音を出すでもなく、大勢の前で演技を披露するでもなく、文化祭で一部屋もらう以外は、独自の展示会を開くわけでもないの、なかなか活動を認めてもらいにくく、活動主体となる送受信機もおいそれとは高性能のものが買ってもらえない。ただ、存在を主張するのは校舎の屋上にデンと構えた大きなアンテナ。このアンテナも一昨年の台風19号で支柱が折れ曲がり、とても人手では修理しきれず、4階の屋上よりももっと高い大型クレーン車のお世話になった。それ以降、これに懲りて、台風が近づくとたびにアンテナ降ろしの作業を行っている。



普段は、部屋に置かれた送受信機を使い、電話や電信などで交信している。また、最近では無線によるパソコン通信を利用して、常時、情報の受信を行っている。部員数は新学期には約50名にも上るのだが、卒業アルバムにおさまるのは10名程度である。そして毎年4月28、29日に全国規模で行われる「ALL JA コンテスト」には十数名が夜を徹して24時間ぶっ通しの交信に参加する。そして毎年かなり優秀な成績を残している。10年前には、部員が殆どいなくなり、休部か廃部かというところまで追い込まれた時期もあったが“JA3YRZ”の運営は、今や完全に軌道に乗り、毎日欠かすことなく全国と交信が続いている。

ごく最近の成績

☆1990年度秋期関西VHFコンテスト

社団局 マルチバンド第1位

☆第15回オホーツクコンテスト

社団局 第1位

☆JA9コンテスト

U・VHF部門 第1位

☆ALL JA CONTEST

第34回 社団局A種目 関西地方第1位

(電信電話部門)

☆1992年度秋期関西VHFコンテスト

社団局 第1位

☆ALL JA CONTEST

第35回 社団局A種目 関西地方第1位

(電信・電話部門)

(1993. 10. 25 顧問小川富久先生記)

新聞部

学校新聞はいわば学校の顔、おおぜいの人に読んでもらって加古川東高校を知っていただし、またその時々大切な記録文書ともなるもの。7月、12月、2月と年3回発行している。年3回とはいえ小人数の部員にとってはけっこういそがしい。部員は毎年まじめ人間が多く、企画、記事ともまじめそのもの、つい記事が多くて、写真、カット、マンガを入れることが困難となり、固く重い紙面になりがちである。時にはアンケートにより東高生の生活と意見をまとめているが、東高生のありのままの姿をとらえ貴重な資料となっている。活動が地味なためか、5年に一度くらい部員がいなくなりかかり、必死で全校生に入部をよびかけ危機を脱しては今日に至っている。

雑誌部

～雑誌メルヘンについて～

現在のメルヘンは昭和53年12月に第1号を発刊して以来、発行が続けられているものだ。当時の部員は4人。雑誌部の再興をかけての苦悩の末の第1号だった。この新メルヘンはそれ以前の旧メルヘンに比べて内容的にも娯楽性が強い。紙の黄ばんだ旧メルヘンを開いてみると、昭和20年代のものまでである。内容は純文学的だ。この変遷には、その時代の東高生の姿や考え方が少なからず反映されているのである。

～メルヘン合併号について～

合併号というのは毎年秋に発行されるもので、企画としてはかなり新しい。約120ページを数えるこの合併号、43回生によって考案され、試しに発刊してみたのが翌年から恒例になってしまったのだそうだ。

～一般投稿雑誌OMAKEについて～

「紙折りはいや。でも載せたい。」という人のために創刊されたのがOMAKEである。しかし投稿してくる人が少ないのが悩みだ。部員の手を通してでもいいからどんどん投稿してほしい。

活動上の苦労

《その一》 原稿を書く

すなわち「徹夜」である。ぎりぎりまで原稿を書かなかったため、その前夜ついに徹夜という最終手段にでる。書けなかった理由は時間がない、ネタがない、書いても書いても気に入らない、ページを多くとりすぎた等々。特に“スランプ”というのは雑誌部員にとって手のほどこしようがない。

《その二》 印刷に出す。

昔は業者に頼んでいたが、近年（確実なのは昭和53年から）は生徒会の庶務の方々にお願いしている。印刷についてはわが部はノータッチなのだ。ただコピー機が老体であるためよく故障する。イラストはトーンによってはつぶれてしまうこともある。印刷のずれも多い。

《その三》 紙折り

最も時間と人手のかかる作業、それが「紙折り」だ。しかも印刷したてを折るのだから当然インクも完全には乾いていない。指先が

黒光りしてつるつるになったりもする。これを「指紋がなくなる」と言う。最近「紙折り機」なるものがあるらしいが、わが部は伝統ある手作業で、ハンドメイドの温かさと乱丁率の高さを誇っている。

部落解放研究会

現在は部員数ゼロですが、最近では1988年から2年間は部員2人が活動、部紙「熱と光」を2ヶ月に1回程度発行し、同和ホームルームにも良き参考資料ともなっていました。週2回活動日を決め、本館4階、図書館北側の小部屋で主に同和ホームルーム、学年反省会全体会などの討議事項について話し合ったものです。時折、部のOBの方も訪れ、部が創設された頃の話などされました。文化祭には増ページ版の「熱と光」を作成、訪れた人に配布、また部落解放に貢献した人のフィルムなど尼崎市役所から借用し、部の展示会場で上映したりもしました。この2人が卒業した後は1年前に入部した1人が残りましたが、活動も途絶え、その後入部者もなく現在に至っています。



数学研究同好会

部員数は多い年は25人、少ない年は数人パソコン(MSX等)を使ってBASICなどになれば、プログラミングができるようになること、また、BASICによって図形の解析ができる

ようにとがんばっている。1984年より全国高校生パソコンソフトコンテストに参加している。

落語研究同好会

私が落研の顧問になってから早いもので8年が経ちます。その間、大ちょうちん・木製看板・古典落語テープなどを少しずつそろえて、できるだけ部員に古典的雰囲気親しんでもらおうと努めてきました。活動としては5～6年前までは文化祭以外にも、清流館和室で校内発表会を開いていたときもありましたが、現在では文化祭一本に絞って部員一同頑張っています。

現在では、残念ながら羽織・袴・着物姿で古典落語を演じえる部員は毎年少なくなり、漫才・コミックコントが主流になっています。その分、文化祭では舞台作り、飾り付けには力を入れ、部員一丸となって取り組みます。

この8年間で私の見る限り、一番落語が上手であった生徒は山口晃義君（40回生）です。彼は桂米朝の出し物を得意とし、米朝の物まねに近い習作期を経て、自己の芸の世界を確立したといってもよいでしょう。彼の落語を聞いていると、そのままプロの高座に上がってもよいほどの話術の持ち主でした。彼は大学に進学してからも落研に所属し、また世の中に出てからも落語を一生の趣味として精進しているとも聞いています。この山口君が部長を務めていた昭和63年、平成元年頃が落研の最も充実していた時期でした。

最後に「落研に入ると必ず浪人する」という噂が巷に流れていますが、これはまったく

根拠のない迷信ですから、古典芸能を目指す生徒はドンドン入部してください。

（前顧問 赤松幸吉先生記）



将棋同好会

将棋同好会は1991年（平成3年）に創設されたばかりの新しい同好会である。やっと駒と盤もそろい、現在は3年生が引退して1年生の部員5名が毎週月曜日16：00～18：00静かに厳しく読みに埋没している。

ギターフォーク同好会

若者は全身で音を創り出し、そのたぎる思いを音に託すことにかぎりないよろこびを感じている。腹にこたえるドラムの大きな音ゆえに練習場所も今は清流館3階の和室（？）に移してがんばっている。

小集会室でのライブ、文化祭での演奏と、年2回公演しておおぜいの聴衆を魅了している。時代の先端をゆく部員はさっそうとして頼もしい。



現在の加古川東高校

校章、校訓、校旗、校歌など

校章

旧制加古川中学校の校章については記録はなく、その由来は不明である。

加古川東高校の校章は、高2回生の堀田昌男氏の案を採用した。その間の事情について、50周年記念誌に龍見讓氏が次のように記しておられる。

新制高等学校発足の時に中学校全生徒から校章を公募し、堀田昌男君の作品二種が選ばれたのである。(彼はその後、交流により加古川西高校に行った。そうして彼の作品が現在の加古川東高等学校の校章となり、一方が加古川西高等学校の校章となったのである。)彼は加古川東高等学校の校章について、「これは、久遠の過去から我が郷土をはぐくみ永遠の未来までつづく加古川の清き流れの上に立つ我が母校と、その母校の永遠の発展を希い、そこを巣立つ若人がわが故郷をこよなく愛し、そのもつ力をふるさとにそそぐ事を希う私の祈りです。」と語った。

校訓

旧制加古川中学校当時の校訓は「質実剛健」「自治創造」であった。もちろん男子だけの学校であり、おりから戦時色がだんだん濃くなりつつあった時代の風潮として、二つのうち「質実剛健」が実質的なスローガンとして重んじられていたらしい。次に50周年記念誌より高松一禱氏の文章を引用する。

「質実剛健」これは、男子だけの中学校当時にはふさわしいことばで、あらゆる学校行事の精神がこれで貫かれていたと思われる。すなわち服装においても——制服の下に着る肌着は、夏も冬も前開きの詰襟木綿のシャツ1枚で、メリヤスシャツの重ね着も許されなかったし——防寒具といったら軍手だけ、遠足、

行軍の弁当は梅干し入りの大きなにぎりめしを、ノリかトロロコブで巻いたものを2個と指定、等々。これらによって不拔の忍耐力を養おうという趣旨からであろう。

校旗

昭和3年に作られた旧制加古川中学校の校旗をうけついで——旗の材料が無かった敗戦当時だから止むを得なかったとは言うものの、文字通りうけついで——加古川東高等学校の校旗が昭和23年に誕生した。その時の苦労話を、50周年記念誌より龍見讓氏の文章を引用して紹介する。

「(校旗の新調は)まことに残念ですがおひきうけすることは出来ません。」と言った。私は困惑してだまって平岡氏の顔を見ていると「この校旗を使わせて頂いてなら出来ます。生地は素晴らしいし、金も充分に使ってあるし、色ぬきをして紫紺に染めあげれば立派なものになります。」とつけたした。(中略)私は平岡氏に精魂こめてほしいとお願いした。平岡氏も「作らせて頂きます。」と言ってくれた。私の独断で、旧制の卒業生が仰いだあの真紅の校旗を失ってしまった。それは今にして思えば慚愧に堪えないことである。しかし幾十年の歴史を秘めた旧制加古川中学校の校旗が、その生地、その金糸をそのままに新しく県立加古川東高等学校を象徴する校旗として、再び紫紺の色鮮やかに母校にかかげられた時の感激は忘れられない。

(注)平岡氏=京都平岡旗製造株式会社主人

校歌

旧制加古川中学の校歌は2つあり、初期の「光れる潮よ霞める島よ」は尾上柴舟の作詩、作曲者は不明、つづいて制定された「流れてつ

校 歌

辻豊に 富田碎花 作詩
須藤五郎 作曲

♩ = 108

い - さ み よ 行くてのろが -
 ヤ - く ひ の は し - ら く あ ん の ひ
 の り に ひ と ん び ひ ら - ま じ り せ う
 せ う - の ら - から ひ に つ に き ぼ う の か -
 ね た か う の に う ら ち な ら せ ひ の り は っ -
 ね に ひ が し ょ - り あ あ わ
 れ - ら の こ - が わ ひ - が し - 高

校 歌

富田碎花 作詩
須藤五郎 作曲

- 1 いざ見よ
 行く手輝く日の柱
 久遠の光に瞳をひらき
 自治創造の力一つに
 希望の鐘高らかに
 うち鳴らせ
 光はつねに東より
 ああ我等加古川東高校
- 2 いざ聞け
 加古の水ゆく瀬々の音
 絶えざる流れに思いを潜め
 親しみとする心一つに
 希望の鐘高らかに
 うち鳴らせ
 光はつねに東より
 ああ我等加古川東高校

きぬ加古の川」は矢作叅蔵作詩、加藤忠男作曲である。前の校歌を改めた理由としては、作詞者の矢作叅蔵氏が、「前のものは、あまりにも浪漫的に過ぎて弱々しいから」と言っておられたそうである。矢作氏は当時の国語漢文の教師、また加藤氏は数学の教師だが、音楽に造詣の深かった吹奏楽部の顧問であった。

加古川東高等学校の校歌「いざ見よ、行く手輝く日の柱」(富田碎花作詩、須藤五郎作曲)は、昭和24年秋、母校創立25周年記念式典当日に発表されているが、次にその間の事情について、50周年記念誌より高松一禰氏の文章を引用する。

(詩は)生徒のものを何とか生かそうと思ったが、取り上げるものはなかった。高橋先生(本校職員)の作品に「光は常に東より」の一行だけを付け加えることにした。高橋きさの先生の作詩としてもらってもけっこうだからということであった。

次に作曲であるが、富田先生の内意を伺ってみたところその場で須藤五郎先生を推せんして下さったので翌10月6日(昭和24年)大阪府豊中市蛍ヶ池の先生のお宅を訪問、お願い申し上げたところ、「いいですね、素晴らしい曲ができそうです。出来上がりを楽しみにはりきって作曲してみましよう。」と快く承諾して下さって胸の重荷を下ろしたわけでした。

校 詩

旧制加古川中学校時代、矢作叅蔵先生の作られた「校詩」があった。次にそのだいたいの読みを記す。

四圍、寥廓(リョウカク)たり緑陰のうち、輪奐(リンカン)たる学窓、碧空(ヘキクウ)にそびゆ。日に学ぶ浩蕩(コウトウ)瀬戸の海、月に親しむ清操(セイソウ)尾上の松。心を澄ます加古清流の月、徳を千歳に仰ぐ小稚命(オウスノミコト)の忠。八百の健児団結鉄なり。道を学び、義を重んじて英風を養う。

校詩

四圍寥廓綠蔭中
輪奐學窓聳碧空
日學浩蕩瀨戸海
月親清操尾上松
澄心加古清流月
仰德千歲小碓忠
八百健児団結鉄
學道重義養英風

矢作 兼藏 作

応援歌

昭和29年7月、加古川東高等学校応援歌が作られ文化祭で発表された。

第1応援歌「それ清流に」は当時の校長であった清水敬治氏作詩、共に中学3回卒業生の山本禎一、浅原弥平、両氏の共同作曲である。また第2応援歌「日丘の山に日は映えて」は当時生徒であった西島三恵さんの作詩、土井政子先生を中心とする本校音楽部の作曲である。

第一応援歌

それ清流に

清水敬治 作詩
山本禎一 作曲
浅原弥平

1. それ清流に影宿し

野鳥を友にねりしわざ
ここに試練のとき至る
加古川東 勝て東

勝て勝て 加古川東高
加古川東 勝て東

2. ああ壮行の朝明けに
ほまれの旌旗色添えて
金鳥は映ゆる日岡山

(以下くり返し)

3. いま強豪とめぐり合い
闘魂たぎる印南野に
嵐は叫び雲は飛ぶ

(以下くり返し)

4. ああ夕空にとどろける
陣鼓の響栄光は
やがて上らん刀田の月

(以下くり返し)

第二応援歌

日丘の山に陽は映えて

西島 三恵 作詩
本校音楽部 作曲

1. 日丘の山に陽は映えて

つちかう力 幾十年
歴史は輝く 先輩の
汗に染めたる このわざを
今こそためさん 東高
フレーフレーフレーフレー

加古川 東

2. 刀田のいらかに月さして

たがいに誓う 若人の
四季に鍛えし この闘志
火玉と燃やせ 一筋に
戦いぬかん 東高
フレーフレーフレーフレー

加古川 東

3. 昔を今に 変らざる

流れは清き 加古川の
水にはぐくむ 若人よ
気高く燃やせ この意気を
今こそ示さん 東高
フレーフレーフレーフレー

加古川 東

1 学 校 概 要 (平成6年5月1日現在)

(1) 所 在 地

〒675

兵庫県加古川市加古川町粟津232の2 電話 加古川 (0794) 24-2726(代)

FAX 加古川 (0794) 24-5777

(2) 校 地

校 地 面 積	建 物 敷 地 面 積	運 動 場 用 地 面 積
37,751.61m ²	15,876.00m ²	21,875.61m ²

(3) 校 舎

種別	校長室	職員室	事務室 (含倉庫)	情 報 処理室	保健室	校務員室 (含倉庫)	会議室	普通教室	特別教室	各 科 準備室	図書室及 び閲覧室
個数	1	1	1	1	1	1	1	36	17	13	1

種別	体育館 兼講堂	進 路 指導室	生 徒 指導室	生 徒 小集会室	プー ル 附属家	格技場	電気室	受水槽 ポンプ室	生徒会 本部室	部室	その他	校舎延面積
個数	1	1	2	1	1	1	1	1	1	20	5	13,332.77m ²

特 別 教 室

化学教室 2. 生物教室 2. 物理教室 2. 地学教室 1. プラネタリウム室 1.
被服室 1. 書道教室 1. 社会科教室 1. 美術教室 1. 視聴覚教室 1. 作法室 1.
音楽教室 1. L・L教室 1. 調理室 1.

(4) 施 設

グラウンド……野球・ソフトボール、陸上競技、サッカー

コート……テニスコート4面、バレーコート4面

体育館兼講堂……バスケットコート2面、バレーコート2面、バドミントンコート3面

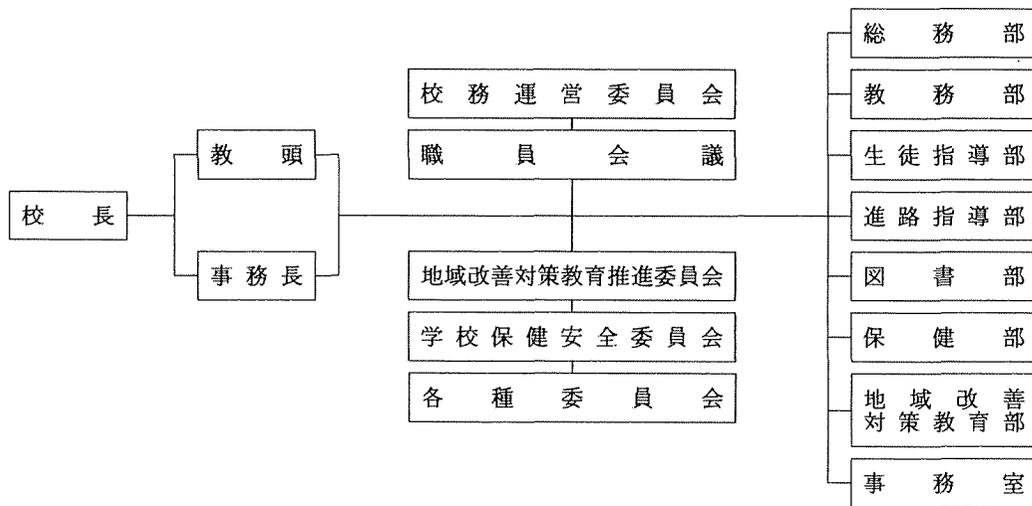
格技場・生徒集会室……生徒集会室1、柔・剣道場1、会議室2、和室1

水泳プール1

(5) 生 徒 数

学年 性別	1 年 (12学級)			2 年 (12学級)			3 年 (12学級)			合 計 (36学級)		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
普通コース	242	199	441	250	190	440	214	223	437	706	612	1,318
理数コース	34	7	41	28	12	40	33	6	39	95	25	120
計	276	206	482	278	202	480	247	229	476	801	637	1,438

2 校務運営組織 (平成6年度)



総務部 兼本	総務係	1.	学校行事、その他	兼本、山口	
		2.	文書、学校日誌・諸掲示物	加藤、松原	
		3.	儀式、諸会合	岡村、学年主任	
		4.	研究紀要	加藤	
		5.	保護者名簿、入学の手引き	加藤、松原	
		6.	文化鑑賞会	岡村	
	渉外係	1.	育友会関係	岡村、学年主任	
		2.	同窓会関係	山口、森元、山田	
		3.	業者指定・折衝	兼本	
	厚生係	1.	奨学金、授業料減免	志村、信原、南	
		2.	職員・生徒福利厚生、安全互助会 厚生会、募金	松原	
		3.	食堂・購買部管理	加藤	
		4.	親睦会	山口	
		5.	管理、環境整備	松原	
		6.	警備防災	山口、岡村	
	教務部 新穂	教務係	1.	学力検査	新穂、中山
			2.	教育課程	新穂、中山
			3.	成績会議資料、追認定考査	新穂
4.			指導要録	大西(俊)、福永(七)	
5.			時間割作成・変更、自習課題	福永(七)、神保、中山	
6.			時報	大西(俊)	
庶務係		7.	学級編成、教室配当	新穂	
		8.	転入学考査	新穂	
		9.	定期考査、実力考査	神保、福永(七)、大西(俊)	
		10.	教科書、併用教材	神保	
		11.	用度、物品、諸表簿用紙	大西(俊)、福永(七)	
		12.	クラブ	神保	
研修係	1.	教務日誌	福永(七)、中山		
	2.	学校要覧	神保		
	3.	諸調査	福永(七)		
学年 教務係	1.	研究授業、公開授業、研究会	新穂		
	2.	教育実習	中山、大西(俊)		
	3.	出席簿、学級日誌、生徒カード 成績一覧表、指導要録	塩谷、南、信原、藤原(幸)、志村、長谷川		
		2.	学習指導	塩谷、南、信原、藤原(幸)、志村、長谷川	
		3.	学級編成、時間割作成	塩谷、南、信原、藤原(幸)、志村、長谷川	

生徒指導部 森(元)	生徒会係	生徒会執行部、生徒議会、生徒総会……………	岩谷
	会計委員会指導係	生徒会予算・決算、文化祭・体育祭会計指導……………	大野
	監察委員会・情報委員会指導係	集会、刊行物、掲示、生徒会監査、部活動監察指導……………	大野
		庶務委員会指導係……………	大野
	風紀・交通安全指導係	1.風紀委員会指導……………	常深
		2.風紀・服装等校内外生活一般の指導……………	常深、岩谷
		3.通学路、自転車鑑札、交通一般……………	常深、前川
	集合係……………		常深、小林(等)、窪田、福永(功)
	HR委員会指導係	HR計画、HR委員会指導……………	岩谷、常深
	部活動係	文化部・運動部統括……………	田中(剛)、常深
進路指導部 加西	指導係	1.進学指導 進学全般の企画と指導……………	小川、川瀬、古林、後藤、柳浦、丸山
		2.職業指導 就職全般の企画と指導……………	小川、速水、古角、水野、北村
	調査研究係	1.就職全般の書類整理・点検・集計……………	小川、阿部、古角
		2.進学全般の情報整理・資料作成・点検・集計……………	川瀬、速水、古林、後藤、柳浦、丸山
		3.コンピュータ処理、プログラム作成……………	川瀬、古角、水野、北村
図書部 佐伯	図書選定・読書指導	図書委員会指導係……………	大西(剛)、有吉、山田、渡辺、朝弘
	図書管理・購入係……………		大西(剛)、有吉、山田、渡辺
	視聴覚係	視聴覚教材に関する指導、器具管理……………	有吉、渡辺、朝弘
保健部 清水	保健係	企画、運営、調査、精神衛生、保健委員会指導……………	檜皮、稲岡、川崎、山本
	健康係	健康教育、学校健康会……………	檜皮、足立
	環境美化係	1.環境美化、緑化、美化委員会指導……………	松田、山本、稲岡、川崎
2.環境整備、用具管理……………		松田、足立	
地改対教育部 福田	地改対教育推進部……………		福田、豊福、高見
	学年地改対教育係……………		神田、荒神、益田、谷口、磯合、南
事務室 大亀	庶務係……………		大亀、黒田、住谷、石田、真野、酒井
	会計係……………		大亀、黒田、住谷、真野
	管理係……………		大亀、黒田、前、神吉、石田、酒井

〈委員会〉

- 校務運営委員会：校長、*教頭、事務長、兼本、新穂、森(元)、加西、佐伯、清水、福田、河田
森(剛)、小林(功)
- 教育課程委員会：教頭、*新穂、森(元)、加西、佐伯、南、川瀬、坂村、神保、古林、福永(元)、中山
- 学校行事検討委員会：校長、*教頭、事務長、兼本、新穂、森(元)、加西、佐伯、清水、福田、
河田、森(剛)、小林(功)
- 国際理解教育推進委員会：校長、教頭、*古林、岡村、大西(剛)、豊福、福田
- 地域改善対策教育推進委員会：校長、教頭、事務長、*福田、兼本、新穂、森(元)、加西、河田、森(剛)、
小林(功)、豊福、高見、神田、荒神、益田、谷口、磯合、南
- 教科主任会：*新穂、佐伯、南、川瀬、坂村、森(元)、神保、古林、福永(元)
- 学校保健安全委員会：*校長、教頭、事務長、清水、兼本、新穂、森(元)、河田、森(剛)、小林(功)
松田、檜皮、足立、校医、薬剤師、育友会長、育友会保健委員、
生徒保健委員代表
- 教科書選定委員会：*校長、教頭、事務長、新穂、佐伯、南、川瀬、坂村、森(元)、神保、古林、
福永(元)、育友会長
- 理数コース推進委員会：教頭、*新穂、加西、河田、森(剛)、小林(功)、荒神、柳浦、後藤、川瀬、坂村
- コンピュータ利用研究委員会：教頭、*川瀬、有吉、長谷川、磯合、荒神、北村、福永(功)、神保、益田、阿部
- 視聴覚機器利用推進委員会：*長谷川、川崎、藤原(剛)、谷口、後藤、前川、岡村、藤原(元)、福永(元)
- プール管理委員会：教頭、事務長、*森(元)、新穂、檜皮、清水、福永(功)、常深、窪田、小林(等)、
田中(剛)、前川、稲継
- 教育相談委員会：*岩谷、稲継、井上、藤原(剛)、檜皮、川瀬、豊福
- 食堂購買委員会：教頭、事務長、*兼本、新穂、森(元)、清水、小林(功)
- 生徒指導委員会：教頭、*森(元)、岩谷、常深、大野、前川、鶴田、田中(剛)、野村、小林(等)
窪田、坂村
- いきいきハイスクール創成：校長、*教頭、事務長、兼本、新穂、森(元)、加西、河田、森(剛)、
創成事業推進委員会 小林(功)

3 学 校 行 事

月	学 校 行 事
4	着任式、始業式、入学式、離任式、対面式、新入生オリエンテーション、課題・実力考査、身体測定、各種健康診断、X線撮影、心電図検査（1年）、新入生歓迎会
5	春季東播体育大会、中間考査、育友会総会、進路講演会
6	教育実習、歯科検診、創立記念日、県総合体育大会、体育祭、実力考査（1・2年）、模擬考査（3年）
7	期末考査、各学年合同保護者会、3年進路学習会、学校保健委員会、球技大会、防災訓練、終業式 実力試験（1・2年）、模擬試験（3年）、夏季休業、三者懇談、転入学考査、夏季補習授業
8	夏季休業、夏季補習授業、模擬試験（3年）
9	始業式、課題考査（1・2年）、実力考査（1・2年）、模擬考査（3年）
10	秋季東播体育大会、模擬試験（3年）、1日旅行（1・3年）、修学旅行（2年）、中間考査、 進路講演会（2年）、文化鑑賞会
11	実力試験（1・2年）、模擬試験（3年）、県新人種目別大会
12	期末考査、3年進路検討会、予餞会、球技大会（1・2年）、防災訓練、終業式、冬季休業、 三者懇談、転入学考査
1	冬季休業、スキー教室（1年希望者）、始業式、県下一斉実力試験（1・2年）、期末考査（3年）、 生徒会長選挙
2	3年進路検討会、耐寒訓練、3年補習授業、理数コース入学者選抜適性検査、 実力試験（1・2年）、卒業認定会議、卒業証書授与式
3	期末考査（1・2年）、進級認定会議、入学者選抜学力検査、文化祭、終業式、春季休業、 転入学考査、入学説明会
<p>備 考： ○職員会議は月末水曜日、校務運営委員会はその前の月曜日に開く。 臨時に開くこともある。 ○各部会・教科会議は随時開く。 ○学年会議は毎週一回開く。</p>	

4 卒業生状況

旧制中学

高等学校

回	男
1	117
2	112
3	128
4	133
5	117
6	120
7	121
8	107
9	128
10	114
11	128
12	131
13	125
14	129
15	124
16	125
17	117
18	183
19	45
20	148
21	198
22	11
計	2,661

回	男	女	計	回	男	女	計
1	83		83	24	245	164	409
2	96	32	128	25	236	165	401
3	135	128	263	26	234	179	413
4	201	226	427	27	235	168	403
5	155	145	300	28	272	176	448
6	133	154	287	29	255	193	448
7	192	149	341	30	255	195	450
8	215	152	367	31	242	204	446
9	206	138	344	32	284	209	493
10	197	130	327	33	241	207	448
11	204	173	377	34	258	192	450
12	216	150	366	35	246	248	494
13	202	146	348	36	246	197	443
14	205	165	370	37	202	205	407
15	223	151	374	38	275	242	517
16	220	147	367	39	273	196	469
17	254	169	423	40	292	175	467
18	349	197	546	41	315	199	514
19	365	186	551	42	322	236	558
20	340	169	509	43	320	238	558
21	289	168	457	44	324	237	561
22	291	140	431	45	322	238	560
23	250	164	414	46	305	233	538

総計 19,295 (男11,220 女 8,075)

5 卒業生進路状況

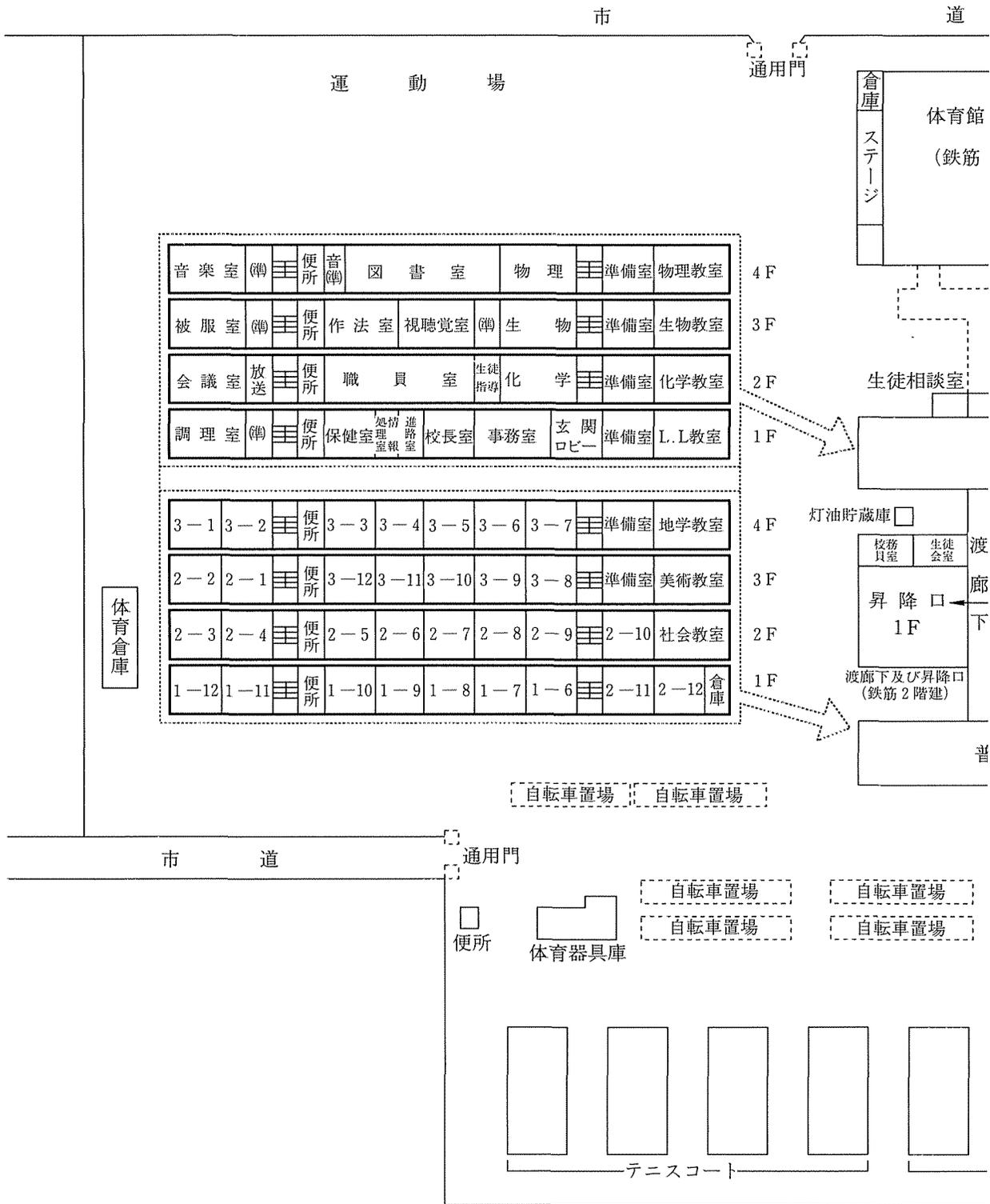
年 度	男 女	進 学					専 修 各 種 準 大 学	就 職	(予備校等) その他	計
		4年制大学			短期大学					
		国 立	公 立	私 立	国公立	私 立				
昭和 60 年度	男	76	35	37	0	1	2	1	123	275
	女	55	27	82	12	25	7	8	27	243
	計	131	62	119	12	26	9	9	150	518
昭和 61 年度	男	92	31	43	0	0	1	2	104	273
	女	59	15	58	19	9	5	8	24	197
	計	151	46	101	19	9	6	10	128	470
昭和 62 年度	男	97	30	39	0	0	1	2	123	292
	女	53	12	48	15	18	4	2	23	175
	計	150	42	87	15	18	5	4	146	467
昭和 63 年度	男	113	21	38	0	0	1	0	142	315
	女	61	11	56	22	15	4	0	30	199
	計	174	32	94	22	15	5	0	172	514
平成 元 年度	男	81	27	43	0	1	3	0	167	322
	女	53	13	92	17	17	5	5	32	236
	計	134	40	135	17	18	8	5	199	558
平成 2 年度	男	101	23	61	0	0	3	2	130	320
	女	69	17	90	20	11	2	5	24	238
	計	170	40	151	20	11	5	7	154	558
平成 3 年度	男	106	35	64	0	0	2	5	112	324
	女	69	19	84	11	13	1	4	36	237
	計	175	54	148	11	13	3	9	148	561
平成 4 年度	男	96	32	51	0	1	2	1	139	322
	女	69	22	90	6	8	0	0	43	238
	計	165	54	141	6	9	2	1	182	560
平成 5 年度	男	108	40	52	0	0	1	0	104	305
	女	62	26	82	6	5	1	0	51	233
	計	170	66	134	6	5	2	0	155	538

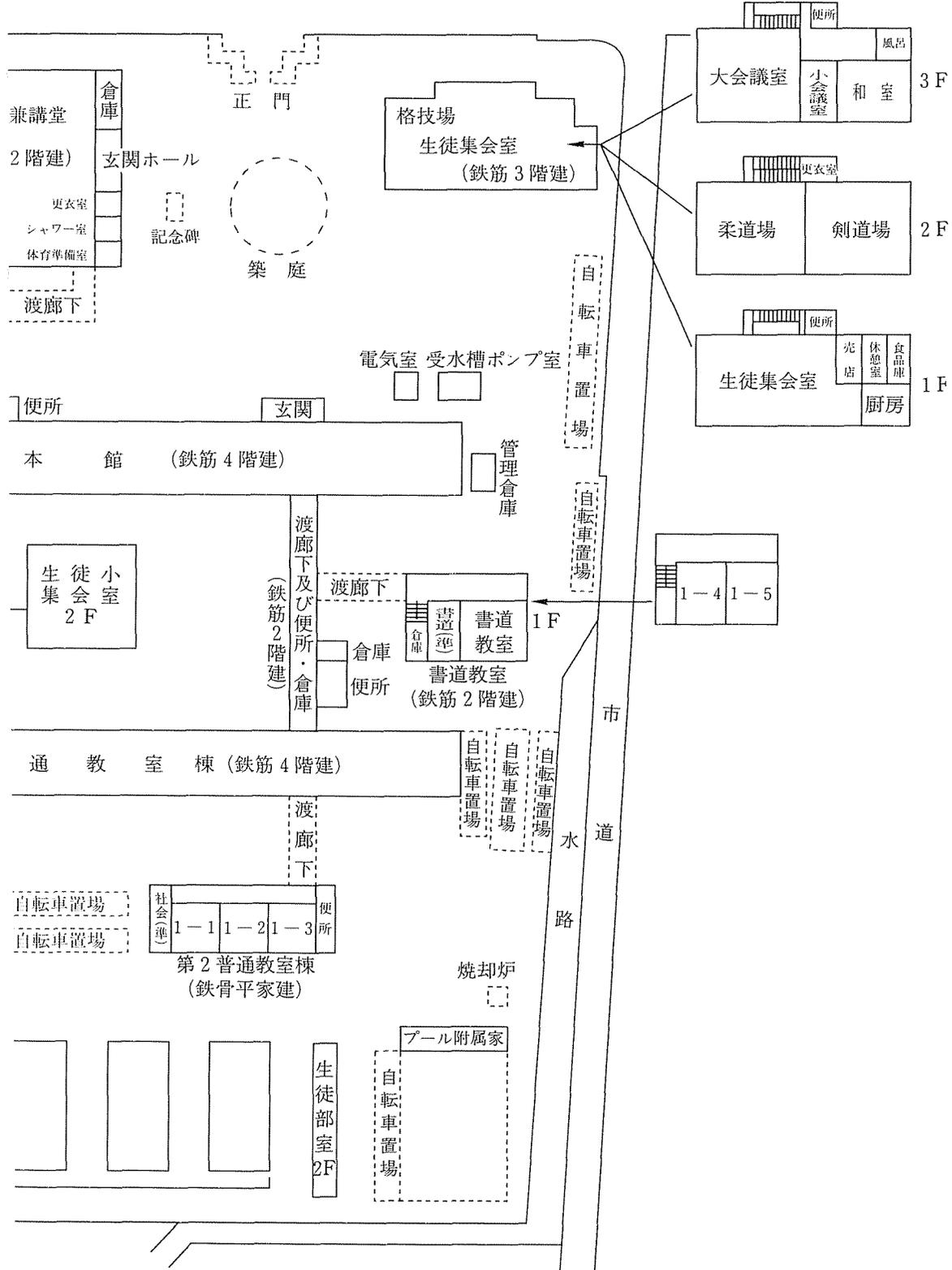
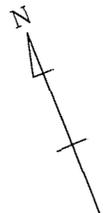
6 歴代生徒会役員

第1回 (昭和23年)	永井万介 高田千春 興地(佐藤)由紀子	第25回 (昭和46年)	福田 薫 田頭秀雄 井口佳夫
第2回 (昭和24年)	荻野直義 橋本 淳 小野(前田)達子	第26回 (昭和47年)	崎村 真 滝川 裕 福田一夫
第3回 (昭和24年)	橋本 淳 小野(岩井)一枝	第27回 (昭和48年)	山本行秀 中島克紀 新宅(前田)ふさゑ
第4回 (昭和25年)	高久広雄 本多(三浦)利子	第28回 (昭和49年)	森本幸吉 磯野仁志 望月美孝
第5回 (昭和26年)	竹内正俊 小橋(中村)洋美	第29回 (昭和50年)	大崎靖史 今井和夫 城 伸幸
第6回 (昭和27年)	細川(山室)幸子 田中信明 坂田雅文 池野(小柴)文子	第30回 (昭和51年)	前田義弘 松岡 新 前野充司
第7回 (昭和28年)	中川 潔 橋本喜久男 竜田(高久)文子	第31回 (昭和52年)	鈴木利信 沼田勝彦 織辺貴士
第8回 (昭和29年)	前田 正 坂口 功 逸見(西島)文子	第32回 (昭和53年)	粟田貴也 山本真一 中西俊朗
第9回 (昭和30年)	田中敏夫 三木寿生 山田(喜多)一美	第33回 (昭和54年)	上山実之 金平孝司 新浜大平
第10回 (昭和31年)	高久重剛 山本皓二 小山(井沢)艶子	第34回 (昭和55年)	井上信一 梶本昌彦 宮本優子
第11回 (昭和32年)	大杉光謹 糟谷正彦 稲田(山本)純子	第35回 (昭和56年)	小島光博 福元裕二 古沢律子
第12回 (昭和33年)	平郡寧洋 山本(宮田)美津子 松本(福原)瞳子	第36回 (昭和57年)	穴田卓司 木谷英文 藤原英次郎
第13回 (昭和34年)	北浦孝雄 曾爾 彊 堀井(喜多)扶佐子	第37回 (昭和58年)	森本真司 今井正臣 山本智子
第14回 (昭和35年)	小原 武 平本勝章 福永(井上)貴子	第38回 (昭和59年)	三好太郎 青木文恵 綿谷 淳
第15回 (昭和36年)	河井隆博 三浦 武 松田(中作)文子	第39回 (昭和60年)	野村真紀 梶原 慶 長永育子
第16回 (昭和37年)	沢田 猛 船坂(橘)新子 木村(遠藤)順子	第40回 (昭和61年)	榊原一磨 中谷康孝 嶋崎浩二
第17回 (昭和38年)	五十嵐裕治 三宅英璋 栗林(佃)隆子	第41回 (昭和62年)	田中美妃 田原大輔 岡野健治
第18回 (昭和39年)	坂田月代 入江隆彦 平岡(神吉)和子	第42回 (昭和63年)	生田 聡 今井甲二郎 三崎史子
第19回 (昭和40年)	糟谷 豊 宮永光一 上月昭信	第43回 (平成元年)	小山直人 寺内美由紀 佐々木大祐
第20回 (昭和41年)	竹花(曾根)善子 前川信博 足立光平	第44回 (平成2年)	三枝 剛 岡本直弘 田中さおり
第21回 (昭和42年)	志野木武夫 吉孝孝明 藤本和平	第45回 (平成3年)	前田晴子 大西達人 塩田 修
第22回 (昭和43年)	樽井由紀夫 木沢誠名 東村泰美	第46回 (平成4年)	木下直俊 吉田智幸 杉谷美佳
第23回 (昭和44年)	畑 稚成 中田哲也 山本峰久 荒井 恵	第47回 (平成5年)	大上岳彦 渡部智寛 近衛秀栄
第24回 (昭和45年)	矢野宗司 田城一也 浜野守雄	第48回 (平成6年)	新富圭史 澤江亜希子 松尾恵女

(注) 年度は任命された時のもの

7 校舎配置図





編集後記

おおぜいの方々のお力添えによってようやく記念誌ができあがりました。ありがとうございました。

一読しますと我校の70年は苦難の連続であり、今もなお1500人もの人々が狭い校舎、校庭にひしめき合い、さまざまな不自由に耐えています。

この記念誌が先人たちの尊い汗と涙を伝えることによって、平和で真に豊かな社会をつくろうとする力を生み出すことに少しでも役立てばうれしく思います。

写真については「写真の双葉」の山田和成（高16回生）、山田育郎（高19回生）両氏にひとかたならぬお世話になりました。また、大日本印刷㈱のスタッフの方には企画の段階からいろいろご教示を賜りました。心より厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

記念誌編集委員会

委員長 齊藤茂子

副委員長 林 政子 末延宏子

委員 有吉雅則 福田隆興 藤原健剛

松中泰幸 三宅英男 山田拓史

清流70年

(平成6年8月20日発行)

発行者 加古川市加古川町粟津232の2
兵庫県立加古川東高等学校

編集 兵庫県立加古川東高等学校
創立70周年記念事業実行委員会

印刷 大日本印刷株式会社